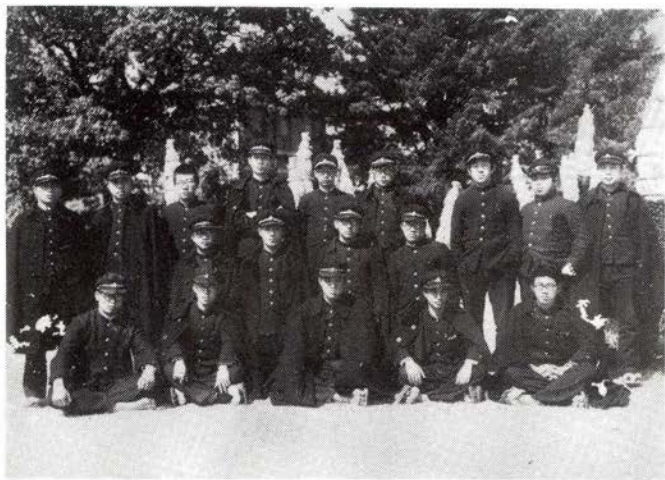


樹間の花



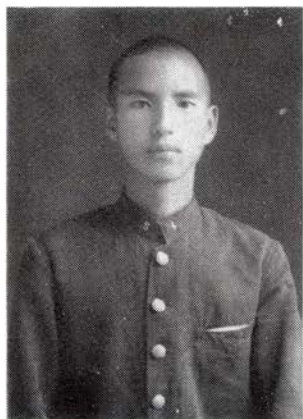
昭和51年7月撮影（59歳）



五高時代 本館前にて（最前列右から2人目）



東京帝大時代 明治神宮にて
（後列 右から2人目）



五 高 時 代



昭和31年8月第1回全九州学生青年霧島合同合宿(最前列左から5人目)



昭和48年8月 球磨川上流河畔にて



昭和四十八年三月 卒業記念 第1期時習義塾生



昭和37年1月 家族と一緒に

刊行のことば

瀬上安正さんが、昭和五十四年九月十九日、忽然として逝去されてから早くも一年有余を経過いたしました。瀬上さんの純一無雑な憂国の情に貫かれた御生涯は、日が経つにつれてますます気高く、私たちの追慕の念はまことに已み難いものがあります。

瀬上さんの六十二年の御生涯は、御両親、兄君がたの御教導によってスタートが切られたことと存じますが、私どもが交友いただいた旧制五高に御在学時点以降でお偲び申し上げます。瀬上さんという方は、想うところ常に一点の私もなく、ただひたすらにわが国の高専、大学の学風を憂えられ、また国の将来を慮るお心深く、同行同学の先輩、同輩に対しては限りない友情の誠心を捧げつくされ、さらには縁あって結ばれた後進に対しては、その志操情感を正しく持たしめるようにとの薫育に、日夜全魂魄を傾けられるのが常であられました。

ご本人の主たるご生活は、熊本県庁でのいわば中堅的な地方公務員（林野関係）に過ぎませんでした。その余暇活動においては、職域と全く縁のない熊本地区の大学生や若い社会人たちに對して、倦むことなき教育的感化を及ぼし続けられたのであります。その真摯そのものの懇篤な

指導の仕方は、並みの教職専従者たちの到底及び得るところではないほどのものでした。真の教育”ということが、教育職で生計を立てている人でなくとも、いかに広汎かつ充実した成果を挙げ得るか、それを瀬上さんは身を以て（さらには奥さまともどもご一家の総力を挙げて）、如実に実践して見せてくださった方でもありました。それは、現代日本における“稀有”のことであつた、と讃歎を禁じ得ないのは、あながち私独りではなからうと存じます。在りし日の瀬上さんに接した多くの人たちは、そうした瀬上さんの“息吹き”をお偲び申し上げることによって、これから先いついまでも、励ましを受けつづけ、勇気づけられていくことと思ひます。

私たちは有志の者は、生前の瀬上さんと御親交の深かつた方々の御協賛を得て、ここに御遺稿を『樹間の花』との題名で編むことになりましたが、その計画・立案・推進・編集・校正・発送すべての作業は、故人の御生前に直接薫育を賜わつた熊本近在の若い社会人ならびに学生諸君によつてなされました。故人から受けた数々の御恩顧に対し、せめて遺稿集だけでも自分たちで取り組みたいという声が、それらの諸君のあいだに期せずして起り、年余の月日を経てここに上梓に至つたものでございます。つきましては、編集事務に未熟な所も多々ありますことや、当初の刊

行予定期日がかなり遅れましたことを、ここに私からもお詫び申し上げます。

御遺族をはじめ多くの方々の御協力によりようやくして出来上りましたこの書物を、まず瀬上安正さんの御霊前にお供えいたしたいと存じます。ご協力賜りました皆さまに厚く御礼申し上げます。

昭和五十五年十二月八日

「瀬上安正氏遺稿集刊行会」発起人

小 田 村 寅 二 郎

(社団法人国民文化研究会

理事長・亜細亜大学教授)

目次

刊行のことば	小田村 寅二郎	1
凡例		10
論稿一		
自然の「中」の小鳥		13
日本林業の危機は克服できるか		17
危機に立つ日本林業		21
「ソバ」も輸入もの		27
林業の生産性		30
お父さんの魔法の水		34
紀勢紀行		36

続紀勢紀行	43
日本林業の生産性について思う	49
熊本の林業	52
自然保護と林業の展開	57
天草千巖山の植生	62
数の子と松たけ飯	65
松枯損跡地に植える主要樹種	67
石橋を叩けば渡れない	71
まつたけの人工栽培について	73
“アポロ”峠	78
伊豆の踊り子	81
論稿 一	
日本思想の一面	87
中東動乱とマタイ伝	89

東西文化と日本	96
東洋と西洋	106
東京紀行	116
現代日本の三不思議	120
日本に殉じた三島由紀夫氏	124
再び三島由紀夫氏の死を思ふ	128
ヨーロッパ紀行(その一)	133
ヨーロッパ紀行(その二)	139
ヨーロッパ旅行の折の歌	148
熊大の庭園樹	150
論 稿 三	
「全九州学生青年霧島合同合宿」——開会のことば	157
「第二回全九州学生青年合宿」挨拶	161
「第三回全九州学生青年合宿」挨拶——共通の広場を形成するもの	162

	協同研究……………	164
	「日本」病気のこと……………	167
	Xさんへ……………	170
	大学を良識の府たらしめよ……………	172
	狂った理性……………	174
	パパ付き、カー付き、田舎付き……………	176
	熊大のストはナンセンス……………	178
	熊大法文学部の措置に疑問……………	179
	戦後教育の反省の好機……………	181
	「國語の建設」を読んで……………	182
	「熊本国文研第一回合宿」趣意書……………	184
	病院にて思ふ……………	186
	四……………	
	論……………	
	山荘日誌……………	191

いろいろの事ども	197
五高だより ー東光会よりー	200
東光会消息	205
平家の落人達	210
大学の研究室より	216
書簡	221
年賀状 昭和三十四年～五十四年	253
短歌	275
附(年譜・弔辞・弔歌・その他)	363
あとがき(一)	405
あとがき(二)	413
編集後記	418
	加藤敏治
	徳永正巳

凡 例

一、遺稿のうち「論稿」は、故人の専門にかかわる林業関係のものを「論稿一」とし、故人が祖国日本の上に心を馳せながら託した文明及び教育に関するものを「論稿二」、「論稿三」とし、戦前・戦中に書かれたものを「論稿四」としました。

一、「年賀状」は、故人がその一年の出發にあたっての心情を吐露したものが多くので、特に一章にまとめました。

一、「書簡」は、故人が学生時代に母君、兄君に宛られたものを中心にまとめました。

一、「短歌」は、約九〇〇余首が残されていますが、未推敲のもの、文字不詳のものも多くこれらは割愛しました。

一、表記法は、原文のままにしました。

一、本書に収録した遺稿のうち、手帳や大学ノートから収録したものは、執筆の年月が確認できませんでしたが、その内容から推定し、執筆時期による配列といたしました。

論
稿
一



山林薬剂散布の折のスナップ

自然の「中」の小鳥

一、キツツキ

少年の頃、お宮の山にいくとよく人の気配がするので仰いで見ると、キツツキが熱心に松の木をつゝいて虫を探していた。近頃はキツツキは見ようとしても見られなくなつた。僕の子供はまだキツツキを見たことはないと言う。あの可愛いキツツキは森林の中から消えつゝある。

「十年たったマツクイムシ駆除の反省」という論文の中で、マツクイムシは二次性害虫だといわれ、先ず一次性の害があつて不健全な松林が生れ、之について、虫が大いに繁殖するのに適した別の原因がなければならぬ、と述べて居るが、全くその通りであろうが、キツツキという言葉が一句も述べられていないのを寂しく思った。キツツキは人の思考の対象からも消えつゝあるのか。

二、今年も燕は来るかしら

春が来ると、毎年のこと、今年も燕が来るかしらと心配になる。毎年その数が減っている燕はもう来なくなるのではなからうか。とにかく小鳥が減った。今年は僕の庭（熊本市）でウグイスが一羽一日だけ鳴いた。去年は、二、三羽来て何日も鳴いた。又昨年中は僕の庭を訪れた鳥の種類も増えた。これは保護区や禁猟区の増強等の施策が功を奏したなと思って何となく心の安まる思いがしたが、今年はウグイスが一羽で一日だけしか鳴かなかったので悲しい思いだった。

沢山の小鳥、犬、木その他目にとまらぬ沢山の生物と人間は一緒に住んでいる。そして之等は全て分離出来ない位からみ合って、生活しているのである。この総体を「自然」と呼ぶべきであろう。この微妙にからみ合った統一体としての全体の一部が崩壊するとき、どのようなことが起るか。一斉単一樹種の大面積造林が害虫大発生の原因であるとして、ヨーロッパでは経験済みであるが、我が国では松の単純林にて、松毛虫や松くい虫が大発生し、其他の害虫も続いて大発生している。之は育林技術で止められるものであるか、又、種として絶滅の一步を辿り始めたのであろうか。

従来は自然の抵抗力がそれを回復する原動力であったし、之に頼ることが出来た。今は文明が

自然の回復力を崩壊させつゝあって、僕には何かたゞごとではないように思われる。自然の崩壊が始まっているのではなからうか。

最近の日本では松はもう駄目だといって造林もしなくなったし、又歳月に耐えて英雄にも似た老松の姿も消えて行く。「松の木はもう駄目だ」ということと「人間はもう駄目だ」ということは、生物学的にはあまり変らないのではないか。

この「全体」の回復力の崩壊は「全体」そのものの崩壊にもつながるのではないか。過去に於いて絶滅した種は多いであろうが、現在のように短い期間の内ではない。氷河期が何回も来て、何十万年の間の生命の展開であってみれば、ほんとうに何事でもないのかも知れない。

三、自然の「中」の鳥

いつか青森県のリンゴの産地では、薬剤防除が徹底して、虫が居なくなり、リンゴが受粉しなくなったので、蜜蜂を飼っているというテレビがあった。植物が受粉しなくなったら一体どういうことになるであろうか。自然の調和は、一方では、呼吸により炭酸ガスを発生させるが、又他方では、此の炭酸ガスを元の酸素に戻す見事な循環が成立している。このように全体があつて部

分が生かされているのであって、部分の総和が全体ではないのであろう。

去年、穴の中で部落の人達が「総出」で水道工事をやっていて、発動機の排気ガスで五十数名が死んだのは記憶にも新しい。昨今のように各種の大气汚染が大きく取上げられると末恐しい気がする。文明―特に自然科学の発達は止めようがないであろうが、之が自然の破壊と結びついていくことも否定できない。自然の中の小鳥という題を書いたが、小鳥は此の自然の調和の中で生きていくのを感じる。「自然」Ⅱ「生物全体のつながり」において物を見るといことが、松くい虫や松毛虫に侵される松の木を見る場合にも大切なことと思う。従って生物環境の調査は、林学からは勿論であるが、国力を挙げて、否、全文明の総力を挙げて行うべきで、自然の調和というか、目に見えぬところで働いている自然の回復力を助長していく必要がある。

(「熊本の林業」昭和四十二年五月号所載)

日本林業の危機は克服できるか

日本林業の危機は最近にわかに叫ばれ始めた。現象面にあらわれた外材、内地材のアンバランスの増大、需要の異常な増大等の現象面について叫ばれる。然し、それは危機の実態、即ち日本経済の中において日本林業の果すべき役割の上から論じられる場合は少なく、「木材」が必要なのに「成長量」にすり替えて論じられるのも多く、急務に間に合わないのである。

先日、普及員の研究会で、「林業の危機は叫ばれるが、その危機は克服できるのか。どうすればよいか。言うならば普及員全体の命題がこれに集中すべきではないか」という質問を受けた。全くその通りである。又林業にたずさわる一人一人に危機の克服という命題の裏打がなければ日本林業は崩壊するのである。

かつて石炭や木炭が経済の主役からすべり落ちた。それは石炭人や木炭人が全体の経済の中で正しくその産業の位置づけをするためのリードが出来なかったために起った悲劇であり、林業が又その崩壊の道をたどり始めている。

日常の業務に追われて、自分の属する産業全体の危機を意識できなかつたのである。ここで述

べた石炭や木炭などの産業崩壊の原因はそれぞれ違っている、最近では社会党の崩壊も、全体の中の自分の位置づけが出来なかった、あるいは、別な言い方をすれば崩壊に対する危機感の欠落から来るものであろう。

日本林業の危機の実態について、本誌にその一端を書いたので、参照して戴くとして、日本林業の危機の克服は、言わば二つの問題にかゝると思う。

其の一 安上りの経営林道を作って、木材の単価を安くする。

其の二 備蓄的林業の考えを改めて、「経営する林業」に一人一人の気持を変える。

の二点に尽きると思う。

第一の問題は国も重い腰を上げざるを得なくなるであろう。

又本誌のさゝやかな僕の論文を見て、ブル林道を作った人がある。それは球磨郡上村の松本勇市さんである。早く紹介したいと思う。

特に今後個人の山とともに森林組合で、ブル林道を考える必要があろう。

第二の問題について、少し述べて見たい。

先日、グレープフルーツの問題で、僕の古い友達が来熊したので、僅かな時間ではあったが、

久し振りに話をした。

その際は彼は、「そうすると林業は保険的な考えだな。」と言った。子供が嫁を持つ時にあの山を伐ろう。耕耘機を買う時かの山を伐ろう。要するに予定された、或は、全く予定にもない不時の出費や、重大時機までの保険と考える。又大山持は自分の生活費が幾らかゝるから、要るだけ伐採すると考える人もある。

此のような考えを僕の友達達は保険的林業と考える。此のような考え方を備蓄的林業と言ひ、林業人の考えの大部分がこのように考へている。そしてそれは従来はそれで間に合つた。そして又充分な利点もあつた。然しこれからはそれで間に合わなくなつた。

林業ではヘクタール当り投下労力は、一番労力のかゝる拡大造林であっても、材木の一生の内二百人位の労働力しか必要としない。それが、三十年か三十五年たつて皆伐すれば五百立方メートルにもなる。単価一万円としても五百万円になる。このようなものを毎年切れるものを法正林といひ、大規模な所有者ではそれが可能である。然も投下労力は、二百日以下でよいわけである。このように法正林になつた林業は僅かで、大部分幼令林の多い不正な林業経営が多い。つまり「保険林業」である林業の集合体として、日本林業を考へて来た。それが従来考へ方で、それはそれなりによかつたと思ふ。

れはそれなりによかったと思う。

法正林を抽象的に論じてても、現実には不正な林業があるだけでどうにもならない。そこで、不正な林業から、毎年均等な収入を上げ、然も林業技術を損なわずに経営するためには、工夫がなされねばならない。この辺りに今後の問題がある。

更に、最近では経済のテンポが早くなって所得の格差がますます大きくなるので第一次産業に對して、特殊な保護が与えられ、漸く均衡が保たれている状態である。従って林業が農家の家計を「毎年」援助しなければならなくなる。

民有林は植付けた時から既に不正であるから、間伐をうまくやって、林業全体から「毎年」生産があがるように考えるのは当然であろう。経営をうまくやっている人は大概間伐上手である。間伐をやらない林業は林業と言えないであろう。

間伐についての僕の考えは、本誌でも書いた。更に詳しくは、林業技術第三三一号に書いたので、参照していただければ幸いである。

第一、第二の問題は、林業の体質を、経済の発展のテンポに合わせるための方策に外ならないのである。

危機に立つ日本林業

I 「木を伐ること」を止めた日本林業

「林業」とは木を植えることから始まるか、木を伐ることから始まるかで、論争される。当然「林業」が企業として成立している場合、その会計期間を一年とする場合には、伐ることと植えることは同時に入ってくるので、論争の余地が無くなる。或は合法的な令級配置にある山林でも、此のような事を考える必要はない。然し小規模経営や中規模或は大規模であっても、令級配置が不正で、特に幼令林が多いような民有林では、保続作業が出来ないと考え、そういう所から植林が先で伐採が後と考えるが、「自ら持てる資源の開発こそ、林業を、生きた林業たらしむるもの」と僕は考える。

此の前の林業新識二月号の巻頭言に熊本県で、農業祭の折、林業の天皇杯を初めて戴いた大淵昇太郎さんが、間伐について「一本のスギの木を伐ることも、我が腕を伐るような胸の痛みを感じます。……しかし、ほんとうの樹木への愛情や真の林業経営をしようとする人にとって、間伐は欠かすことのできない作業だと思います。小さな山持ちにとっては短期に収入を得たい、しか

し林はできるだけ長伐期で考えます。この矛盾したような考えを、私は間伐材をうまく売るところで解決しようとしています。」と述べて居られますが、これこそ、現代林業に対する切言であると考えます。

大淵氏は、主伐はしないで間伐収入によって、家計収入の大部分を得て居られるのである。僕は、此のような考えに対する林業上理論的な根拠について本誌三三二号に詳しく述べた。簡単に云うと、土地産業である林業は、毎年毎年生産を続けて居るので、これから最も適当な方法で、間伐して行けば良い。その林分の鬱閉を極端に崩さない程度に間伐して行く方法で（茂蔭脚八海 中野如脚）の不等式を満足させ、且つ、毎年収入をあげることであると思う。これには、一言で云えばその林分で年産された年輪数に相当する年輪数を間伐することである。

二宮尊徳という日本の代表的思想家の林業に対する考えとして、二宮翁夜話に出て居る所をあげて見ると、次の通りである。

（二百二十八）「翁山林に入りて材木を検す（此の後、材質や人の性について、傾聴に値する翁の意見があるが略して、育林について述べる。）又山林を仕立るには苗を多く植付べし。苗木茂れば、ともた供育ちにて生育早し。育つに随ひ木の善悪を見て拔伐すれば、山中皆良材となる物なり。

此抜伐りに心得あり。衆木に抜んで長育せしと、衆木に後れて育たぬとを伐取るなり。世の人育たぬ木を伐る事を知りて、衆木に勝れて育つ木を伐る事知らず。縦令たとえ知るといへども、伐る事能はざる物なり。且つ此抜伐り手後れにならざる様、早く伐り取るを肝要とす。後るれば大に害あり。一反歩に四百本あらば三百本に抜き、又二百本に抜き、大木に至らば又抜き去るべし」とあり、深い経験をとおした大地の声かも知れない。

二宮翁夜話に現われた林業の考え方は又言い換えて見れば、「木」に聞き乍ら間伐をすると云うことであらうかとも思う。

話を本題にもどして「何故日本林業は木を伐ることを止めたか」ということについて考えて見たい。

其一、大規模山林所有者は適正木を伐ることをやめた。即ち林木は高く、その一人当り生産費は安く、個人生活を充足するには一定額で足りる。然し、個人の相当多額な消費があつても、それを遙かに越えて山林は毎年生産を続けて居る。此の蓄積は適当に伐採され、国民経済に還流されれば良いが、そうでない場合休眠資源と言ひ得るかも知れない。

其二、中小規模の林家でも、殆んど間伐をしない山が多い。中小林家は、家計に於ける林業収

入の比重をより大きくして、所得の増大を計るべきで、全国で中小規模林家の所有山林の二、三割位は二十年以上で間伐が利用出来る林令である。僕は十五年生位から間伐に着手したが良いと思う。之等から毎年間伐収入を上げるよう工夫したら良いと思う。間伐の出来るようになった山からの収入で山林への再投資と、生計費への吸収が考えられる。

良く間伐で赤字になるなど云われるが、それなら主伐でも決して大きい利益は上らない筈であるから、小型四輪位どんどん入る経営林道などの工夫を行って、もうかる林業となすべきである。

此のためには森林組合や、市町村等で小型ブルドーザー、林業用ジープ等を購入することにより、経営林業の配置を考え、安価な経営林道を導入すべきであろう。県有林ではこの実働に入っている。

平坦地区の公共投資——道路や農業等に於ける——がどんどん進むにつれ、山岳林に於ける公共投資は遅々として進まない。此処に日本林業の宿命がある。従って農地改良等の国家投資のように、山林に対しては林地の地利級改良事業という国家的見地に立って、森林組合等が購入する場合、小型、大型ブルドーザー、あるいは山林用ジープなどについて高額補助を行うべきであろう。

何となれば、森林組合は此の様な、大型機を導入するには、資本装備が充分でないからである。

II 輸入材の増加

農林省調べで林材新聞に発表された四二年十月の見込量は次表のとおりである。

(表・省略)

然して、その輸入額は、石油に次いで第二位に上ったと云う。外貨の逃避もさること乍ら、林業所得に寄与すべきものが寄与しないことになることを併せて憂えるのである。

数字として挙げると、何でもないが、林業県と謳われる熊本県においても製材工場を直接見ると、中には外材許り入って居る工場をも見受けるし、又工場に入っている外材の量は急激に増えつゝある。

かつて、林業基本問題答申案で、日本の林業が、日本経済発展のネックになる可能性を指摘しておったが、その様な危機に到っている様に思われる。

林業は一人当りの生産性は、農業や畜産などより遙かに高いと言われるので農家所得の中で、軽微な間伐がひんばんに行われるように安価な経営林道を計画し、集約的な林業に移行すること

が必要であろう。

支那より古く伝来し、日本歴史の長い間読み続けられた本に「大学」というのがあるが、その一部に次のように書いてある。

「この故に君子は徳を慎む。徳あればここに人あり。人あればここに土あり。土あればここに財あり。財あればここに用あり。」

徳は本なり。財は末なり。本を外にして、末を内にすれば、民を争わしめ奪ふを施す。」とあるが、今の時代が險悪な時代になったのは、本と末とが逆転した結果であろう。

「人あればここに土あり、土あればここに財あり。」
読んで居て、しみじみした味わいを覚える。

（「熊本の林業」昭和四十三年七月号所載）

「ソバ」も輸入もの

「ソバ」は、まさかと思ったが、玄ソバの半分は輸入だという。玄ソバの年間消費量は五万トンで二万五千トンは輸入品で、中共、アフリカ、カナダからの輸入である。ウメボシ、コンニャクイモ、ショウガも外国から輸入されるのだという。

昨年の石油の輸入は、一昨年より二一・四%もふえて一億二千六十二万キロリットル、十四億五千七百万ドルの外貨が支払われている。

石油に次ぐ第二番目の輸入品は木材で、昨年は二千八百万立方米、九億二千四百万ドルも輸入された。前年にくらべ数量で二九%、金額で三八%の増加だ。木材輸入がふえた原因は、いうまでもなく、国内材が十分に確保できないことにある。しかも需要の伸びがそれほどでもなければ、どうにかツジツマを合わせていけるのだが住宅向けや製紙用パルプの需要がめざましく伸びているため、どうにもならない。

以上は「輸入亡国の兆」という題で書かれた時事通信の記事の概要である。さて林業にたずさわるものとして、色々考えさせられることが多い。

その一つとして木材の輸入税を上げて輸入をおさえようとの説が出て来る。

然しこゝで考えねばならないことは、日本の工業化が進んで、その輸出によって、国の収支がまかなわれ、木材の輸入は別として、開発途上の国々の東南アジア等からはこんな一次的な資源を輸入する外に方法がないのである。輸入を単に抑制することは良くないのである。

その二、いつまでも外材の輸入は続け得るか。これについては、原始林の開発が進んで行って、三十年位でその資源は涸渇するだろうという。そして原始林開発後の二代目造林については、考慮は払われていないのである。

その三、そこで今後三十年位の間に、国内資源開発について十分な目途をつける必要があるろうし、木材生産の基盤を整備する必要があるのである。

その四、エネルギー源、その他各方面で石油化学の花ざかりであるが、その石油資源はいつまで続くかというたと六十年位で涸渇するという。その頃までには、エネルギーとしては原子力エネルギーが開発されるであろう。

然し、衣、食、住一切の生活面に侵入した石油化学の原料は一体何を以て代替するかである。

その五、石油資源が何から出来たかは不明であるが、有機物から出来たものであろうといわれ、

将来石油資源が涸渇する頃には、石油化学を飛び超えて、有機物を最も大量に蓄積し、又再生産を続ける木材から直接必要な物資を生産する時代になるだろう。

その六、木材の価格は、騰貴を続けている。輸入材が大幅に入ると一時横ばいが続き、しばらくすると、輸入原価が高くなるので、又木材価格は上がる。原始林の開発が次第に奥地へと進むためであろう。

その七、木材が高くなれば、その代替材は益々その領域を拡大するのであるから、急激に高くないで、出来るだけ漸を追って高くなる方が良い。価格の安定は経済の安定成長にとって最も重要なことである。

その八、木材を急騰せしめないためには生産原価を安くする必要がある。そのためには木材の生産原価を考えて見る必要がある。

此の木材の生産原価の大部分が運賃だ。早い話が、原始林を開発して日本迄持って来る場合は、伐採費は別として其の他の大部分は運賃である。内地材についても同様に木材生産の大部分は輸送費に喰われてしまう。三十年もかゝって育てた木材の価格の中で、造林者の手に入る配分比率は決して大きくないのである。

その九、米材やフィリッピン材の丸太輸出を輸出国で抑制しようとする意味は、中間の半製材賃を自国内に留保し、更にフィリッピン、台湾等では、合板工業を起して更に付加価値を高めようとする事で、それもまた無理からぬことである。

以上述べて来た項目で、その三、及び八の解決策及びその他の項目とも関連して、木材の生産を合理化するためには本誌七月号に述べたので参照して欲しい。

重複するが敢えて言うならば、安価な経営林道（ブル林道と言っておく）を入れて鉄索や索道とのコンビで公共的林道網の不足を補い、平坦地の公共投資に遅れないよう、林業の毛細血管を国土の隅々迄導入し、日本の国土全部に生命力が溢れるような施策の必要があるのである。

（「熊本の林業」昭和四十三年十一月号所載）

林業の生産性

今日の新聞に「学長選挙させぬ、熊大全共闘総決起集会で決議」という見出しがのっている。どのような理由があるにせよ学長のいない大学を想定する大学生の理性は狂って来たらしい。

最近の学園紛争を分析する新聞社も、大学人（？）も、文部省も、学園紛争は世界的風潮として済ましたり、或は人間疎外で済ましたりする。日本の教育自体を考えることなしに、外の世界を持ち込んで平気でいるこのような「物の考え方」がおかしいから問題は少しも展開しない。

学校教育が左に傾いて実行されるのを見過して、臭いものには蓋と称してよけて通っているのである。

或る有名大学の経済学部では、マルクス経済学以外の講座が全くないという。マルクス経済以外の教授はいないのだろうか。大学の学科がこのようなことであれば、マルクス学説だけが横行するのも当り前であり、これをチェックする方法もないものだろうか。

臭いものに蓋をしておいて、制度だけいじくりまわす発想法も、決して本質的解決にはならないのである。

古典「大学」に、「本来、終始、先後する所を知らば、道は近し。」とある。本末を明らかにしないで、末にのみとらわれるのである。先後を弁えないで、物を考える。

本（ホン）の字は、**𠄎**が古い字形で、**𠄎**と下の意を表わす丁とからなり、音は根（コン）からきている。木の下の部分の意と訳してある。

もっと根本を大切にする必要がある。林業でも、従来幹には意識が集中しても、根についてはあまり関心が無かった。最近漸く根や土壌について明らかにされつゝあることは喜ばしい。

然し又反面、BHCや除草剤がたくさん使われていて、それにより土中の目に見えない所にいるたくさんの虫が死んだり、藍藻等の微生物に大変な影響を及ぼしているのである。

植物の根は、このような目に見えない所に住む住人達によって培われているのであって、ほんとうはこれ等の影響も調べなければならぬのである。生命の世界、生物の循環は水も漏らさぬ循環過程であり、我々の理知の狭さを思わされるのである。自然の環境の因子はあまりにも多様であり、分析の煩にたえぬであろう。或時、庭の害虫を駆除させてくれと、果樹園を消毒する人が頼んで来た。そしてその年の秋、松の葉が皆枯れたのでよく見たら無数のダニが発生していたのである。恐らく、ダニの天敵を殺したのかも知れない。

果樹や農業では早くから根についての研究が盛んであって、日本農業の展開は肥料の研究から始まったのである。そして土地生産性の向上の面で欧米の労働生産性に中心をおく農業と対比されるのである。

農業では、最近労働生産性向上の面で努力を払うが戦時中の食糧統制という制度の欠陥には目

を閉じるか、口をつぐむ空気がある。米の過剰生産が、需給調節作用（市場の調節作用）と無関係になった所の欠陥を正視しつゝ問題解決が計られねばならないのではなからうか。自主流通米が一応その突破口と考えられるが。

林業では土地生産性の向上という考え方は意識されたものではないが、これに終始していた。精英樹の問題は、土地生産性の向上を意識の上に乗せたことになるのである。

林業は本来労働生産性の高い産業である。然し、如何に労働生産性が高いかは計算されていない。何とかして此のところを解決して見たい。

先日学生が、船の上で生活しながら東南アジアを視察した。此の船はフィリピンの港に木材を積みに行ったのだが、未だ電報もついていなかったといつて、結局其処の木材は積まずに帰つたとのことである。木材が世界的不足物資である理由は、原始林の伐採、輸送という事業に依存し、生産のためには天然に委せるということにある。

現在のように情報時代といわれる時代に船の方が、電信よりも早くつくつとつというように資源が偏在しているのである。

そのように極端な場所でなく、内地のように造林された林業であっても林業の労働生産性は甚

だ高いのである。

(「熊本の林業」昭和四十四年十月号所載)

お父さんの魔法の水

高校の末っ子に小さな丸いハゲが出来た。自分も知らなかったそうだが、水泳の時、級友が見つけたという。男の子でも随分気を使ってハゲ隠しをやって居た。

早速僕は、「木錯液を塗って見ろ」とやったもんだ。所が「お父さんの魔法の水」が始まったとやり返された。畜産試験場では牛のハゲに良く効くことを実証しているし、その後犬のハゲに塗ってやったら案外早く良くなってしまった。こんなことを背景としてのハゲの妙薬とこちらは思っているのである。然し子供等は、又もや親父の魔法の水が始まったと思っている。

病院に行つて薬を貰つて塗り、注射もして貰つたが仲々治らない。その上別な所に小さく二箇所はげて来た。こちらは思うツボで、漸く妥協の末二箇のハゲの中一つだけ塗らせて貰うことになった。然し木錯液は臭い。一、二回塗つたが、止めてしまつて結局木錯液を塗るのは土曜、日

曜ということになった。

四、五ヶ月して小さな二つのハゲが直りかけた。大きいハゲはまだ直らない。さて、木錯液が効いたか、効かないか判らぬことゝなった。木錯液を塗らないで葉だけ塗った所も生えて来たからである。それならば注射が効いたのではないかと考えられるが、一番大きなハゲには生ぶ毛も生えていないのである。そうすると、自然に直ったというのが有力な気もするのである。聞いてみると女の人には案外ハゲが多いらしいが、髪の毛でかくしているので判らないのである。女の髪の毛は不思議な威力と作用を持っているなあと感心した。

十年許り前の版の森林家必携には、木錯液には百数種の物質を含んでいると書いてあったが、聞く所によると、今では二百余りの物質を含んでいるらしい。したがって僕には植物の生命力のエキスがこもっているような気がする。こゝらあたりに「お父さんの魔法の水」というのが出て来る根源があるかも知れない。

魔法の水の脱臭効果は大きい。特に便所の匂い消しには最適である。「一人一滴、匂いが消える」これが便所の匂い取りの秘訣である。シャンプーとか、そういったものの容器に、生の木錯液を入れておいて、一家四人おれば四回チュツとつまめば、一日中匂いが消える。五回、六回す

れば今度は木錯液の匂いがする。これを毎日くり返すのである。

木錯液のいろんな効果については、指導所の業務報告に書いてあるので省略するが、今後の利用面における大きな役割の一つは、燻製液としての利用や、カマボコ、チクワ等の加工に威力を発揮するのではなからうか。

桧等の苗畑にまけば、苗の生長促進の効果は大きい。

(「熊本の林業」昭和四十四年十一月号所載)

紀 勢 紀 行

三重県庁を訪れた。S氏はくわしく三重県林業事情を話してくれる。特に尾鷲地方の桧は、熊本の紅桧が入ったものである、との説明であった。又、後で、尾鷲地方の孟宗は熊本から入ったものである、とのことであった。

更に大阪事務所では、蜜柑は紀州蜜柑というが、以前は八代蜜柑とっていたとの話である。三重県と熊本県と甚だ遠いが、ほんとうにこんな話の中で、三重県と熊本県との近さを覚える。

三重県の木材は自場産材が三割、九州産材、鹿児島、宮崎産材であろうが、船舶輸送されて約三割、外材四割位とのことで、産業の結び付きの深さを思うのである。と同時に日本の経済という一つの運命共同体の中で、熊本の林業も三重県のそれも同じ宿命とたたかいつゝあるなあと思うのである。

僕はS氏に、外材が沢山入って来て製材工場等が、外材に適應した姿勢に模様替えされていけば内地材を取扱う工場が減少し、内地材の消費が加速度的に少なくなってくるのではなからうかと言ったところ、三重県から内地材取扱者の補助をしたらどうかと、農林省に申し出たが、だめだという話であったとのこと。

僕は内地材が安くなりつゝあり、又、内地材の出荷が減少しはじめたことについて、諸戸林産方式で、出材費や造材費も安くあがるようにすべきではなからうかと考える。森林組合が諸戸式方法を取り入れねばならないのではないかと思うし、又、里山開発や林構事業でもこのことを中心に、第二次林構を考えるべきではなからうかと思うのである。

日本經濟の飛躍的發展に対応する林業の展開はどうすればよいか。

吉野林業の影響を受けて、密植造林がおしすすめられている三重県では間伐材の市場を県森連が開設したという。

そして、林道予算を本年から、一挙に二倍にしたということである。さすが林業県三重のさわやかな決断を見る思いがするのである。

伊勢神宮

さて、話変って、伊勢神宮林について考えたい。

神宮林の内、三つの要素がある。その一つは既に知られている神域林で、九十七ヘクタールあるという。伊勢湾台風の爪跡は今尚大きく残って、かつては空高く、今より更に深く杉の大木が繁って居たのである。一番古いので、六〇〇〜七〇〇年たったという。あまり大きく穴があいた所には松の二年生位のものを植えてあったので、熊本の鉢こぎ造林の話をして、できるだけ大きい木を植えたが良くはないかと意見を述べておいた。

第二は風致林一〇〇〇ヘクタールで、これは天然林。第三が、二〇年に一回行われる遷宮のた

めの用材林で、四四〇〇ヘクタールある。山林会で毎年募集して奉仕団を編成して春先き植林をしている。若い人達の積極的奉仕を願うものである。

さて、この二〇〇年に一回の遷宮用材を調達するには、少なくとも二百年の松の老令木が必要と
のことである。これはかつては木曾の御料林から調達されたものであった。

今回既に準備中の遷宮は第六〇回で、終戦後一回抜け、それ以前にも一、二回抜けているとの
ことである。一二〇〇年より数十年前まで継続して来たものが、我々の時代になって遷宮用材を
調達できなくなったなど言うべきでなく、御料林を引継いだ宮林局は、其の御用材については責
任を以て出材すべく、その宮林法を継承して行くべきである。

今回の第六〇回の遷宮だけは何とかなるが、それ以後については見透しがないとのことであ
た。

林房雄氏は日本の歴史は、その遷宮の都度、丁度二〇年位にその生命力の飛躍的發展をする
ということを証明しておる。そして、第六〇回の遷宮の時には、日本の真価が世界に明らかになる
時であろうことも既に予想されている。

戦後の灰燼の中で、フェニックスの如く甦る今日の日本の姿を考えた人があったであろうか。

そして特にインテリゲンチヤと自称する人々の中に今も尚敗戦ぼけのまゝ、日本の新しく生れ変わった姿を直視しようとせぬ人も多いのである。

僕は日本民族の深層心理学に、新しい学問の方法を見出した林房雄氏に深甚の敬意を払うものである。

諸戸林産株式会社

多気郡宮川村に諸戸林産株式会社がある。諸戸民和氏が現主である。彼は富士山頂にリーダー基地を作るために三台の二トンブルが活躍した話を聞いて、これを自分の山に使えないはずはないと思ひ決めて実行した人である。

ブルを使って、新しい林業のタイプを作り上げた人達に、石原産業と宮崎大学の演習林がある。この三つがブル林業の三羽鳥であろう。そしてこの三羽鳥が考えることは期せずして同じことになつてゐるのである。

そこで新しい林業とはどんなものか、これ等の人達の共通した基本的考えを集約して見る。

1. 山林内に自由にトラックやジープが入ること。

2. そのためには安上りにできるブル林道を入れること。
3. 側溝を作らず、できるだけ水を集めないこと。
4. 水が車のワダチに副って流れるので、必要な箇所に横断排水溝を作る。
5. 雨の日には林道を見廻って、必要な事を見つけ出す。
6. ブル林道は山の中腹か、山頂部に作るが良い。
7. 集約的な林業を行う。特に間伐が林業の推進役となる。
8. 主伐する場合小面積皆伐となる。
9. ブル林道網は少なくとも三〇〇ヘクタール位の単位で考える。
10. 林道密度はヘクタール当たり四〇メートル×六〇メートル位である。
11. 諸戸産業の場合は、三菱FT-2（林内作業車）を搬出のため特に考案して利用している。
12. 宮大は補修のため、アングルドーザ、ダンプ等を使用し、三人位で道路を作り、出材している。

諸戸林産では労務提供をする人々の会社を作っている。一〇〇名位の人足により請負制で実施する。過疎化が森組などより進まないのは、仕事が快適で賃金も多いからであろう。又、苗木作

り等をうまく配分して、収入の道を講じている。

石原産業も労務の近代化に力をそゝいでいるのである。石原産業も宮崎大学も道路の幅員は、4メートル以上のトラック道であるが、諸戸林産は主林道と副林道に分け、主林道は4メートル以上であるが、副林道は2・5メートル以上で、延長はほゞ相半ばするが、主林道が少し多い。何れも、常に又、凡ゆる隅々に到るまで、創意工夫がこらされているのである。

常に材木を相手とし、林業基盤の整備に心を尽すのである。木に聞き、林地に聞き、創意工夫を続ける。これが新しい林業を作り出すのであろう。

果樹園では、配水のため、定管配置をやり、或は果実の運搬のための施設を設ける。このような施設に当るものが、林業では、高密度の路網に当るのである。農林業の工業化とか、技術革新とかは、高密度の路網の配置を前提としてのみ成立するのである。

林内まで自動車やオートバイで通い、大型、小型の色々な機械を持込んで作業をする。

ちょっと重複するが、従来の林道は水脈と並行して考えられて来た。水脈は何億年の水の浸蝕によってできたもので、この水脈を避けると、大地というものは比較的なだらかな起伏になってしまうのである。

従って、ブル林道は、水脈の分布と反対的の分布をするものと思うのである。それでは何がブル林道の阻害因子となるか少し考えて見る。

1. 日本の林地はコマ切れの所有権の集合体で、経営についてもさまざま考え方によって運営されている。これを貫いて、高密度の路網が配置されるには、沢山の人の納得を必要とするのである。

2. 大企業の所有地、或は国や公有地等は比較的奥地にある、これに到達するまでかなり遠い。

3. 従来の谷筋を通る林道から、中腹や峰筋に林道を引上げるために工夫を要する。

4. 国や県等のバックアップが足りない。

(「熊本の林業」昭和四十五年四月号所載)

続 紀勢紀行

尾鷲林業

尾鷲林業は土井八郎右衛門氏(襲名)が約六千町を所有し、これに松を植栽した。吉野地方の

密植する林業技術が加わって、地域の林業を形成した。

約四万ヘクタールにわたり、植付時六千本と一万本の松の密植造林である。密植であるから、枝打と間伐が中心的な仕事である。適宜に七メートルの高さまで枝打をするので、節のない柱が出来る。伐期は大體四十年である。

最近の松の値上りと、普及員の指導が効果的に作用して、徹底的な枝打をやっている。枝打の器具としては手斧の刃を少し外側に曲げてあるため、枝を打った跡が中凹みになるといふ。こうすれば、皮をかぶるのに二年は早いといふ。

又、此の斧は仕上げ砥石で切れ味を良くしているのである。中には二本持って行くものもあるとのこと、常に砥石持参で、ときながら枝打をするのである。

枝打ちする為に、三メートル位の長さの小角材を工夫し、尖端近くに直交する鉄棒をはめ、どっちをかけても木にかゝるようにし、足には二本の鉄の爪をつけて、滑らないようにし、持ち歩くにも便利なものを使っている。

七メートル迄、枝打をするのであるから、梯子の足りない時は上まで登って、上から下へ枝打ちを行いなから下りて来るのである。枝打ちをするのにも徹底的に工夫している。こゝでも創意

工夫が積み重ねられて、一つの林業を創り上げていくのである。

僕には山といえ、小国のように杉鉾が整然と並んだものしか考えられないが、こゝでは幼令林も壮令林もべったりして、じゅうたんでも敷いたようで奇異の感がする。

尾鷲は昔は杉だったものが、二回、三回目の造林が繰り返されたために地力がなくなり、嫌地現象を起し、遂には桧が全面を占め、更に、地力が悪くなって松を植えつゝあるということを知っていた。

然し、近くで町有林というものが雑木林で覆われている所のようにすでは、土地そのものが瘠せているのではなからうか。以前は杉を植えても、余り太らないので自然桧に代って来たのではないか。

Y氏の話では、山が急峻な上に、甚だしく多雨のため、養分の流亡が激しくて土地が瘠せて来るのだらうとの話である。

土地は瘠せているが、枝打と間伐の繰り返しを行って空間の最大の利用を行っているのである。こゝに養分吸収のための根の理論がもう少し巾を拡げる時が来るのではないだろうか。

こゝでは掃除刈りと称して、徹底した下刈が行われるので、桧の根が露出して来る。そこで裸

地化現象を防ぐために、下木植栽の試験を行っているとのことであった。いったい土壌とは何なのだろうか。A層とは、B層とは、又C層とは何か。

一般に林地肥培で賞に入るのは、たいがい本場作跡だという話である。

A層というのは、動物や植物や下等微生物等が、その上に立つ林木と共棲する世界ではないのか。B層とは更に生物の少ない世界であり、C層とは生物のいない世界ではないのか。

A層とは小動物や昆虫等により、常に耕耘される場ではないか。木場作跡というのは、このような土壌形成がうまく行われた所ではないのか。

林業とは、炭素同化作用を行う空間の制禦と、土壌をうまく形成して、生物相互の循環的連鎖協力の世界を創り出し、残存する一本一本の林木をして生育に最も最適な状態を維持し続けるということではないのだろうか。

尾鷲林業とは、空間の制禦に成功し、土壌作りについて更に一步突込んだ創意工夫がなされなければならぬのではないだろうか。

那智の滝

弘法大師開山といわれる那智の滝の自然林は美しい。然し伊勢神宮の神域より年が若いようだ。こゝも老杉が高くそびえ鬱蒼としている。

そして、僕は伊勢神宮の偉容が厳然として、仏教文化をリードして、民族の自覚を常に促したのではないかと思う。英国の歴史学者トインビーは、一つの文明は他の文明を亡ぼす迄、自己拡大をするというが、日本の場合、伊勢神宮という不思議な存在が仏教文化と対立し乍ら、相あざないつゝ双方が高められて来たのではないかと思う。ちょうど僕等の少年の頃、パリのエッフェル塔が憧れのようなものを作っていたのに、それより高い東京タワーが出来た時に、エッフェルの夢が崩れおちると反対に、伊勢神宮の不思議な存在はあくまで他の何物も越えることの出来ない存在として生き残って来たようにも思われてならない。

トインビーの名を出したので彼の伊勢神宮観を紹介しよう。

トインビーは、東洋文明が「日本」に綜合されているので、日本文明即東洋文明と考え、西洋文明に対する東洋文明（日本文明）と考えているが、このトインビーは日本に来るたびに伊勢神宮に参拝するのである。

彼の新聞記事の中で、伊勢神宮はパルテノン以上の世界最大の芸術的建造物であると書いていた。その時ハッと思ったので今でも覚えているが、伊勢神宮に来て、彼は一部の建築物だけを考へてはいなかったのだと思う。全体の配置が、山を含め、川を含め、天地の間に屹立する杉の大木も含め、その間に配置された神殿の壮大な構想を伊勢神宮と考へて居るのだと思うのである。神域林で不思議に思うのは、杉の大木はあっても松や桧の大木は見当らなかつた。那智の滝の天然林も外観からはそんな気がする。

追記

四月号登載「紀勢記行」(その一)に伊勢神宮林のことについて瀬上氏が述べておられるが、氏は神宮林の項に、いささか不満足な点があつたとして、左記を追記するよう申し込まれたので掲載します。

一、大きな穴があいた所(立木のない部分のこと)には、ヒノキ二年生くらいのものが植えてあつた、と簡単に述べたが、伊勢湾台風被害跡地には十年生位のものを植えたものが、現在では相当成長しています。他に二年生位のものもあるようです。

二、遷宮については、持統天皇の時に第一回遷宮が行われたが、戦国時代に、天武天皇の時代

に決められた式年遷宮の儀は必ずしも実現できなかったこともある。昭和四年、第五十八回の遷宮がとり行われたが、第五十九回は大東亜戦敗戦後のため四年おくれて、昭和二十八年に行われた。第六十回は昭和四十八年を目標に着々と準備中であります。

（「熊本の林業」昭和四十五年七月号所載）

林業の生産性について思う

林業の生産性について少し考察を加えて見る。林業をとり巻く経済環境の変化は、あまり急激であるが、林業がこの環境の変化に即応できる体質でなければ、林業は崩壊する。

そこで林業がそのような環境の変化に対応し得る可能性をも探りつゝ、問題の考察を進めたいと思う。

林業の危機について本誌第三六〇号でも述べたが、外材が増え、内地材の生産が横ばいから減少に転じた時点が昭和四十三年であって別表2のとおりである。この転換点の存在が、日本林業崩壊の前兆であることに疑問の余地はないように思われる。

そしてこのポイントは、他の因子の変化の模様からも、更に強く印象づけられる。即ち外材の

輸入量は増加する要因を持っているし、内地材の生産量は減少する。木材の総需要量そのものは益々増加の一途を辿るので、総需要の中で内地材の比重は軽くなり、その価格は低下の一途を辿ることになる。このことは生産量の減少と価格の低下と相乗的に作用して益々此の傾向を強めていくのである。

そこで林業の生産性の向上を図らねばならないが、この生産性の向上を、土地生産性の向上、労働生産性の向上、資本生産性の向上の三つの観点から見つめてみる。

土地生産性などという聞きなれない言葉であるから、農業と比較して見ると判り易い。米作りについていえば、日本の米作りは土地生産性の向上を中心として来た。所有反別が小さいので、反当収量を引上げること骨身を削った。明治初年から約百年の間に反当収量は倍になった。然し農家の耕作反別は相変らず五反位である。これに比し、米国の農業はトラクター農業で一戸当り反別は日本の五十倍、アラスカやオーストラリヤは百倍の反別である。つまり機械化して一人当りの仕事量が甚だ大きいのである。このような農業は労働生産性の高い農業といえるのである。そこで米作り反当収量倍増の過程を辿ってみると、明治の終り頃、施肥技術の確立（肥料の工業生産技術を含めて）が第一段階、昭和十年頃品種改良技術の確立が第二段階、昭和三十五年頃

から農業機械の普及が裏付けして、三チャン農業といわれたにも拘らず、労働生産性の向上がこれをカバーして、遂に万年豊作となり昭和四十三年から過剰生産になって来たのである。

林業についてこれを見れば、土地生産性の向上は、施肥技術の確立と品種改良により最後に病虫害防除という方法によるのであるが、木材の需要増大に直接的に影響しない。保育に於ける労働生産性の向上も当然実施しなければならないが、土地生産性と同じように「木材」生産に直接には影響が及ばない。こゝに農業と林業は同じ土地産業といっても根本的に違う所である。

木材生産量の縮少と値下りの相乗効果を共に減殺するための方策は、労働生産性の向上をもたらず水準の高い技術でなければならない。

林業の蘇生の唯一の方法は、高密度網による林業のモーターゼーションであろう。我々に残された時間は僅かである。瀕死の林業に対するカンフル注射がブル林業の開始以外にはないように思われる。民間林業は自力で立上り、官の力を最大限に利用し、官は民間の心を察知し、官民総力を發揮し、物心両面の総合力を發揮すべき時であろう。

資本の生産性の問題については、別の機会にゆずることとするが、ブル林業を展開するためには、森林組合が、一肌脱ぐ必要がある。これは資本の生産性と関係するもので、大型機械をフ

ル運転するには、大山林所有者か中小規模の場合は森林組合で所有する以外に方法がない。

(「熊本の林業」昭和四十五年十月号所載)

熊本の林業

第一節 三町歩の林業経営

三町歩ぐらい山を持っているので、この経営について注意なり何なりお願いしますという葉書が舞い込んだので、一つこの三町歩の山林について、少し考えて見ようと思いました。十五年生以下が二町、二十年生以上が一町歩あると仮定して、私の考えている「林業」について少し書いてみることにします。それには次の二つの仮定が必要です。

第一の仮定。高密度路網営林法で営林する。

どの林地も間伐材が自由に出材出来るように、トラックの入る経営林道を入れる。宮崎大学の青木先生は一ヘクタール当り五十メートル位で良からうと言われるので、それに基づいて計算すると経営林道開設費は一メートル当り七万五千円となる。

(3町歩×50 m = 150 m 1 m当り500円×150 m = 75,000円)

第二の仮定。年輪定数法で施業する。

果樹園では毎年果実を販売する。然し、林業では果実と果樹とは同一物である為、果実にあたる部分と、果樹にあたる部分とを分離する方法として考えたのがこの方法です。つまり果実にあたる部分とは、一年間に一本の木は一枚の年輪を生産する、生産された年輪の数を除去することが間伐で、その間伐材は丁度林業における果実にあたる部分です。

第二節 高密路網宮林法について

前述の如く、高密路網宮林法とは宮崎大学の青木先生が名づけられたものですが、この欄で幾度か私はブル林道という名前で書きました。青木先生の高密路網について説明すると、中腹とか尾根筋にブルドーザーで道を作る、中四〜五メートル位のトラックの入る道を一ヘクタール当り五十メートル位入れる。一つのまとまりが三百ヘクタール位あると都合が良いと言って居られるので、出来れば何人かが協同して作る方がよからう。

この欄で紹介したのは、一つは八百ヘクタール位の共有山林に自力でブル林道を入れて、ブル林業を実行している松本勇市氏で、もう一つの例は鹿北町のブル林道でした。一方は大規模所有

者であり、鹿北町は小規模、大規模を問わず町有のブルが林道を作って行く仕組でした。鹿北町では一メートル当り千円から、安いものでは百二十円位のもありました。千人力のブルドーザーを林道密度を上げるために味方につけて、間伐木が容易に搬出できるようにします。

第三節 年輪定数法による施業について

年輪定数法とは私が名づけた施業方法です。この考えは、日本中の林分収穫表から判ったのですが、各地夫々の収穫表の一等地、二等地、三等地と地位毎に林令とは無関係に年輪数が一定であるということでした。杉を理想的に施業して行くと、その年輪数が一定になって来るのです。そこで年輪数を一定ならしめて積極的に林業を行うのです。つまり一年間に「生産される一年輪の数」を除去することが、残存林木にとって最適状態を維持することになるのです。

一年一年材木は高さと大きさを増すので、常に最適状態を維持する為には「ハミ出した者」を除去することです。これが毎年間伐の原理です。三町なら「毎年間伐」をする。十～二十町なら二年毎間伐、二十～五十町なら三年毎の間伐をする。最大の期間でも四年毎の間伐にとどめる。五年毎の間伐は最大な疎開と生長量の減少が起り林業生産には悪い影響がある。

林業は農業と比べると、元々あまり手がかからない。これがねらいですから、毎年間伐しても僅かな日数ですみます。その僅かな労働日数に対する報酬は莫大なものです。

簡単な例で示します。熊本地方杉林分収穫表の二等地では、十五年の主林木が一ヘクタール当り二千六百六十一本となっている。これが一等の林分で、六十アールあるとすると千五百九十七本である。(2,661本 \times 0.6ha = 1,597本)これが十五年生で一本一枚の年輪を生産するので、千五百九十七枚の年輪が生産される。この千五百九十七枚を除去すると十六年生でも年輪数は一定になる。

そこで十六年生の時の間伐本数を計算してみる。十六年生の一本の木には十六枚の年輪があるので、一本伐れば十六枚の年輪除去することになる。そこで間伐本数は、 $(1,597 \text{枚} \div 16 \text{枚} = 99.8 \text{本} \approx 100 \text{本})$ で計算されます。百本の木を伐採すると残存木の年輪数は元の一定数に戻っています。こゝで十六分の一が間伐率で、林分分の一は間伐率という一般公式が生まれます。

これが二年に一回の間伐の場合は、前の年の間伐木が残っているので、 $(1/15 + 1/16 = \text{間伐率})$ となります。この様に一般公式も誘導されます。こゝで $(1,957 \text{本} \times 15 \text{年} = 23,955 \text{枚})$ の年輪数がこの林分の固有の年輪数であって、この杉の品種で、この土地での林業生産を最も合

理的に維持して行く為の基礎の数字です。

千九百五十七枚の年輪数が果実、二万三千九百五十五枚が果樹に当る部分で、林業における果実と果樹と明確な形で分離した訳です。

この林分では、主林木の年輪数二万三千九百五十五枚の年輪数を超えた分は、余分の蓄積で、これを喰込んだ間伐は、間伐のやりすぎになります。

このように一年毎の基礎数字を知って、一年毎に施業を施すことが本当の林業経営ということではないかと思えます。

第四節 結び

三十五年生になって伐期が来なければ林業が出来ないではありません。下笠ダムの下の松原ダムは、一応或程度の高さになったら発電を始めた。未完成でも発電は出来ます。そして、何年かたつてダムが完成してから更に本格的な発電を開始しました。

林業というものは、一応十三年位で林冠が鬱閉すると、木材生産工場（炭素同化作用工場）が完成するわけです。ダムには完成する時期がありますが、林業は完成することなきダムを絶

えず建設し続けることではないでしょうか。そして、林業は莫大な価値を生産し続けるものです。この三町歩のモデルは、実は日本の縮図みたいなものです。二十年生以上が約三割しかないのに、林業は出来ないというけれども、この三町歩の経営が出来るなら、同じ理由で日本林業が蘇生することになります。「宝の山」に入って居り乍ら、貧乏しているのが日本の林業ではないでしょうか。

（「熊本の林業」昭和四十六年七月号所載）

自然保護と林業の展開

― 林業自身は一つの自然破壊である ―

近日、急激に人間生活の環境汚染が進行して、漸く自然破壊に対し批判の声が出はじめた。そして林業の破壊の部面についても注目を浴びている。副題にも書いた通り、林業そのものが自然の植生と異質なものを植栽するので、一つの自然破壊であるに違いない。自然の群落を追い払って、人工的に我々の好む植物の群落を代置し、固定する事が林業であるからである。

色々な要求に対して、我々林業人の持っている手法もまた素朴なものしか実は持ち合せていないのである。そこで「風土の中の林業」とはどんなものであろうか。「破壊少なき林業」のイメージを追ってみたい。

その前に少し前論が要る。エジプトとか、メソポタミアとか旧ローマ帝国等の旧文明は緑を追い払った為に滅亡したと言われる。その間の詳細は「植物と人間」(宮脇昭著、日本放送出版協会)を参照して戴きたい。要約すると、人類は火で森林を焼き払って放牧地と農耕地を作るが、ヨーロッパは主として牧畜民であるため放牧地とする。此の草地化は過放牧のためと、その雨量の少ない気候とも相俟って、砂漠化して行くのである。そして、此の「草地化↓砂漠化」という現象は現代でもアフリカや、オーストラリア、南米等で非常なスピードで進行しつつある。

ヨーロッパは殆んど全土がこの「森林破壊化↓草地化」の段階であるが、幸いにドイツだけは約二百年前から「草地化↓砂漠化」に気づいたかどうかは別として、森林保護を実施して、漸く「砂漠化↓滅亡」の段階から逃れようとしている。例えば英国は全土が草地化し、その上に孤立化したブナやナラ等の落葉樹の大木が点々と生えた「林」が残されて、「森」は見る影もなくなっている。スペイン・ポルトガルの砂漠化は言わずもがなである。ヨーロッパで森が残っている

のはドイツとスイスである。

一つの文明が滅亡する為には色々の要因があるに相違ないが、“緑”が、“森林”が無くなる事はその要因の重大なポイントであろう。

緑が無くなるのは、ものの考え方に基いているものと思う。即ち、（緑が無くなる⇒神は自然を支配する⇒人は自然を征服する）牧畜民族の考え方⇒西洋文明。（緑を大切にする⇒自然は神の無限の変化である⇒人は自然を崇める）農耕民族の考え方⇒東洋文明。

大^{づか}把^{づか}み^{づか}にもの^{づか}の^{づか}考^{づか}え^{づか}方^{づか}を^{づか}述^{づか}べ^{づか}た^{づか}の^{づか}で^{づか}あ^{づか}る^{づか}が、ユダヤが亡びて二千年の今日、再び自らの国を作ったユダヤのバスガイドの誇りは、「緑の見える所はイスラエル、緑の無い所がヨルダンです」とのことである。砂漠の中に水を引き、営々として緑と共にイスラエルの国が誕生しつゝある光景は見ものである。

東洋文明を代表する日本について言えば、西洋文明の考え方が明治以来浸透して、自然破壊が進行しつゝあるのである。然し、森を大切に^いする所から本来の日本はなお存続しているに違いない。

最近、西ドイツを中心として、植生地理学（植物群落の研究を中心とした学問）が農学や林学

に影響を与えつゝ急激に発達し、又米国を中心とした生態系の学派が延びて来て、両々相俟って、林学に必要な方向を提供しつゝある。従って、従来我々の持っていた林学の素朴な考えも根本からゆさぶられつゝあるのである。

そこで、風土の中の林業という考えに立って、破壊なき林業について考えてみたい。

一、自然林をできるだけ生かす。

この項は、民有林ではできないことであるので、特に国有林にお願いする外はないであろう。日本は島国で南北に長く、高低も激しい。従って、暖帯、温帯、亜高山帯とかの森林帯を具体的に策定し、それに即応した林業を創り出す。林業と言えば、杉、桧、松を植えることだということが出来上ってしまっているが、一律な林業であってはいけない。一般的な自然林の機能を考へて、次のような方策を取りあえず講ずべきではなからうか。

① 鳥獣の種毎の夫々の発生地を調査して国土に適した生育頭数を確保できる地域を絶対に残し、減少しつゝあるキツツキ等をも早く復元する。

② 林相の保護、即ち樹種、群落の遷移等を含めて広域学術林を早急に設定して、取りあえず破壊の進行を喰い止める。

④ 自然林は風景として美しい。国立公園に指定されたものゝ中で、特に大地域を自然林として残す。国有林では除地として特別に大切にす。必要があれば、既に人工植栽した所も自然林に復元する。又民有林、公有林も買い上げて国立公園の特別な地域として施業する。

⑤ 更にこれに準ずる地域で、自然林としての林業を行う所を大面積に指定する。此の地域は自然林としての択伐林業を行う所である。今後生活が高度化するにつれて、高級家具材等が必要となると思うが、針広葉樹大型有用材は益々その需要度は高まるであろう。従って、自然林の択伐林業の新しいパターンを開発する。

林令百年、二百年の広葉樹や針葉樹は、それを作る為には、それだけ時間が必要だから、安易に伐採して杉、桧に替えないようにしなければならない。過去の日本の山には、ずっと奥まで木馬道が通じていた。そのように充分なトラック道を入れても林相は変えず、多少有用樹種は増えるかもしれないが、自然林の択伐林業を実施する必要がある。

二、人工針葉樹林はできるだけ長伐期、間伐林学として、皆伐を極力少なくして択伐的林業とする。

日本の林業は、明治以降八十年かゝって植林したと同じ面積を、戦後四半世紀の間に造林して

しまった。という事は、幼令林が大部分であるということである。然も戦後の風潮として、密植の傾向も強いのである。そこで、皆伐をさけて、間伐を主とする林業を展開する必要がある。密植共倒れ型の間伐、手遅れ林分が増加しているのであるが、間伐材を出してもマイナスになる所も多い。従って間伐材を出しても赤字にならないような林業への体質改善も必要である。

林業労務逼迫の中で、最も労力を要するのは下刈と新植であるから、出来るだけ間伐材を出すことで、長伐期林業を指向すべきであろう。

(「熊本の林業」昭和四十六年九月号所載)

天草千巖山の植生

千巖山は、天草松島を一望に見渡す名勝である。この山のすぐ向いの山には、県立青年の家が建設されつゝあって、出来上がれば、今後は益々有名な名勝になることであろう。

素晴らしい眺めの上に、更に驚いたのは、松くい虫にやられていないのである。これだけの山に、二―三本しかない。県事務所でこのことについて聞いて見た。

そこでは、地区担当のT氏が松くい虫に対して抵抗性のある松があるらしいと言っているとい

う。

早速もう一度千巖山で彼と会うことになった。そこでの話しは松島町当局で、過去十年位徹底的に予防が続けているということであった。

一応そういうことであつたかと、思ったが、彼はなおつけ加えた。

「この松くい虫に対して抵抗性があるのではなからうか」という。

この松は、あまり松くい虫にやられていないようだ。あか松であるが、葉があか松より短く、皮目が少し堅く違うというので、ここでは「ヒメマツ」と呼んでいるということであつた。

よし、何とか広く、各方面の方々の協力を得て、まつくい虫というより、まつぎいの線虫に対する抵抗性の品種を探し出そう。抵抗性のある「まつ」が必ずあるに違いないと思う。

千巖山は松島の聖地として、はげ山復旧にも、景観維持にも、永い間、大変な努力が続けられたものである。あかまつ、くろまつ、はぎ、やまもも、などの植栽状況からその努力の跡がうかがわれる。

他の天草の観光的場所にも参考になると思うので、千巖山の植生をあげて見ることにする。

1. 常緑針葉樹 アカマツ、クロマツ、ネズミサシ

2. 常緑広葉樹 ヤマモモ、クロキ、カシ、シイ、ツツジ、タイミンタチバナ、ヒサカキ、シヤシヤンボ、タブクス、シヤリンバイ等

3. 落葉広葉樹 クヌギ、コナラ、ネジキ、ハギ

4. 蔓性植物 イタビカズラ（常緑） ナツツタ（落葉） テイカカズラ

5. 地表植物（特に裸地を被覆するに都合の良いもの） ヤハズソー、ハイメドハギ、カタバ

ミ、ネコハギ

6. 林内羊歯類 コシダ、オニシダ、タウエイチゴ等

特に禿山緑化には、5.の植物を積極的に植えると、何れも地表をはう植物で、ハヒメトハギやネコハギは多年生であるからうまく使えば、直ちに禿かくしとして利用できると思われる。

次に岩山の緑化であるが、一番早いのは、くすであるが、これは他の植物をも巻き倒す勢いがあつて面白くないので、前述の蔓性のものを丹念に活着させることであろう。その他そこでは見当らなかつたが、木に巻きついて上るきづたも良い。岩場緑化に使えると思う。

（「熊本の林業」昭和四十七年十一月号所載）

数の子と松たけ飯

ストーブが入って、何となく気のほとびた或る日、マツタケの話になった。

誰かが「あゝたの所では、数の子は出るか」と聞いた。出ない所が多いらしい、そしてまた、松タケはどうかという。それも年に一回、食膳に出るか出ないかの話である。

マツタケの方が少し優勢のようで、そのストーブ会議から出た結論では、数の子が松タケより割り高であろうというのである。つまり、女性はとても計算高くて、バカバカしい高値には手を出さないというのである。

このあたりで、主婦たるもの、如何に勘定高いか、その反面、如何に尻が抜けているかの証明が行われて、この方が私が今から言わんとすることよりも、ずっと面白くて、ためになる話でもあるが省略する。

何故マツタケがたたなくなつたか？これに対して、広島農業短期大学教授富永博士は言う。

「以前は、松の下木は、薪として採取したので、きれいに環境が整備されていた。今はもう、薪を取る人もいなくなつたので、まつたけの環境が悪くなつたからたたないのだ」と。

今年マツタケの試験地を作ったら、やはり去年見えなかった所にも生えてきたという。それは必ずしも環境が良くなって生えたのでは無からう。去年は藪であったために見つからなかったであろう、富永教授もそんなことを話しておられた。

マツタケ菌糸は、生長も遅く、決して強い菌ではない。その生育の環境を、まつたけ菌糸が好む状態にまで作り出してやらねばならない。過湿では勿論いけないが、適当な時期に適当な雨量があると沢山生える。つまり、マツタケは全く天候に左右されるのである。また、そのうえに、或は一年毎にとか、二年毎に大量に発生するようにも思われる。丁度、柿などのように「隔年結果するかも知れない」と考える人もいる。どちらとも判断はつきかねている状況だが、むしろ天候、特に適期の雨量に強く左右されるというのが、妥当であろう。

環境因子があまりに多く、また未知の領域もあまりに多いので、なかなか試験も思ったようにはならないらしい。おくれればせながら、本県でも講習会をしたり試験をしたり、行政と一緒にやってやり出した。

講習会には忙しいのにも拘らず、沢山の人が集まって来た。マツタケについての知識に飢えていると思われる。

シイタケも今では種駒を打込んで、人工栽培にまで進んでは来たが、始めの頃は秘伝に属するものであった。

マツタケの試験で困るのは、私たちの指導所では、菌類についての試験設備が充分でないのである。全くお天気次第であった農業も、今はビニールハウスの普及によって、四季も変えてしまった。いわんや、試験研究機関は、日進月歩の時代に、春秋二回の試験に甘んずることはできない。いつでも菌糸の培養が出来るような空気調節（温度、湿度）が必要と思う。

大分の林業試験場は、最近改築し、宮崎は新築した。そこには、立派な空調施設が出来ているのである。更に大分では空氣の他に、光を調節する施設を、追加建築中と聞いておる。

（「熊本の林業」昭和四十八年二月号所載）

松枯損跡地に植える主要樹種

昨日、雁回山に行つて、植えられたテータ松を見た。

国道から眺めてそうであろうと思つていたら、そのとおりであった。昭和十二年植栽と書いて、何本かテータ松の精英樹と誌されている。目下二十六年目を肥り続けている。頂上の枝の具合で、

今も尚一年に三十センチ位の上長生長はありそうだ。

精英樹は直径三十五センチくらい、高さ二十四メートル位である。材積で一本一立方米もあるうか。要するに大木の山である。

三ヶ所、夫々一ヘクタール宛はある。これほど見事な松山は見たことがない。しかも中には古い立枯れの木もあり、下木もぎっしり生えて、行き届いた手入れではなさそうだ。

外国松は、日本では強い木は少ない。幼令時に病気で倒れてしまうのが多い。

テーダ松と、スラッシュ松が殆んど同じように生長するが、スラッシュ松は日本では実がならないらしい。

ところが、この雁回山のテーダ松は立派に実を結び、種子生産もしている。特にテーダ松は松くい虫にかからない。スラッシュは、少しはかかる。

テーダやスラッシュ松は、四〜五年位の幼令木では、風に倒れ易い。然し一度立て直してやると、その後はよく太る。

テーダとスラッシュは、北米の分布ではテーダが中部から熱帯にかけて分布し、スラッシュが殆んど同じであるか、僅か南よりに分布しているという。

兵庫県林業試験場の研究報告では、兵庫県林試苗とカロライナ州産苗が台風強く、その他の州産の種子による苗は台風弱かったと記録されている。

従って遠い将来を考えると、このような台風に対する抵抗性を配慮し乍ら、テーダ松を植える必要がある。

熊本県で、鹿大初島教授に依頼した熊本県地帯区分調査というのがある。昭和四十六年に印刷されたもので、これは、県内で針葉樹、特にスギ、ヒ、マツが植栽されるので、広葉樹ももっと積極的に見直し、それを植えるべきだという提案を含め、特に天草地区では、松の枯損跡にはネズミサシ、芳樟、イヌマキ、ツガを植えたらどうかと提唱される。芳樟はくすの一種で台湾原産、鹿児島では大変良い生長をするらしい。

ネズミサシ、イヌマキ、ツガは、天草には天然分布があるとのこと面白い。積極的に立ち向う必要がある。

天草の西林務観光課長は、樟はどうだろうといていた。暖帯照葉樹林の代表樹種であるので、頭に浮かばなかったのが不思議な位である。「県の木」でもあるし、特に緑化木として珍重される。水位の高い佐賀平野でも柳の木と共に見られる木で、到る所植えることの出来る木である。

大気汚染にも強い木である。然し、地味の良い所でないといふとらない。

余談になるが、北米原産のエンピツビャクシンは、熊本女子大の庭に二十五年生で、三十センチ位に大きくなったものがある。若い頃はネズミサシと似た葉をしているが、年をとって実のなるころにはスイリユウヒバに似た鱗の葉となる。アメリカでは、せき悪地に植えてよく成長するという。エンピツビャクシンは、古くから、日本に入っているので、今後とも調べて見たいと思っている。

次に松の枯損跡地の主要樹種として、クヌギ、コナラを取りあげたい。これは郷土樹種として、シイタケ原木として高価に取引され、原木不足で困っているからであるが、丁度ヒノキ位の地味を要求するので、ヒノキと同じく、松の適地には導入に少し無理があろう。施肥の方法とか穴の大きさ、又肥料木との混植など工夫を要する。肥料木として、天草、芦北地方に沢山あるやまも、其他を試験する。

最後にシイであるが、これは照葉暖帯樹林の最も代表的な樹種でその占有面積も一番大きい。カシは占有面積はシイに比べずっと少ない。そこでこれを用材として、誘導しようと考え。間伐をして残存木の成長を促す試験を行うのである。この試験は、シイタケ原木にシイを使うのと併せ

てシイ林の施業の仕方を見出そうと考えている。

いろいろの木の名前が出て、理解し難かったかと思いますが、自分でも植えて試してください。そして、私どもにもいろいろご指導をお願いします。

(「熊本の林業」昭和四十八年七月号所載)

石橋を叩けば渡れない

この題名の本が出てよく売れている。僕が買ったのは十三版であるから、五カ月の内に十三版も重ねたことになる。随筆であるが、心血を注いだ南極探検を中心とした体験談であるから、研究者には随分参考になる。と同時に彼(西堀越冬隊長)の人生観とか、物の見方というか、そんなものが浮彫りにされて面白い。

さて、題名と同じ章の中に、「やるか、やらないか、決心をする前に、こまごまと調査すればするほど、やめておいた方がいいんじゃないかということになる。」石橋を叩いて渡る”とか”渡らん”とかいうけれども、石橋を完全にたたいてから、渡るか渡らんか決心しようなんて思っていたら、おそらく永久に石橋を渡らんということになるだろう、と思います。」と書いてあ

る。

そして、私共研究者にとっては、殆んど全てが未知の分野への挑みであるので、この言葉はビシッと当たる。

九州全部の試験場が集って、試験研究を、どう推し進めるかを討議する会がある。議題として、綜合防除の問題を提出したら、取上げられて、その方向に極力進めることになった。

然し、県の予算折衝では仲々うまくいかなかったが、来年は何とか出来ないかと念願している。生態系という複雑なからみ合いの糸を一本一本ほぐすという研究は、思っただけでも戸惑いするけれども、やろうと決心することが先決であろう。

「提案制度への提言」の章で、「明治四十三年に、南極探險を発想した白瀬中尉は、当時の技術力、交通、生活環境からみて、大多数の人達から反対され、気狂いあつかいされました。その時、たった一人の“大物”だけが、“そりゃあ、よい考えだ”と乗って来て、あの南極探險の偉業は達成されたのです。」と書いています。そして、大物と気狂いの出合いで、大物の言葉は更に振っている。“南極は暑いから、体に気をつけろよ。南洋でさえあれほど暑いものだから、もっと南の南極はよほど暑かろう”といったという。

僕達は、今、日本一の林業試験場を作ろうとしている。内容も、外観も。そして、此の章を読んでいると、ほのぼのとしたユーモアの中に勇気が湧いて来る。

「考えてみりゃ」「そりゃよい考えだ」の章では、風呂だきの石油を運ぶのに、氷のパイプを作る場所がある。

どの章を見ても、面白くて、読み出したらやめられない。一読をおすすめする。

(「熊本の林業」昭和四十八年八月号所載)

まつたけの人工栽培について

一、太閤まつたけ

絶大の権力者、太閤がまつたけ狩りに行くと言いだした。そこで衆智をしぼって、まつたけを人工的に埋め込むことにした。それ以来、まつたけを埋込むことを太閤まつたけと云うことになった。今でも太閤まつたけは応用される向きもあるらしい。我々は直接それは行わないが、まつたけの根の先をいしづきと云って、このいしづきを移植することは有効であると考えている。

二、まつたけの減少

まつたけは全国的にも毎年々々減少の一途を辿っている。そしてこの減少は熊本県でも同様である。

我々はこのことを残念に思っているが、まつたけ増産に努力している県は？と見ると、広島県が特に目につく。全国的に減少する中で、広島県の国内で占める割合は少しづつ増加しているからである。言葉を換えて言えば、広島県も減少しているが全国的な減り方よりも、減り方が少ないと言う方が判りやすい。

そこで我々は、まつたけの人口栽培を推し進めている広島県のやり方を取り入れたらと考えた。広島県には今は亡くなられたが金行さんという先生が道を拓かれた。又広島農業短期大学の富永保人先生は、新しくまつたけ博士となられて、その方面の開拓者となられた。

その前に、まつたけの人口栽培は随分永い間の人々の念願であったのであるから、そんなことができるかしらと疑問に思われる人も多かろうと思うので、我々の考えを説明する必要があると思う。

一体、なぜまつたけは減少するのか。熊本県の場合、先づ松の木が松くい虫につきつきにやら

れるのが目に見えている。そのことは根本問題であるが、松くい虫の予防方法が確立されつゝあるので、それは一応おいて、考えを進めて見る。

三、環境整備

まづ第一に挙げらるゝのは、燃料の需給構造が根本的に変わって、松の木の下に生えていた柴を刈らなくなったために、松山の手入れが全然されなくなったからである。

そこで我々は環境整備ということを考える必要がある。上層に松の木があり、下層に雑木がある。その雑木には落葉樹も、常緑樹も必要であって、言わば厚すぎる所もあれば、薄すぎる所もある。まつたけのある一山毎に、松の木の大きさや被陰の状況も異なるので、我々は一つのシロ（まつたけの生える所）があれば、そのシロを大切にし、そのシロの周辺に近づけるように施業する。大体高さ二米くらいの所で雑木を整枝し、一米位から下の枝を切って、まつたけがたてばすぐ判るようになる。そうすると案外明るいものになる。そうすると今までたっていた所がたゞなくなつた所もあるが全体として前年と同じ様になった。昨年は気象条件が悪く、特に立ち方の少ない年であったが、成り年と同じ位にたつたのである。

四、菌糸の盤移植

今までたゞなかつた所にまつたけの菌糸を移植して新しいシロを作ることはできないか。これが第二の課題である。

大体まつたけのたつ下を掘って見ると、まつたけの香の強い白っぽい菌糸が二、三十センチも深く、巾にして五十センチ、大きなドーナツ型の円盤形に広がっている。真白く香ばしい。だからシロと云うのであろう。それを、厚さ五センチ、直径十二センチの採土円筒で、菌糸が崩れないようにして菌糸盤を取り、之を新しくまつたけ山を作る所に持って行って赤松の毛根に感染させようとするのである。

新しく移植しようとする所の土を掘ってみると、色々の菌糸があるので、他の菌糸がない所を探し出して、採土円筒で打抜き、この部分に、シロからの菌糸盤を移植し、あらかじめ掘出しておいた松の新根を乗せて、そつと土と木の葉で覆いをかけて、前にシロを取つた所の照度と同じ位に環境整備を行うのである。水をかけて、明日の雨を期待し、うまく松の根にまつたけの菌糸が感染するのを期待するのである。

五、従来の考え方

従来も、今もそうであるが、松たけの胞子を水に混ぜて、穴の中に流し込むのであるが、自然には、このように胞子が落ちて、この胞子が発芽して、二次菌糸を作りこれから菌根ができて、これがまつたけになるのである。

たゞ京都大学の浜田先生は、まつたけの胞子を培養器の上で発芽させようとしたが、発芽しなかった。偶然、まつたけ山の土壌が培養器の上にこぼれたが、それにまつたけの菌糸が発芽した、と述べて、まつたけ山の土壌には、菌糸を発芽させる特殊な作用があると言っておられる。

従来はまつたけと取組むのに、今年何かをすれば、来年はまつたけが出るというような具合にせっかちに考えていた。然し、菌糸が活着して、シロができ上り、まつたけが出るまでは、かなりの年数を必要とするのである。それもまつたけの菌糸が一年間に延びるスピードが十センチメートル位しかなく、茸が出るまでシロが発展するためには三―四年を必要とするからである。

(「熊本の林業」昭和四十九年九月号所載)

“アポロ”峠

本誌にアポロ峠の記事を書いて、四年になる。そのときは、アポロ峠が開通して一年余たった。渡辺元林務部長にさそわれてアポロ峠開通五周年記念の山の神開きの行事に出席した。

「天にはアポロ宇宙船、地にはアポロ峠」の感激がその当時の松本勇市さん（球磨郡上村）の胸には燃え上ったのであろう。

従来から、「山を買うなら道を買え」ということわざがあった。道を買うと言うより、松本勇市さんは、自分で道を作ったのである。

曾て我々の祖先は、木馬道という合理的な搬出道を作った。古い時代「杣道」などという言葉がある。山道でないので、杣道は、木馬道のことではないかとも思ったりする。木馬道の歴史が古い時代の林業を説明するのではないかと思う。

この合理的な山道―これを現代のブルドーザーと結びつけて合理的なブル林道ができるのである。千人力のブルドーザーを林業の味方につけた。これは新しい時代の開幕である。新しい時代の開幕の感激をこめて「アポロ峠」と松本さんは名付けられたのである。その新しい時代の到来と

いうほんとうの意味が判ったのは、松本さんただ一人かも知れない。我々には、おぼろげにしか判っていないのではなからうか。

或はまた言いかえるなら、私達に見えている地平線よりも、松本さんにはもっと遠い地平線が見えているのであろう。我々は同じ地平線を見ているつもりであるかもしれないが。

松本さんのブル林道の隣りに、吉野の桶辰さんが山を買われた。桶辰さんは、早速別の箇所に循環式ブル林道を入れている。曾て本誌で、桶辰さんの吉野の山を見て文章を書いたことがある。山を見てほんとうに感激もしたが、吉野地方はあまり道を作らない、と一言したことは今になると恥しい。英雄の心は英雄ぞ知るということであらう。

山の神開きは仏式であった。仏式がこんな勇ましいものとは知らなかった。さわやかな読経とともに、さわやかな木魚の音が谷全体に拡がった。山神開きが終って、従業員や、ほんとうに身近い人達約百人で表彰式があった。

いきなり、私にも何か話してくれとのこと、面くらったが、一昨年の大雨のことを思い出したので、そのことを話した。何百年も住んでいたのであらう山の上の家や田んぼも流されてなくなっていたのに、この延長の長いブル林道は入口と奥にたった一箇所だけ被害を受けていた。理

にかなった道というものは、あの大雨にも崩れないことを話した。もう一つは、父から子への橋渡しが出来たこと、というよりむしろ、祖父から三代の念願が引継がれたことの喜びを述べた。

松本勇市さんの子供さんの欣久氏が、社長として功労者に感謝状と記念品を贈呈したが、後で懇親会の席で、社長こそ最大の功労者です、ねと言った。彼は自らブルの運転を覚え、林道開発の中心に立った人である。

山の神のすぐ下に広い土場があり、その下に虹鱒の養殖を始めておられる。松本勇市氏の着想と実行力の大きさを改めて見直すのである。

五周年のこの日、行くときは朝からパラパラ雨が降ったがすぐ晴れて、式が終って帰るときは、そのアポロ峠から遠く桜島が見えていた。桜島が見えるのは、一年の間でも何日もないとのことである。

（「熊本の林業」昭和四十九年十一月号所載）

伊豆の踊子

一、伊豆の踊子

川端康成が「伊豆の踊子」を書いたのは、伊豆の山中で蘭の花を見つけたからではないだろうか。強い風が吹けば花がちぎれてしまいそうな、そして誰にも知られず散って行くであろう可憐な寒蘭の花を。

このような意味の文章を見て蘭に取りつかれて五年もたった。然し蘭は子供が増えるばかりで次第に花も咲かなくなった。肥料のやり過ぎ、水のやり過ぎで全くむつかしい。

蘭と云えばあまり清楚で、それに対照的に考えられるのが汚染である。最近読んだもので「成長の限界」というのがある。

二、成長の限界

これによると、人口とか工業生産とかが、幾何級数的に増えていくので、結局は汚染の問題を解決することができなくて、人口も又減少するであろうという。

例えば資源についていえば、資源の需要も幾何級数的に増加している。楽観的見方をすれば、現在の技術を以てすれば、どんな微量な含有量からも、必要とあらば分析して、採取するかもしれないが、例えば一万分の一の含有量とすれば、一万倍の不要副産物が出て来ることになり、その処置ができなくなるであろう。

「人類の危機」レポート、と副題をつけたもので、幾何級数的に増える人口、工業生産力、食糧、資源等、全てに「ふんづまり」が起るのである。

も一つ汚染にふれると、莫大な費用をかけて汚染の濃度をどんどん下げていっても、結局、絶対量が増えて来て、汚染そのものは止めようがないというのである。

三、緑の哲学

かつて本紙に、東南アジア、特にインドネシアの農業にふれたことがある。そこでの米作りは、たゞ「アゼ」を作るだけで、水は天から貰い水。無肥料。草取りもしない。植え方は正条植え。稲の穂だけつんで、藁は水牛の餌となり、水牛は泥水に寝そべて「驚」がその背にのんびりと乗っている、と紹介したことがある。ところが四国の人で、本気にこのような農業に取組んで、

それに合った多収種稲を一生懸命扱めながら歩み続けている人のことを知った。ふとしたことで紹介を受けただけで、未だその本は見えていない。河も海も窒素過多になって異変が起りかねない時に、このような無公害農業に生涯をかけた人のいるのを聞いて嬉しくなった。福岡正信という人で、伊予市大平二〇一の三に住む人だそうである。

（「熊本の林業」昭和五十年十一月号所載）

論稿二

(文明批評)



通潤橋

日本思想の一面

吉川英治の太閤記の中で、今川義元、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉、夫々の運命を連ねて流れて居る史観というか、人間観というものが、僕の心を打つのは、空観ではないかと思う。

今川義元の戦勝の祝宴の真只中に、信長の軍勢が雪崩れ込んで来て、義元は敢えなき最後を遂げ、そして今までの破竹の勢の今川勢は総引上げとなる。

その前夜、信長は、

「人生五十化転の裏を比ぶれば、夢幻の如くなり」と舞を舞って出陣して居る。信長の最后、光秀の最后にも共に歴史は「空しき舞台」を提供している。かの绚烂たる豊臣秀吉にして然りである。

註（色即是空・空即是色）

此の「空」なる言葉によって我々が人生を見つめるとき、非ヨーロッパ的物の見方に触れることが出来ると思う。逆に空観というものによらねば、ヨーロッパ哲学の裏側は見る事が出来ないのである。アメリカを含めて西欧文明自身を批判する力は西欧文明にはないのである。然し此

の「空」観によって見れば、匹夫と雖も、西欧文明を批判出来るのではないか。

革新陣営も、保守陣営も、大小様々な「権力」の亡者と化し去って居るのが、今の世である。

今の我々の思考を決定づけて居るのが西欧思想であるが、我々の心そのものは西欧思想によって見ることの出来ないその裏側にも広がって居て西欧思想に不安感を抱くのである。

唯日本の大部分の学者が、西欧文明の片嚙りによって「眞実の人生」「我々を包んで居るもの」そのものを見つめることが出来なくて、唯徒らに世の人々を迷わしめて居るのである。

西欧思想には多彩なものがあるに拘らず、自分自身を見ることの出来ないということを認識すべきである。

此の「空」観を生命化したのが、日本の歴史である。空しい個人の生命は不滅を念じ、之を日本と名付け、又は大和と名付けるのである。

戦国の世には、朝に紅顔となり夕には白骨となるという事実によってその空観を身を以て確めることが出来、逆に空観は、絶対的統一を求めて、天皇制へ帰一せんとする思想を生み出して来て居る。此の空観だけでは人生は唯「空しきもの」となり切ってしまうのであるが、日本の歴史を媒体として、「誠」とか「眞心」というものが、日本思想の根底を支えて此の空しさを生命化

して居るのである。

今、天皇制を否定せんとする思想が蔓延して居るが、天皇制は歴史の苦悶の中で生まれ来て、又次の世代へと継承して来たものである。

空観と誠の結びつきが哲学的思考とするならその政治的表現は天皇制であろう。

(昭和三十七年「有朋」より)

中東動乱とマタイ伝

一、イスラエルは自国を守り通した

イスラエルとアラブ諸国との戦争は、開始以来十日足らずで終わった。世界が三度大戦争に投入されるのではないかといふ予感に動揺しつゝあつたし、現今も国連では戦後処理のための激しい論争が交はされ、更にその無能をも示して居る。

然し此処で忘れてならないのはイスラエルは自らの国を自ら守り通したといふことであらう。イスラエルは建国以来二十年を経過してゐない。その大きさは四国位の大きさであり、人口は

二六〇万、熊本県よりは僅かに多い丈である。四国といへば緑の島であるが、テレビで見るイスラエルは砂漠である。此の砂漠や岩の山に遠くより水を引き果樹を植ゑ、又植林してゐる。「緑のある所はイスラエル側、緑のない所がヨルダン側です」之がバスガールの説明の合言葉だといふ。

片やアラブ諸国はエジプトから中近東に亘る尨大な面積と人口を擁し世界の一勢力ではないか。世界屈指の石油資源を持ち、スエズ運河を手中に収め、アジアとヨーロッパとアフリカの接点にある。

一見、此の対比はイスラエルの劣勢を思はせるにもかゝらず、イスラエルは自らの手でその危機を乗切った。

日本国憲法には、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう」と決意した」と謳ってあるが、自ら守ることを意志せぬ国を誰が代って国を守って呉れるであらうか。

イスラエルはよくやった。

二、マタイ伝に現れた建国の祈り

二千年前イスラエルは建国を祈念渴望しつゝあつた。新約聖書の全ては、建国の祈りとさへ思はれる。マタイ伝が編まれたのは建国のならざるまゝのローマの圧政下である。

ユダヤ人の王たるべき人が生まれたと聞いたローマ人のヘロデ王は、二才以下の男児を皆殺しにし、為に「慟哭なげきなり。いとどしき非哀なり。……子等のなき故に慰めらるゝを厭ふ。」天国と直感されるのは、自らの祖国ではなかつたかと思はれる。

「バプテスマのヨハネ来り、ユダヤの荒野にて教を宜べて言ふ。『なんぢら悔改めよ、天国は近づけり』」とあるその天国とは具体的にはユダヤ人の国そのもの、祖国イスラエルそのものであらう。圧政の下に於ける建国の英雄達は天国と云はざるを得なかつたのではないか。

第一次大戦中のユダヤ人の利敵行為、その終了後ドイツのマルクの暴落を種にして、ユダヤ人がドイツに集まり、大儲けをして、ナチにユダヤ人排斥の根拠を与へ、又第二次大戦中ナチによるユダヤ人六百万の虐殺の悲劇ともなり、ユダヤ人自身が自らの国を持たぬといふことが、逆に世界の禍乱をも招いたのである。

二千年の間建国の夢を子々孫々に伝へたといふことは偉大であるし、流亡二千年の末、漸く得

た祖国イスラエルを今後は全てを捧げて自らの手で守り抜くであらう。反面自ら守る決意を捨てた日本の将来を憂ふるのである。

中東動乱を見つめて改めてバイブルを読み直して感じたので書いて見た。

(マタイ伝第十章) 「イエスこの十二人を遣はさんとて命じて言ひたまふ。『異邦人の途にゆくな。又サマリヤ人の町に入るな、寧ろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。往きて宜べつたへ天国は近づけり』と言へ。」

こゝに異邦人とは非ユダヤ人のことであり、住む家も無きユダヤ人の所に行けと命じて居る。

「視よ。我なんぢらを遣すは羊を豺狼せいかみのなかに入るゝが如し。この故に蛇のごとく慧まく、鳩のごとく素直なれ、人々に心せよ。それは汝らを衆議所むたに付し、会堂むどうにて鞭むちたん。

また汝等わが故によりて司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人との証をなさん為なり。……われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に來れり。それ我が來れるは人々をその父より、娘をその母より、嫁をその姑しよとめより分たん為なり、我よりも父または母を愛する者は我に相応ふさはしからず。……又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相応しからず。生命を得るものはこれを失ひ、我がために生命を失ふ者はこれを得べし。」

此処に述べられてゐるのは異邦人へロデ王の圧政によって亡国の旅を続ける人々に対し、人々が自ら立ちて、自ら国を持つべきための信とアピールであらう。

見よ、今のイスラエルにキブツがある。之は祖国防衛と産業開発の担ひ手であり、今度の戦争において、恐らく中心的な役割を果たしたであらうと思ふ。

祖国イスラエルの為に、財を持てる者は財を、生命を持てる者は生命を、子を持つ者は子を投じて始めてイスラエルの国は護り継がれて行くのであらう。

「この故に汝らはかく祈れ。『天にいます我らの神よ、願はくば御名の崇められんことを。御国の来らんことを。みこゝろの天のごとく地にも行はれんことを。』」

こゝに「御国」とは祖国イスラエルであらう。ユダヤ人達が全てを得るためには、祖国イスラエルを先づ持つことであつた。

※註（キブツ）イスラエルの国には、約二百四十のキブツがある。之は大は二千名から、小は六十名位の共産制農業集団組織である。（本誌一月十日付、小田村理事長帰国報告会からの記事を参照）

三、故河村幹雄博士とキリスト教

河村幹雄博士遺稿集（斯道会編 井上書房発行）「基督の信について、祖国愛のうかゞはるゝ節々」に河村先生は次の様に書いてをられる。

「馬太伝の記者は斯く録して居る。

イエス人々に語りをする時、その母と兄弟彼に物云はんとて外に立ちければ、或人イエスに曰ひけるは、なんぢの母と兄弟なんぢにも云はんとして外に立てり。イエス告げし者に答へて曰ひけるは、我母は誰ぞ、我兄弟は誰ぞや。手を伸べその弟子を指て曰ひけるは、是わが母、わが兄弟なり。（十二章四十六節）

水を治むるに急にして、幾度家門を過ぐれども入るに違なかつた禹にも喩へようか。国のため家をも身をも顧みず、生死を共にする者は是わが母わが兄弟と彼は信じたのである。」

祖国イスラエルの復興を思ふイエスの心は之より外には云ひ様もない程適切な言葉と思ふ。

キリスト教を、単なる国境を越えた宗教と見、或は唯単なる個人の救済と考へる誤を、河村先生は発見された。キリストの言葉の中より真実の日本に目覚むることが根本であることを発見し、今に生きる者の道を、祖国日本と題目を唱へながら進み行く道を、キリスト者としての河村先生

は見出されたのである。

四、中東動乱の宗教的意義

中東動乱は、アラブ連合側からのアカバ湾閉鎖を宣したことから始まるが、それは外見のことである。エルサレムをめぐる歴史的背景が深くして遠いことは「小田村理事長帰国報告会から」に記されて居るが、更に福岡の学生達に小田村理事長が述べられた言葉は次の如くであった。

(この話は中東動乱発生以前である。)

イスラエルの問題は、印パ紛争や、ベトナム戦争と異なる点に特に注意して覚えて貰ひたい。イスラエルはユダヤ人(ユダヤ教徒)にとつても、キリスト教徒にとつても聖地である。これらの人々が聖地を奪回しようとするのがイスラエル問題である。トインビーは、「文明は一方が他を喰ひ尽すまで闘ふ」と云つて居る様に、パレスチナ戦争はなかなか解決しないので何度でも起るであらう。唯、日本は「古来の宗教」と外来文明である仏教、儒教とを融化摂取した。それは聖徳太子の生涯を捧げ尽しての三経義疏の御述作に負ふところ最も大であるが、宗教問題を内的に解決する以外には此の問題を解決することは出来ない。されば、将来此の問題を若し解決する

ことが出来る者は日本であらう。此のことを特に忘れないで欲しい。と云って居られた。中東動乱が大事にならずに終った今日、特に強くこの話が心に残ってゐたので記した。

(国民同胞—昭和四十二年七月号所載—)

東西文化と日本

明治以来日本の学問は西洋の学問を追っかけることであつた。又それで間にあつたのである。然し現在では、日本の自然科学の前進は目覚しく、又工業技術も西洋に匹敵し、或は追越した部分さへある。造船技術とか、東海道新幹線とか目につくもの丈でも西洋を追ひこしてしまつたものも沢山ある。

自然科学では追ひついた(西洋を追っかけることのみが学問ではないと、やうやくはつきりした。)といつても、人文科学ではやはり西洋の学問に追隨してゐるのである。

吉田松陰先生は講孟余話の第一行に、「経書を読むの第一義は、聖賢に阿ねらぬ事要なり、若し少しにても阿ねる所あれば、道明らかならず、学ぶとも益なくして害あり。」と述べて居られ

る。

来年は、明治百年祭が行事として華々しく開かれることであらうが、当時の指導者はどのやうに考へて居たであらうかといふことを考へることによつて、学問本来の姿に帰つてその本質を追求し、精神科学百年の空白を挽回する機会たらしめたいと思ふ。その前に東洋文化と西洋文化について少し考へて見たい。

東洋文化と西洋文化

一体東洋とは何をさし、西洋とは何をさすか。西洋から云へば東洋とは、曾ては不思議な異域であつた。地中海の彼方、或はシルクロードの彼方、古い文明の根元が東洋にあると考へたであらう。然しコロンプスのアメリカ発見以来、西洋の武力は世界を征服したかに見えた。

特に日本の学風は、先に述べた如く西洋を追つかけることに急にして東洋を劣れるものと思ひこんで居るかに思はれる。辞典では、東洋とは西洋に対する対立語として取扱はれるほどである。僕は、黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の序説の冒頭に、「東洋文化の伝統及び理想を正しく現実 に把持するものは我が日本である。大乘仏教及び儒教の如き東亞大陸

の代表的文化は、すでにその本国に於いて衰頹せるに拘らず、共に我が国土に朝宗して国民生活の体験に融化せられ、その生命を持続開展せしめられて居る。日本文化とは実に東洋文化の綜合としてのそれであつて、それは西洋文化と対照補足せらるべき世界文化の重大要素であり、この文化を把持する我が国民は更に東西文化融合の世界的使命を負ふものである。」と表現された一文こそ僕が之から述べんとすることについての最も明確簡明な表現である。然し、しばらく、現在の日本で考へられて居る東洋と西洋について考へて見たい。

地理的に云へば、ロンドンのグリニッチ天文台を通る子午線が○度で東経百八○度、西経百八○度となるけれども、我々日本の精神的座標までもが、西洋が中心になつてしまつたことに問題がある。例へば極東と云へば、「我々日本人」の心にも、「西洋を中心とし、之より遙かにへだたつた辺境の地」として直覺されて居るのではなからうか。

此のやうな世界的観点の間違ひについては、「世界と西欧」でトインビーが詳しく指摘してゐる通りである。我々はトインビーが従來の世界史がヨーロッパ人を中心として描かれ、現時点では、ヨーロッパ人の世界征服といふ現在迄の世界史の「型」に対して、少く共十幾つかの文明の盛衰の中の一つとして西欧文明を把へた点、西欧と世界でなく、世界と西欧として物事を考へ、

又更めて、日本文化を、東洋文化の代表として扱へた点に感謝したい。

同時に我々は、従来ヨーロッパ人の世界征服に對し、少く共日本の敗戦後、殆んどの東南アジアに於て一たん連合軍に渡つた日本軍の無疵の武器が、そのまゝ植民地の独立軍の手に移り、その力で自らの独立を獲得し今新しく建国創業の大事業を開始した。インドネシヤにおいてその事業を此の目で見、又聞いて来た。之と同じ経路で東南アジアの各国は独立し世界に国家独立の嵐が巻き起つて、世界史の轉換が始まつて来たのである。

之についてトインビーの次の言葉を引用したい。

「諸々の文明が興りつゝ亡びつゝ、しかも亡びることにおいて他の文明を興しつゝあるその傍らに、文明の目ざす大事業が絶え間なく前進しつゝあるかも知れません。」（「試練に立つ文明」）
僕は日本の敗戦の瞬間こそが、此の新しい「大事業」の絶え間なく前進する決定的瞬間の一つであつたと確信するものである。

第二次大戦を戦つた一人一人の日本人の心の奥底には、西洋の支配する世界を打破し、諸国が平等に自らの独立を維持出来る世界を望んで居たのであつて、西洋の侵略した植民地の支配者に取つて替らう等夢にも考へたことはなかつたのである。此の僕らの心は、歴史の上に、第二次大

戦を戦った者の責任を以て証明して置く必要があると思ふものであって、少く共、このやうな僕自身の心だけは書き留めて置きたいのである。

維新先覚者の西洋文化批判

(特に阿片戦争を中心として)

林房雄先生の「大東亜戦争肯定論」の出発が、南洲翁遺訓にあったので、その遺訓の一部を抜萃すると次のとおりである。

「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分らぬぞ。予嘗て或人と議論せしこと有り。西洋は野蛮ちやと云ひしかば、否文明ぞと争ふ。否な野蛮ちやと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せし故、実に文明ならば、未開の国に對しなば慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開矇昧の国に對する程むごく残忍の事を致し己を利用するは野蛮ちやと申せしかば其人口を咎めて言無かりきとて笑はれける。」

此の一節は明らかに阿片戦争（一八四〇―四二）や、その他西欧の植民政策を意識してのこと

であって、吉田松陰先生の「咸豊乱記」（一八五五）に於ては、阿片戦争とその後に続く太平天国の乱の詳細が論じてあって、英国の植民政策のやり方を手に取る如く描いて居る。

此の阿片戦争で得たものの一つが香港で今も英国の植民地として残って居るのである。私も又文明の名に於て、阿片戦争を拒否する。但し、トインビー「試煉に立つ文明」の中の次の一節は阿片戦争についての西洋人からの批判として私の聞く唯一つのなぐさめとして紹介する。

「わたくしがこのことを今でも憶えているのは、子供の頃お母さんに「阿片戦争」のことを訊ね、お母さんがその真相を話してくれたとき、子供心にもありがたいことには、一般の羞恥の感覚がわたしのからだを通りすぎたからです。」（傍点筆者）

武力の絶対的優位にあった西洋に対して、日本の明治末期の貧弱な国力を以て独立を犯さるゝことなく、日本国が存続し得た事について、不思議な感動を覚える。

大乘仏教と儒教と日本

インドに発生した仏教が、支那の儒教と一緒に日本に入ってきた。之が日本文化との融合は、聖徳太子の御一生を捧げ尽しての研究によって、その大乘の精神（自ら救はるゝことのみを願ふ

個人救済思想を排し、他と共なる生を願ふ精神が、又等しき心構へにおいて儒教においても取入れられたのである。

トインビーは、前掲「世界と西歐」に於て東洋文化を代表するものとしての日本文化の存在を信ずる一人であつて、又彼の云ふごとく文明は他の文明の中に最も低次のものが先づ入りこみ、遂に元の文明にまで發展して、他の文明を喰ひ尽すと書いてゐたと思ふが、日本に代表される東洋文化と西洋文化の混合が、今後益々激しくなつて、日本に於ては思想的混乱が益々増大するとしても、我々は迷ふことなく、百年の長い学問上の空白を取返すべく努力すべきである。

我々は此処にこそ、明治百年を記念する意味があるものと信ずる。

私は西洋文明は、仏教でいへば個人救済に終るものであると思ふけれども、此の西洋文明の本質を摂取して、我がものとし、かつ東洋の理想である大乘の精神を彼等にも伝へる為には、我々の内的体験を通して生命がけの研究を必要とするであらう。

アメリカに於ける日本研究熱も又盛んなものと聞いてゐる。生花、茶の湯は勿論、萬葉、古事記などの文献に直接取組んで居ると三島由起夫氏はずっと以前紹介してゐた。日本人がアメリカに行つて最も困るのは、日本について質問されて答へが全く出来ないことだといふ。今の日本人

程日本自身を知らない者は居ないからであらう。

イスラエル問題と世界に於ける日本の使命

イスラエル問題について、僕は本誌七月号において少し述べたが、これは現代版十字軍と言へると思ふ。此の問題は、一応イスラエル側の勝利に終つたが、此の問題を武力で解決することは不可能に近いと思はれる。二度、三度、何れの日か又起るであらう。

エルサレムに関係する宗教は、ユダヤ教、旧教、新教、回教と、更に其の他の国際政局の状勢が、その時々を要因として加はり、解決の方途は容易に見出されないのであらう。

文明と文明との出合ひにおいて、聖徳太子の如き一偉人が出現し、宗教の内的改革が夫々の側においてなされる必要があらう。然し其の時の到るまでは、十字軍にはじまり、今尚同じ「型」を繰り返し、如何にも愚に近い解決の方途しか無いものであらうと思ふ。

世界の交通は容易になつた。新たなる宗教の改革といふ最も時間のかゝる問題であっても、之をなし遂げる責務が、我々の時代に課せられて居るのである。

故河村博士について前回紹介したが、その御弟子の岩越元一郎先生の「大学新論（東洋の覚醒）」

は、又キリスト教徒として、東洋文化に肉迫するものであり憂国の書である。先生は、支那の古典たる「大学」―修身、齊家、治国、平天下に代表されるが、それが日本に渡来し、その後日本に於て最も多く、又各時代に亘つて精神の指標となつた書であると書いて居られるのであるが、此処に、日本の全歴史を通じて生き続けた古典とキリスト教との接触を見る思ひがするのである。私も先生と同じ悲しみの思ひを以て、日本の運命を見護つて行く外無いのである。或は親鸞の教を奉ずる人のキリスト教研究、又キリスト教徒の親鸞研究、特に聖徳太子の人生宗教の研究が盛になつて来るならば幸ひであらう。又其の他の宗教或は宗派間の人々の生命がけの内面の体験を通じての研究が起るならば、次第に問題の解決に一步宛肉迫することになると思ふ。

特に日本は、西洋文明に覆ひ尽されたかの観があるけれども、その時間たるや、たつた百年で長いやうでもあるが、トインビーの文明論の時間の単位は五千年位であるから、問題にもならない短い時間でしかないのである。日本に綜合された東洋文化の内的生命が、西洋文明に対応するその仕方は、決して容易なものでもないかも知れないが、コロンブスのアメリカ発見に始まる西洋文明の武力による世界征服は一応その終止符を打つたのであつて、この期間も約四百年位でしかなく、今少く共、世界史の進行方向は第二次大戦を以てその方向を変へたのである。

日本における表面の姿は、いかにも西洋文明に覆ひ尽されたかの観がある。然し僕は、終戦の最後の日を、見事に乗切ったことの不可思議を改めて思ふ。戦略から云へば、本土に於ける焼土作戦以外には勝つ方法は無かつたであらう。或は戦つても結局は無駄であつたかも知れない。主戦論と終戦論との絶対の相剋にその終止符を打つたのは天皇陛下の御決断であつた。

今上天皇御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

「わが一身を入鹿に給ふ」との上宮王家御一家の全滅の際の山背大兄皇子の御言葉と一つの精神が、此の度の第二次世界大戦における日本を救ふと共に、その御心によって始めて、夫々植民地は、又自らの国を取返すことの出来た世界的不可思議は、奇蹟としか考へられない。

「一人出家すれば魔宮皆動ず」と聖徳太子の御言葉にあるが、沖繩に於て示された様に天皇陛下のために日本のために死を決して居た陸、海、空軍はもとより、全国民が等しく今上陛下の御

心に服した此の昭和二十年八月十五日正午に於ける世界史の決定的瞬間を私は此の様に感ずるのである。

なすことも無く今尚生かされて居る私の心の中を書き綴った次第である。

(国民同胞―昭和四十二年十一月号所載―)

東洋と西洋

ペスタロッチの「隠者の夕暮」(岩波文庫)を熊本国文研のテキストに使って、ふとかの東洋の音律を聞いたやうな気がした。それは聖徳太子と南洲翁遺訓を読んで感ずる共通のあの音律である。そして其の音律が中国の古典「大学」であることに気付いたのである。ペスタロッチは明治、大正の日本の教育を風靡したのである。

東洋

「大学の道は明德を明かにするに在り。民を親しむにあり。至善に止まるにあり。」

之が「大学」の根本的な三つの綱領であつて、此の三つを夫々説明を加へて行くのである。明德を明かにするといふことがその中でも中心であり、歴史の厚みを通して明らかにすることであらう。戦中、戦前を通じて日本を悲しげまに云ふ現代の教育は明德を明かにすることよりは遙かに遠くなつてしまつた。

民主々義に最も欠けるもの、之こそ民を親しむにありといふことである。政治家に民を親しむ心がないのである。特に民主々義を謳歌する人々に於て然り、唯民に阿おもむるのみである。民を親しむと、民を新たにすると二つの読み方が古来から争はれて来たのであるが、熊本に於ては実学党が、明德派（米田監物、元田永孚）と親民派（横井小楠）と二つに別れて相対立する様を「郷土の先哲を偲ぶ」で、石坂熊本市長が明かにされた。久し振りに立派な本に接して有り難かつた。至善に止まるにありとは、抽象概念としての真理など考へる我々に中々判り難いが、（君にあつては仁に止まり、人の臣となつては敬に止まり、人の子となつては孝に止まり、人の父となつては慈に止まり、国人と交はつては信に止まる）と第六章に出て来る。

「止まることを知つて而して后のちに定まることあり。定まって而して后のちに能く静なり。静にして而して后のちに能く安心し、安くして而して后のちに能く慮おもんはかる。慮おもんはかつて而して后のちに能く得。」

「物に本末あり。事に終始あり。先後する所を知るときは則ち道に近し。」

現在は本末を取違へ、終始を辯せず先後する所を知らぬこと甚しい。昨今各大学で紛争が起つて居るが、本末、終始、先後を知らぬ夫等の大学こそ学問の道より遙かに遠ざかつて居るのである。

「古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の国を治む。其の国を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。」

修身の出所は此処から来る。そして道德教育アレルギーが現在の教育界を占め、特に日教組は身を修めざるを以てモットーとして居る。

「其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす。其の心を正しうせんと欲する者は先づ其の意を誠にす。」

心は正邪善悪何れの方向にも動いて行き止まる所がない。そこで心の向ふ所を誠にしなくてはいけない。「大学」では自らを欺いてはいけないと云つて居る。

現在の学問は自らを欺き、他を省ることのみに終始して居る。自らを欺いて何が学問であらうか。自らを欺き、他を欺く。現代の学校教育の弊がこゝに極まって居る。「東大」といふ本がべ

ストセラ―と云ふことであつた。東大のまづい所を色々並べて、如何にも東大を明かにしたやうに思つて居るのであるが、大学の在り方を日教組として出さうとしたが、文部省案の修正主義として受け取られ、自陣の崩れるのを恐れて大学の改革案は出せなかつたと書いてある。この所には自らを欺き、又他を欺く姿が浮彫りにされて居るのである。

「その意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すことは物に格るいたに在り。」現代の学問は知を致すことを専らとしてゐるが、「大学」に於ては格物が学問の奥義であらうか。

「(理性||知)が人間の主人になつた」、と全学連のバイブルとしてあがめらるゝマルクーゼは、ヘーゲルの言葉を引いて来るが、知を致すことは眞の学問では部分に過ぎない。(物||森羅萬象)は動いて止まず、風の如きものであるが、この「物」を究める格物致知こそ最も大切なことである。

黒上先生は「太子が勝鬘經義疏に一乗の体は智解ちげと善とその何れを本とし、何れを末とすべきかについて、当代大陸の学説が多く智解を本とするを批判したまひ、善を本とすべきを示して『若し(智)解を以て乘(悟り)と為さば、則ち乗の名広からず、善は即ち乃至たひ一たび南無と称するもこれ善に非ずといふことなし。故に乗の名は即ち広し。』と仰せられ、この広き道を取るべき

を示された」と指摘されてゐる。

岡潔先生も（心〓知・情・意）の中で、情が納得しなければ、知がいくら頑張っても、心は納得しない。情が知と意に対して主人であると話して居られる。

「物格って而して後に知至る、知至りて而して後に意誠あり。意誠にして而して後に心正し。心正しくして而して後にその身修まる。身修まって而して後に家齊ふ。家齊ひて而して後に国治まる。国治まりて而して後に天下平かなり。」

真珠の首飾りが次第に大きくなり、極に達して又次第に小さくなるやうな反復に終つて居る。

以上の文中「」の中の文章が古典「大学」の経首章の全文である。「大学」の以下十一章は此の首章の説明であり、それと同時に一章一章が独立した大文章であり、又それを構成する一句一句が珠玉のやうに光って居るのである。

西 洋

ペスタロッチ「隠者の夕暮」は一八二節の短文からなるもので、古典「大学」とその構成すら似た趣がある。

「神の親心、人の子心、君の親心、民の子心。総ての幸福の源。」副題ともつかぬ言葉が、

「大学」前掲第六章の文章に何と近いことか。

「一、玉座の上にあつても木の葉の屋根の蔭に住まつても同じ人間、その本質から見た人間、そも彼は何であるか。何故に賢者は人類の何物なるかを吾等に語らぬのか。何故に気高い人たちは人類の何ものなるかを知らぬのか。……」

此の第一節は『天子より庶人に至るまで壹にこれ皆、身を修むるを以て本となす』と「大学」の第一章の句と同じである。

西洋の物の考へ方は、部分部分の集合体が即ち全体であるといふやうな発想で、東洋では、經首章のやうに全体の直観があつて部分が成立する。綜合的直観性が根本をしっかりと把み、全体を先づ直観し、部分が全体の中にはまり込む。

日本語ではいのちを玉の緒といふ。玉の緒こそ物の考へ方において綜合的直観性である。漱石の「明暗」の一節に近代インテリゲンチヤのチャンピオンのお延が考へる。「団子を認めた彼女は、遂に個々を貫いてゐる串を見定める事が出来ないうちに……」とある。団子の一つ一つ、真珠の一粒一粒について、西洋的物の考へ方は詳しく説明するが、之を貫くものを提示しない。

近代日本特に近代知識人が西洋の翻訳文化の中にはまり込んでしまった今ではこの総合的直観性が完全に働かなくなった。紛争を起して居る大学生が、部分部分は自らも納得し、如何にも確からしく構成したやうに考へてゐるのであらうが、全体として見れば、世の中と全く相容れないものになつてしまつたのは、此の総合的直観性が働いて居ないからである。熊大紛争はゲバのない紛争として有名であるが、スト―本部の占拠―全学団交の強要―警官導入―が現在の状況でそれ等を繋ぐのは革命グループで、個々の参加学生はピエロとして躍り、学生による本部の占拠といふ問題を忘れて、警官アレルギーに取りつかれ、進歩的文化人教授も一緒に警官帰れの署名運動などに躍つて居る。之等も総合的直観性が欠落して居るからである。

理性には「飛躍」が必要であるが、飛躍する時、総合的直観性が必要になるのであつて、それが欠落して飛躍だけする時、ゲバ棒で学問の改革が出来ると思ひ込むのである。

「三、人間の本質をなすもの、彼が必要とするもの、彼を高めるもの、そして彼を卑しくするもの、彼を強くしたり弱くしたりするもの、それこそ国民の牧者にも必要なものであり、最も賤しい小屋に住む人間にも必要なものである。」

ペスタロッチが教育作用の本質を人間そのものの育成にあるとする理念がここに出て来る。彼

に於ては身を修むること一人間陶冶と、教育作用とは一致して来る。評者は王と庶民との本質の等しきを説くペスタロッチを見て、十八世紀の啓蒙的人間観と判断するが、彼自身は、四千年昔の遠い東洋の大学の道の中に人間の本質を見出してゐるといへないだらうか。

「七、満足してゐる乳呑子はこの道において、母が彼にとって何であるかを知つてゐる。而も母は幼児が義務とか感謝とかいふ音声も出せぬうちに、感謝の本質たる愛を乳呑子の心に形成する。そして父親の与へるパンを食べ、父親と共に囲炉裏で身を暖める息子は、この自然の道において子供としての義務のうちに彼の生涯の淨福を見附ける。」

此の節は、鮮かに齊家の中に國の平安の根源を見出して居るのである。

「二八、散乱し、渾沌としてゐる博識もまた自然の道ではない。」

「三三、暗い無知といふ生氣のない空疎な荒野もまた自然の道から吾々を外らせる。汝の本性に就いての知識の欠乏は一人間より汝の知識を制限して、汝の本質の要求よりも狭いものにする。汝の關係するものに就いての最初の根本的概念の歪みと、殺人的に圧迫する圧制の暴力総ての真理と淨福との悦楽の抑止、人類の第一の本質的の要求と關係とにおける一般國民啓蒙の不自然な欠乏、かうした汝の重苦しい影が、如何ばかり地上を暗くすることか。」

前半の自然の道は、致知、格物、格物致知であり、後半の長い文章は明德の反対概念である。

「六二、従つて父の家よ、汝は人類の総ての純粹な自然的陶冶の基礎である。」

「六三、父の家よ、汝は道徳と国家との学校である。」

「七二、遙かに遠くに迷へる人類がさまよつて行く。」

「七三、神は人類に最も近い関係である。」

此の章の「」はペスタロッチの引用である。

日本と西洋

聖徳太子や、山鹿素行、二宮尊徳、吉田松陰、西郷南洲等の先達或は明治天皇、井上梧陰（明治憲法の起草者）、元田永孚（教育勅語の起草者）等全て古典「大学」を生涯かけて味読した人達であった。「大学」は日本の歴史の重みに匹敵する書である。

今や日本には、近代知識人が氾濫して総合的直観性が働かないやうな教育が徹底して来たのであるが、ペスタロッチを学び、又素行の云ふ「学問の中の学問」である古典「大学」を味読して我々の本来の姿を発見して、近代インテリゲンチヤの誤りを正さねばならない。

このことは、ひいては西洋文化の先見性のなさを総合的直観性を持った「日本文化」Ⅱ「東洋文化を総撰したもの」がリードすることになる。

ペスタロッチ「一二一、そして総ての国民は家庭の淨福を悦樂することに依つて、君主の親心に対する子としての純粹な信賴のうちに休らひ、そしてその君主が子たちを教育し向上させて、人類のあらゆる淨福の悦樂に到らせる父としての義務を果すことを期待してゐる。」「一二二、人類のかうした期待は一箇の夢なのか。また彼等の幼な児のやうな希望は、彼等の低い地位における仮睡と懦弱との幻像なのか。」

彼が予言した偉大な王の出現を我々は明治天皇に於てまざまざと見る。侍講元田永孚は、明治天皇の御二十才の時から召され、二十年間に亘り古典「大学」の精神を明らかにした。天皇陛下と元田侍講の「大学」により結ばれた君臣水魚の交りを、石坂市長の前掲書は明らかにして居るのである。

あゝ、日本。日本。世界に人類の光明を点じた日本を罵倒する日本人よ。目覚めよ。日本人よ。古典「大学」に「あゝ、前王忘れず」とある。日本人よ、人類の希望である前王を忘るゝ勿れ。

(国民同胞―昭和四十四年六月号所載―)

東京紀行

東京バタリー

全く久し振りに上京した。上京して感じたことは、随分、急速に東京が変りつゝあるといふことである。此の前行ったときは自動車の氾濫で、神田から東京駅まで四十分もかゝった。然し今度は五分位で行けた。オリンピック道路が出来たり、地下鉄が発達して来た。ビルは高層化し、東京は益々その広土を増した。東京の自滅への道を早めて居るやうに思はれる。公害が今更のやうに取沙汰されてゐるが、このまゝでは自滅への道である。公害の真因をつかまずに、唯、企業責任とか政府の責任とかのみ論じて居るから、公害の原因がつかめないのである。

又、此の東京の再開発は益々高いものにつくからである。東京の周辺に随分バタリーを見かけた。パリではアメリカの鶏が上陸して、有名なニワトリ戦争をして騒がれたが、日本にアメリカの鶏が上陸しない所を見ると何らかの理由があるのであらう。その理由の一つが東京周辺のバタリーによるのかも知れない。バタリーとは御承知のとほり、鶏を一匹ごとケージに入れて、餌をふんだんに喰べさせて卵を生まなくなつたらつぶされる仕組である。

僕には、東京周辺に建てられた高層住宅がバッテリーに見えてきた。郊外に向ふ電車の中で番号を二十四まで数へたが、ずっと向ふまで十列位続いてゐる。そしてそのビルは一つ少くとも五、六階はあったらう。此のやうに住宅産業が大きく成長し、都市造りに発展して来つゝあるのであるが、人間がいつの間にかバッテリーに入ってしまったのである。鶏はバッテリーに入つて居るのを意識出来ないのである。人も亦。東京のラッシュはひどい。そしてこのラッシュの一人一人は他人であり、物言ふ訳でもない。孤絶の集合体が東京である。人間の世とは、そのやうなものであつて良いのだらうか。ぬくぬくとした感情に包まれて、温く生きてこそ人の世といふものであらう。そのやうな町が一体あるのであらうか。かつて、宮崎でそのやうな親切を味はつた。バスの車掌も運転手も、そして町角の人も。

自然と文明

農林省林学試験場の津川実験林の隣りに、農林研修館がある。その実験林の木の枝は研修館の各階の窓から届きさうにすぐそこまで伸びてゐる。そこには幾種類もの小鳥達が枝から枝に飛び交つてゐる。然しこちらの研修館には雀が二、三羽来てゐるに過ぎない。小鳥達から見れば、如

何にも異国的な寄り付き難い場所なのであらう。それが文明の世界である。

自然を征服するか自然を保護するとかいふ言葉は、人間が自然物であることを忘れた思ひ上がった言葉である。自然を破壊して人間だけが生き延びれると思つてゐるのだらうか。

時事通信社の「週刊時事」九月五日号に、「山林は泣いてゐる」といふ記事が出てゐるが、人類の酸素消費が膨大な量となり、炭酸ガスの量が増えて来つゝあり、此の炭酸ガスの量が倍量になった時、地球の気温が三・六度上昇し、此の為に南極の水が融けて、海水面が七十〜百メートル上ると書いてある。これは熊本で云へば、立田山の山頂が一寸残るか水没する位で、日本全国世界全体は推して知るべしである。世界の大都市の殆ど全てが水没する。そしてもっと詳しく計算すると、唯時間の問題であることは明らかである。自然が地球始まって以来貯蓄してきた酸素の消費が大量になり、貯蓄の「払ひ出し」が始まったのである。

話が少し飛躍したが、浅川実験林まで散歩をした。丁度日曜日で誰もゐない。くゞり戸から中に入り込んだ。色々珍しい植物なども集められて、立派な試験場がある。山に入るとやはり林道の間歩道がついてゐる。歩道を廻つて行くと突然桑畑があつて、その間に一、二年生の針葉樹が植ゑられてゐる。桑畑は郷里の山中にある桑畑を思はせた。とその隣りに小さな祠がある。

丁度我が家にある神棚の一寸大きい上に小さな祠が建って、その前に小さな鳥居がある。そして祠の後に杉の木が取り囲む様に立ってゐた。そこで初めて、以前此処が御料林であつたらうと思つた。小さな祠は天皇がお詣りになり、桑畑は皇后様のものではなかつたのだらうか。

そこを更に抜けて行くと、木馬道の腐朽した上に土がかぶつてゐた。僕は突然、天皇は材木屋さんだと、この夏、世界経済調査会理事長木内信胤氏が言ったのを思ひ出した。天皇陛下が緑化事業の先導力となつてをられるのを思ふのである。

又、天皇様は木を伐るのがお嫌ひだと誰かの言葉も同時に思ひ出した。此処は不伐林が永く続いた所であらうと思ふ。然し大きな松の木があちこちに枯れて、之に蔦がまつはりついて不安感を誘ふ。桧があり潤葉樹があり、もみの木があり、松（これは大部分枯れてゐる）があり、そして小鳥が飛び交つてゐる。此の様なことを考へ乍ら林業について考へた。林業は天地の化育に参加することではなからうか。そして、その天地の化育をそこなはずにその産物を取り出すことが林業といふのではなからうか。天地の化育に参画するといふことが僕の心に刻印された。

研修を終つてその橋を渡る時、下つてゐた立札に、「甘い言葉にだまされるな。外に出る時、鍵かける」と書いてあつた。之が東京バッテリー化への一筋道でないやうに折り乍ら、其処の橋を

渡った。

昭和四十四年十二月執筆
「熊本の林業」46・2月号掲載

現代日本の三不思議

本誌ガラッパ欄で三という数字は美称であり、少数精鋭を意味するという解説があったので、早速表題に使わせて貰った。

先般河端副知事がヨーロッパから米国を廻って、その帰朝報告会があり、その話を友達から聞いたのである。僕は丁度用事で聞けなかったが、今米国では表題の日本の三不思議についての研究が盛んであるとのことである。

第一の不思議、米国や西ドイツ、E・E・Cでももう経済成長はとまった。にもかかわらず日本は八パーセント前後の経済成長が続いている。これは何故か。

第二の不思議、米国の女性は二十才を過ぎるとビール樽のようになり、果てはみにくくなる

いう。然し日本の女性は死ぬまで美しい。これは何故か。

第三の不思議、最近まで、日本には宗教はないといわれたが、一、二の項目は日本の仏教と関係があるのではないかということで、仏教についての研究が盛んである。

以上三つの事項が、報告の中にあつたのである。

アポロ十一号打上げ直後のことであるからあるいはそんな話もあつたかも知れないが、聞いた人の心を打つたのは現代日本の三不思議である。

僕は大分前に、本誌に、日本を追っかけろという表題で書いたのであるが、日本ほど不思議な国はないのである。その概要は、近代化ということは、今までは日本にとって、ヨーロッパや米国を追っかけることだと思つていたのであるが、さて繊維産業や造船業などで、英国を追い越したら、追っかけられるものがなくなった。一体近代化とは何か。日本自体を追っかけるとは方法がないのである。ということを書いたのである。こんなことを考え乍ら、現代日本の三不思議について、僕の感想を書いて見たい。

第一の不思議について、僕なりの考えを述べる。日本経済が成長を続けるのは日本経済の足を引張るものが先進国よりも少いことかも知れない。

例えば最近の話題で、フランスのフラン平価切り下げや、ドイツ大統領選の唯一のテーマとなったマルクの切り上げ、更に以前に遡って、英国ポンドの平価切り下げが世界中の経済界の大問題であった。

然し、日本は、これらの影響をあまり受けないのである。これは日本が以前から金本位制から離脱して居るからである。

ヨーロッパの経済は金本位制という経済の枠で足を引張られるのである。

西洋人は金「ゴールド」について特に執着が強い。フランスやドゴール將軍など特にこの気持は強いようだ。金「きん」は世界的に不足物資で、その産金量が経済の成長や、更に貿易の拡大に追いつけない。そこで世界通貨としてのポンドやドル不足が起る。これに応じて国際通貨機構が研究されて居るところであるが、英国の経済は、国際通貨としてのポンド、金「きん」の不足等から足を引っ張られるのであろう。

逆に金にしばられない日本円は、ドルとの交換の裏付けがあるので、金の相場の悪影響を受けないから、どの国でも使用できるのである。米国も昨年の大統領教書で、金本位制から離脱すると宣言した。日本円の外国為替相場は強いのである。

又、日本経済が、将来とも強いであろうと論じられつゝあるのは、大陸国家と海洋国家論である。

十万吨、二十万吨のタンカーが作られ今では五十万吨タンカーも作られようとしている時、海洋国家である日本は、先進海洋国家のチャンピオンであるというのである。陸上輸送は、鉄道やトラック等の輸送で、その輸送量は限られてくるのである。これに引換え、海上輸送は船舶が大型になればなるほど、輸送費は安くなり、その輸送量も際限なく延びるのである。

第二の不思議について考えると僕等の青年時代には洋画が流行した。僕など三S政策など称して苦々しく思い乍ら、随分見に行ったものである。

西洋人は二十才以下は人形のように美しい。映画だけしか知らない当時の日本の青年にとって、アコガレ的であったのも止むを得なかつたのであろう。然し今は逆になつたようだ。

第三の不思議について少しやゝこしいが僕の考えを述べてみたい。

ニーチェは超人主義（ツァーラトストラ）で、キリスト教の隠者を批判する。仏教でも西行等のように隠者になる人も多いが、やはり批判されるのである。积尊自身山に一時入るが、又世間に帰って来るのである。

ニーチェは天国思想について、人間が死んだ時始めて安らぎを得るといふことはどういふことかと考える。

親鸞（しんらん）も、「しょせん地獄に落つべかりし身を法然上人にすかされ参らせ候ひて念仏唱へ申し候」と云い、「地獄、極楽の道は、ゆゝしき南都北嶺の（比叡山のこと）学者達に聞け」と称して人生宗教を論ずるのである。

「王のものは王へ 神のものは神へ」という王権との闘いに疲れ、神の国に憧れるという背景の無くなった西洋の宗教が、仏教や儒教のように、人生宗教として立ち返り、自分との闘いを交えた新しい人生宗教への脱皮の時点にあるのではなからうか。米国に於て、個人としても、国としても、自分との新しい闘いが始まるのではなからうか。

（「熊本の林業」昭和四十五年二月号所載）

日本に殉じた三島由紀夫氏

先日、松本唯一先生のお宅に来られた岩越元一郎先生を囲んで座談会が開かれた。

岩越先生は、「日本人とユダヤ人」といふ本を紹介して下さい下さって大変感激した次第である。そ

の時始めて、福岡の中村東先生にお会い出来たのも嬉しかった。

早速注文して買った。それはユダヤ人ペンダサンが日本語で書いた日本人とユダヤ人の本である。(山本書店発行)

自由と安全と水がたゞであった国日本を憧れるユダヤ人の日本讃歌である。と同時に、僕達に今のはんたうの日本を知らせて呉れる良書であり、ほんたうのユダヤ人を知らせて呉れる良書でもある。

二千年の亡国の民、そして今はさゝやかな自らの国を持って、これをひたすら守らんとするユダヤの民の嘆きの書であり、現代日本に対して、厳しい警告の書でもある。

学生に貸して手許にないが僕の心に残った印象を紹介する。

嘗ての日本にはあり余る程の自由があつたが、今はインチキの自由が氾濫してゐる。嘗ては安全が全く保障されてゐたが今の日本には最早ない。

嘗てはただの金のかゝらない清水が溢れてゐたが今はもう望めない。

淡々と語られる言葉は、その日本を憂ふる心からの叫びであり、果してその憂ひの心に三島由起夫氏は自らの生命を祖国日本に捧げた。

日本の今の姿は嘆いても、憂ひても、どうにもならない姿としか思へない。

その本は、外人の言葉によって、珠玉のやうな日本の姿と今の憂ふべき姿を知らせてゐるし、三島由起夫氏が死を以て日本人に知らせようとしたのも、日本の病根の深さにあつた。

その病根の深さと広さをどうすることも出来ぬ人間の悲しみを僕は三島由起夫氏の死によって抱くのである。

非凡の才能や業績、それ等の利害打算で彼の死の純粹さをけがしたくない。

昭和元祿の腐敗の中に真実に生きようとし、且つ死んだ。

嘗て東大の時計台の攻防戦では、唯の一人でも死を以て自らの理想を守らうとはしなかつた。生命をかけて居なかつた証拠である。

理想の強さは死をも辞さないのである。三島由紀夫氏の死の日に僕は、西郷南洲翁の詩を自と吟じた。

相抱して淵に投ず後先なし

豈図らんや波上再生の縁

頭を回らせば十有余年の夢

空しく幽冥をへだて、墓前に哭す

相抱して時代の深淵に身を投じた二人の死を切々として思ふのである。

嘗て当時の権力者は乃木將軍の死を以て狂人に仕立てんとして、その遺書を闇に葬らんとした。然し若い国民新聞の一記者が、遂にそれを発表させることに成功するのである。そして明治の終りの輝かしい余光が、歴史の上にその光芒を放って居る。国民は皆將軍の死を悲しんだ。

今三島由紀夫氏の死によって国民等しく衝撃を受けた。

之を機に、日本の病根の深さを覚^きらないなら、いつか再び、日本の病根の深さに思ひをいたすことはないであらう。

三島由紀夫氏は、「豊饒の海」四巻を書き上げて、家人が最終の原稿を渡した時には、既に家には居なかったと、小さく新聞に載って居た。或はそれは小説家としての遺書かも知れない。

神風連史話と仏教の転生とが小説の表裏となつてゐる。神風連の純粹さを憧れ、又魂の永遠を祈つてやまないのである。

楠正成が湊川の最期に當つて、弟正季に向つて云ふに、人間の最後の願ひで、「善悪の生を得といふが九界の中には、何れの処か御辺の願ひなるや」と問へば、弟正季は、「からからと笑ひ

て、七生までも只同じ人間に生まれて朝敵を亡ぼさばやとこそ存じ候らへ」

その時正成も又、「よにも快げなる気色にて、罪業深き妄念なれども我もかやうに思ふなり」と述べてゐる。今の僕には生と死とを貫くものとして「道統」しか考へられない。

然し、三島氏は僕のあげつらひをよそに神風連の純粹さに殉じて死んで行つた。

ユダヤ人ベンダサンが云ふ日本教の殉教者の一人となつたのだ。

(国民同胞―昭和四十五年十二月号所載―)

再び三島由紀夫氏の死を思ふ

村松剛氏は「三島由紀夫―その生と死」に次のやうに書いてゐる。

「唯識論に八識といふものがあつて、第一から第六まで、眼・耳・鼻から意までの第六感に対応してゐる。第七の未那識まなは自我の意識であり、第八が阿頼耶識である。阿頼耶識は究極の識であり、三島氏の作中の解説をそのまゝかりれば、『それは漢訳に「蔵」といふごとく、存在世界のあらゆる種子を包蔵する識である。その識は龍のやうに絶えることなく白い飛沫を散らして流れ

てゐる。つねに瀧は目前に見えるが、一瞬一瞬の水は同じではない。水はたえず相続転起して、流動し、繁吹を上げてゐるのである。大乘は、なかんづく唯識は、瞬時も進り止まぬ激湍として又白くなだれ落ちる瀧として、この世界を解するのであった。』と。

瀧の一滴一滴は、こゝを二度とは通らない。唯一回きりの生である。我々個人も又そのやうに一回きりの生である。一瞬一瞬転起してやまぬ。然も僕は厳存する。

小林秀雄氏も歴史について、その一回性を次のやうに云ふ。（「歴史と文学」）

「歴史は決して二度と繰り返しはしない。だからこそ僕等は過去を惜しむのである。

歴史とは人類の巨大な恨みに似てゐる。歴史を貫く筋金は、僕等の愛惜の念といふものであつて、決して因果の鎖といふ様なものではないと思ひます。それは、例へば、子供に死なれた母親は、子供の死といふ歴史事実に対し、どういふ風な態度をとるか、を考へてみれば、明らかな事とせう。母親にとって、歴史事実とは、子供の死といふ出来事が、幾時、何処で、どういふ原因で、どんな条件の下に起つたかといふ、単にそれだけのものではあるまい。かけ替へのない命が、取返しがつかず失はれて了つたといふ感情がこれに伴はなければ、歴史事実としての意味を生じますまい。」

さて、阿頼耶識といふ哲学を虫の喰ってゐる仏典の中から見つけて、豊饒の海、四巻を書き上げた三島由紀夫氏の最後を、村松剛氏は次のやうに述べる。

『第四巻の終り、死期の近いことを知った本多は、松枝清顕の六十年まへの恋人をたずねて、尼寺を訪れる。こゝからあとの末尾の文章は、異様なまでに美しい。

老尼は本多をまへに「その松枝清顕さんといふ方は、どういふお人でした？」といふ。「私は俗世で受けた恩愛は何一つ忘れはしません。しかし松枝清顕さんといふ方は、お名を聞いたことありません。そんなお方は、もともとあらしやらなかったのと違ひますか？ 何やら本多さんが、あるやうに思ふてあらしやって、実ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことではありませんか？」

それでは何もかもなかったことになる。勲もジン・ジャンも、その上、ひよっとしたらこの私も、といふ本多の叫びに、「門跡の目ははじめてやや強く本多を見据ゑた」と作者は書いてゐる。

「それも心々こころごとですさかい」

本多は庭に立ち「記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまった」と思ふ。

「庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる」

昭和四十五年十一月二十五日の、日附がある。その日の朝、三島氏はこの原稿を机上に残して、市ヶ谷台に向つたのである。』と三島氏を最も知る村松氏は結んでゐる。

その日から一年有余たった。あのテレビに写し出された映像は最早二度とは帰つてこない。

三島由紀夫氏は、此の阿頼耶識といふ哲学を発見して、アジャンタの洞窟を訪れた。

このアラヤ識を象徴するアジャンタの洞窟の龍は、時には高く、時には静寂そのものに返るリズムをくり返しつゝ、今も尚、緑の自然の中に高々と空にかゝつてゐる。

然し、村松氏は、三島氏の文学は、何かゞ終つた所から始まるといふが、彼の死によつて、一体何が起つたといふのであらう。

彼は、曾て、約二千五百年前、釈尊といふ偉大な思想家、哲学者の最高の知恵と呼ばれた哲学を、現在世界に、持込んだのである。

小説では、敗戦の焼跡の中から、亡霊のやうに現れた蓼科が持つてゐた守り本尊を本多に贈る。それが手垢にまみれた孔雀経である。それにアラヤ識の哲学が記されてゐた。彼はその呪文の意味を解読して、それが現世最高の哲学であることを知る。

その宝玉のやうな最高の哲学が私にもたらされたのは、村松氏の前記の書からである。私も神

風連血涙史にひかれて、彼の小説を読んでゐるだが、本当に私の心に定着するためには、彼を最も知る村松氏を介さねばならなかつた。

彼三島由紀夫氏は、この光りかゞやく珠玉のやうな哲学を、彼一流の方法で全日本に、そして全世界に問ふたのである。

彼一流の方法と云つたが、丁度般若心経が生れたのと同じ経過を辿つたやうにも思はれる。

般若心経には、観自在菩薩が、深般若波羅密多みつたを行ずるの時、五蘊じん(変易流転する一切世間)皆、空なりと照見す。とあるが、此の観自在菩薩は、法華経によれば、仏を供養するために、自らの手に燈を点じた。我身を施すその故に、一切自在の仏性を得て、法華経を後の世に伝ふる者の守護仏となることを付託されるのである。

苦難に会ふ者が、その御名を呼べば、響の音に應ずる如く応現して無畏の心を授け、危難より救ふので、又の名を観世音とか、観音とか呼ばれる。

この観自在菩薩のやうに、三島氏は此の世に存在した最高の哲学アラヤ識の哲学に我が身を捧げ、此の世に再びアラヤ識をもたらすために、閃光のやうにその生涯を閉ぢたのであらう。

(国民同胞—昭和四十七年二月号所載—)

ヨーロッパ紀行（その一）

私は国文研から派遣されて、日本婦人連盟十周年記念のヨーロッパ研修旅行に参加した。参加するに当って、私は二つの大きな命題を私なりに設定した。

その一つはヨーロッパとは何か。特に歴史の上で示された「文明」と「非人道」が同時に併存するヨーロッパとは何か、といふことである。もう一つは、日本は生産の上でヨーロッパを追ひ越したか、といふことであった。

ヨーロッパとは何か。

ローマ・パリ・ロンドン

ヨーロッパ人は異民族に対して非人道である。支那では阿片戦争をやり、濠州ではその原住民を皆殺しにし、その隣りのニュージールランドでも同じである。北米や南米に於ても同じことをやった。西洋には文明と非人道とが同時に併存する。

そこで西郷さんは、「文明とは道の広く行はるゝことにして、宮殿の華美壮麗なるを云ふに非

ず」と西洋文明批判をやった。松陰先生は「咸豊倫記」で正確な阿片戦争の記述を戦争の十五年後にやってをり、明治維新以後も日本は西洋の植民地にならないためにあらゆる努力を傾倒した。世界中で西洋の植民地にならなかつたのは、東洋では日本とタイ国だけである。大東亜戦争も広く云へば西洋に対する日本（東洋）の上記に対する設問でもあつた。

「エホバは、その名を嫉妬ねたみと云ひて嫉妬神ねたみかみなればなり」とてエホバの神を崇めぬ者をしひたげ、エホバ以外の神殿を破壊せよと命ずるのであるが、長い間僕は、その選民思想が普遍化して来て異民族をしひたげるのであらうかと思つてゐた。

然し、それ文では納得のいくものではない。「文明」と「非人道」とが同時に併存する西洋とは何であらうか。

先に本誌で「日本人とユダヤ人」といふ本を紹介したがその本が一番参考になつた。その本の中に奴隷に関する記事があつて、奴隷とは人間家畜であるとあつた。奴隷とは掠奪を受けた町や村の人々で捕虜になつた人々である。奴隷とならずして「生き残つた人々」は奴隷を抱へて自分の使役に使つたのである。

この繰り返し返しが西洋の歴史の本質を形成してゐるのである。

そこで、「生き残るための方策」の残骸を見つけることが私のヨーロッパの旅の大部分となる。古代ローマ人は絶対に破れない城壁の中に住んだ。そしてその城壁の内側には貴族達の最後の砦が作られてゐた。

「街」要塞であり、分離することの出来ない集合家屋である。

教会は村の中央にあって、或はその望楼から遠くを監視出来、非常の際は鐘を鳴らすことも出来たであらう。ノートルダムのせむし男はユーゴによって不朽の名を残すことゝなったが、一人たてこもっても落ちない「城」である。

ポンペイはベスヴィオの大爆発によって、一瞬にしてつひえ去った町である。これも厚い城壁に囲まれた要塞都市である。ローマにはフォロ（古代）ローマの城壁が方々にあるが、中世以降の城壁は百年前まで有効なものであった。然し戦後の新々ローマでは此の破壊された城壁の断面を幾度も出入した。

古代ローマは唯内乱によってのみ亡びたのである。

パリは例へば凱旋門を中心として四方八方に放射線の道路が出来てゐる。そして又他の広場がある。その広場を中心として四方八方に道路が広がる。

家は全て四階か五階で、一番上の屋根裏部屋の下階の窓の外に手すりがあって、走り廻ることが出来、此処から街路の向ふ側まで射撃が出来る仕組みである。

町全体が、三角形の街区のため、迷路になってゐて、道に迷った侵略者は、風の吹きだまりのやうに広場へ集つて来てこゝで殲滅される宿命となる。

ロンドンにはローマから遠いので、少し之と變つてゐて、四角な碁盤型の街路である。然しこの四角な街区は、全て要塞であつて、前述のやうに分離できない完全な集合家屋である。

ロンドンでは二階の窓の下に通路があつて、手摺がついてゐて、こゝから向ふ側の家まで射撃できるのである。パリと同じく四階を探したがどうしても見当らず、飛行機に乗り込まうとして忙しい最中にやうやく二階にあるのを発見できた。

ロンドンには、煉瓦による旧ロンドンを復旧する工事が幾つも連ねられてゐた。旧ロンドンはV二号によって壊滅させられたけれども、やはり生き残つたのである。

ロンドン市民は古い歴史の厚みを通して、旧ロンドン市に対する絶大な信頼をおいてゐるのである。ロンドンでは、他のヨーロッパの都市より二〇階以上の建物は一番目につくので、充分近代コンクリート建築も知つてゐるけれども、旧ロンドンを煉瓦で復旧してゐるのである。

「文明」と「非人道」とが同時に併存するヨーロッパの歴史の本体に作用するものは侵略するか侵略されるかの二者択一の思考しかないのであらう。それは日本のやうに侵略されたくなければ自分も侵略してはいけないといふ循環的思考は西洋には広く一般的思考としては存在しなかつたのであらう。

思考形式がそのやうな場合、十字軍などにしても、自分達が侵略を受けない時には、自ら侵略に出かけて行くことになるのである。歴史の上では、何か美化しようとするに違ひない。パリがその栄華を誇っても、それは掠奪の栄華であつた。パリのオペラ座や、ベルサイユ宮殿は全て大理石で出来てゐる。然し、かの古代ローマの神殿やコロシウム大建築も、大部分は全て煉瓦である。その縁取りや主要構造のジョイントの部分とか、装飾の部分だけを大理石で作つてあつた。ヨーロッパの文明は石と煉瓦の文明である。

今も到る所に鉄とかセメントの枠の間に煉瓦を積み重ねてゐた。石と煉瓦の時代に代つて、鉄とセメントの時代になりつゝある。

これに比し日本は木材の国であつた。然し今は鉄とセメントの時代にヨーロッパより一足早く先行しつゝある。

ともあれ、ヨーロッパとは何か。といふ本題に返る。

トインビーは、歴史の地平線が次第に広がって見えてくるにつれて、背後からいきなり竜騎兵の嵐のやうな襲撃をうけるといふ事態は次第に世界から影をひそめて来つゝあるといふ。

嘗て、過去四世紀の間ヨーロッパの列強は、互に本国で戦ひ、或は植民地で戦ひ、英、独、仏、伊、蘭、スペイン、ポルトガル等の間の戦ひによって、世界中を戦争の坩堝かんかと化した。然し第二次大戦以後は列強間お互の戦争を止めてしまった為に、世界中から戦争の大半が姿を消してしまつた。

然し中共を中心として、中ソの間には激しい戦意が沸いてゐるし、不思議にもその中ソ共同の支援によってベトナムには戦火が続いてゐるのである。

又朝鮮の三十八度線や、台湾海峡にも熱いまゝの停戦が続いてゐるのである。印度国境にしても樂觀を許さない。

中共は、戦争の恐怖を国内統一の手段として居るかに見えるのである。

反面、米ソを中心とした恐怖の均衡として知られてゐる現代の世界状況も、ヨーロッパの過去の歴史の本体が光芒を残し乍ら、新しい時代に入りつゝあるのであらう。

ヨーロッパ紀行(その二)

日本—ドイツ—スイス

さて第二の命題は「日本の工業生産はヨーロッパを追ひ越したか」といふことである。

日本は哲学、法学、医学、林学、陸軍についての学問を主としてドイツに学んだ。海軍、政治思想、経済については英国に、美術はフランス、イタリアに、音楽はドイツ、イタリアに、文学はフランス、ドイツに主として学んだ。

さうした学問は本来全体の国民生活の内面からにじみ出て来るもので、日本の現代の混乱は、夫々の学問が内部矛盾を起すところの違和現象である。

特に終戦後はアメリカの影響が強く、夫々の分野でアメリカ的思考が入って来て、その違和感を高潮させた。之が大学紛争の根底であると思はれる。それに追ひ打ちをかけたのが教育界の左傾であった。然し本質的には文化諸元の違和現象であった。

明治以来、政治家も教育家も庶民に至るまで、チャップリンよろしく、ヨーロッパの猿真似をして来た。それに対して、神風連は一切をかけて抵抗した。三島由紀夫氏が、「神風連の生き方以外にはなかったであらう。」と云って居たのを思ひだす。

自然科学、技術は試行錯誤の振幅の中で正されて行くであらうが、「学問全体」の拡がりは、大変な錯覚を冒してしまったので、百年掛りで、最大の振幅の錯誤を正さねばならない。それが三島由紀夫氏の死が意味するものであらう。西郷南洲の遺訓、又西南役などもそのやうな意味を持ってゐた。

然しほんたうに西洋を知り、之に批判を加へて行ったのは漱石であらう。江藤淳氏は漱石のこの点を発見した。然し「日本の本体」、或は「西洋の本体」の両面から三島氏程鋭く感じて居ないのかも知れない。漱石の予感し、肉迫して行ったものを更に継承し、発展、展開せしむべきであったが、日本は、日本人は、それをしなかったし、又今も尚気づいてゐない。

今年の元旦の毎日新聞の余録氏の評論は、「世界が日本の経済発展に気づいて、日本とは何かを研究しはじめた。そこで考へて見たが、我々も日本について一番知らない。そこで東大の先生の論文を見てみると、日本人は直観と情緒において優れてゐるとある。然し、直観と情緒では国

際性がない。やはり合理性でないと国際性がない」といふやうなことであった。

この評論に基いても判るやうに、日本の学問は、日本について知らうとはしなかつた。むしろこの「日本」を捨て、西洋を追つかけたのである。

次の間違ひは、直観性と情緒が頭（主人）で、合理性は手足（従者）であることを忘れてゐる。そして学問と称して客観性とか合理性とかを主人に据ゑたのは学問に於ける根本的な誤謬であつた。学問における主客顛倒である。云ひ換へるなら、英国には英国の合理性があり、ドイツにはドイツの合理性があつた。英国には英国の直観と情緒があり、ドイツにはドイツの直観と情緒があつた。

地域の合理性＝地域の経験＋その時点の合理性

といふやうに、合理性を分解して考へるなら、「地域の経験」とは、地域の直観と情緒が占める領域であり、合理性について云へば、「その時点」における合理性であつて、余録氏の云ふ如き、普遍的合理性などあるべくもない。

学問が日本に入つて来る過程で、此の情緒と直観を切捨て、しまつた。情緒と直観を理解するには、ホンヤク技術が不足してゐたので、合理的な部分（一十一〇）といふ如き部分文がフイ

ルターにかゝって出て来たのである。

「ホンヤクといふ技術」を通過する際に、血と肉は捨て、骨丈を拾ったのが、日本の学問であった。そしてその間違ひも未だ判らずに、学問とは本来合理的なものであると錯覚してしまつた。

私は林業に携はる者であるが、やはり自然科学と技術においても同じ間違ひを起してしまつた。「日本の風土」の中における林業といふべきを唯林業といふことに考へ方は走つてしまつた。

ヨーロッパで展開されてゐる林業は私の見る限りでは択伐林業（抜き伐り林業）であるが、日本を風靡してゐるのはドイツの法正林思想である。この法正林思想は、五十年の伐期であれば一年に一haづつ伐採すれば五十年で一巡するといふ皆伐方式である。ドイツ人にはドイツ人なりの「森」についての直観と情緒があつて、その本体は見失はれて居ないが林学が日本に入つて来る時には、その直観と情緒に入る部分は失はれて、法正林といふ合理的な部分文が入つて来たのである。

ドイツ語が使はるゝ範圍ドイツスイスオランダでは、言葉が判らなくても「私」といふものが何を問ふてゐるか判らうとする。これを親切と云へば親切と云ひ得るかも知れないが、それ

以上のものを知らうとしてゐるやうに思はれる。

全く言葉の判らぬ者同志が相手を判らうとすることは大変なことである。

前論が長くなつた。第二の問題に触れる。私はバスの中でネジを見た。ヨーロッパ中のバスで使はれてゐるのは、⊖ネジで⊕ネジは殆ど見かけない。ロンドンで始めて一部補修箇所⊕ネジが使はれてゐた。これを以てすれば、自動車工業においては、日本では全て流れ作業になつてゐて、自動化が進んでゐて、⊕ネジが使はれるといふことであらう。

汽車も同じである。して見れば、現在の段階では、工業生産は日本は西洋を追ひ越したのである。国際列車といふが鉄道は皆粗末なものだ。テレビの普及も、エレベーターのガタガタも全てこの事実を裏書きしてゐる。或はトラックの車種が日本の方が遙かに多いことも此の事実の裏書である。

然し我々には、二百年も三百年もたったローマもパリもロンドンもない。それ丈の違ひであるが、一体何が起つたのであらう。我々日本は、何でも作る能力だけは持つてゐるが、自分のために作る何物も持たないのである。

我々は今や日本を我々に向くやうに、我々が住み易いやうに、西洋を追っかけるやり方でなく、

我々自身の物を作って行く外に方法のないことを今こそ知る必要がある。

工業時代が過ぎ去って、脱工業時代の先頭に立つ日本は、今こそ日本本来の姿を見出す唯一の機会に遭遇してゐるのである。

追補一 連帯の中の個人主義

ローマでは日本風の二戸建ての平屋建瓦葺住宅が何軒も見えた。庭作りさへ何となく日本風な感じである。然し之は大金持の別荘であつた。

私は個人主義がヨーロッパの本体であるかの如く思つてゐた。然しヨーロッパの家屋は前述のやうに集合家屋で、要塞群である。絶対分離出来ない連帯の中に在る。此の「絶対分離できない連帯」の中の個人主義といふ「」の中には、西洋の直観と情緒の中に入る部分で、我々には、どうしても了解できない部分であり、「ホンヤク」不能の部分である。

個人と全、或は個人と社会的連帯感が社会の基本であるのだ。個人を綜合統一する社会のない個人主義はない筈である。西洋では集団住宅が、そしてそれを含む要塞都市が第一次的全体であつた。そして二次的全体が国家である。日本では家族生活（個人）があり一次全体が国家である。

自由にしても日本では風船の糸を切ることだけが自由の如く錯覚してゐる。

追補二 哲学

人間の思想もまた風土の影響を受けるといはれる。今私が通過する西洋は冬の真盛りで、イタリーの南半分ナポリにだけ蜜柑がなつてゐた。大部分、野も山も一面の雪だ。昼間の時間は短い。九時ではまだカラー写真は撮れない。午後三時にはもうカラー写真はだめだ。四時には日が暮れかける。特にロンドンの昼間は短かく霧がかゝつてゐる。英国は到る所草原の中に点在する巨木があり林がある。そして森はない。夢幻があり、妖精がさ迷ふ。暗い冬と明るい夏だけだ。

従つて、思想は正と反しかない。日本のやうに循環的思考は個人としては存在し得ても、社会的、一般的思考の型としては存在しないのであらう。又正反と云つても強いものが生き残るといふやうな「力」だけのものやうに思はれる。

氣候がモンスーン地帯でないので暴風雨も吹かぬから合理的である。潤葉樹といへども真円く生長し、アカマツでも日本のやうに、枝振りも良くなく、左右対称である。建物や庭園も全て左右対称であるが、教会がドイツ、オランダ、ロンドンでは左右非対称であつた。其の他は皆左右

対称であつた。

ヨーロッパの合理的な物の考へ方は、自然そのものが合理的な所から来るのである。

追補三 宗教

ローマのバチカン宮殿は素晴らしい。建物も巨大で壮麗で、芸術の宝庫であり、然も独立したバチカン王国である。日本から大使が派遣されてゐる。

バチカン宮殿には無数の聴問僧の部屋があり、沢山の人達が懺悔を続けてゐた。

教会が村の真中であつて、村の最期の砦であらうと先に述べた。それと同時に悟りを開き得ぬ心の罪人のためには告白こそ唯一の救ひとなる。外敵に対する護りと同時に内心に対する救ひの殿堂が教会である。

曾て私は、あまりにも強い王権があるために、ヨーロッパ中にキリスト教が拡まつたのだらうと思つてゐた。「王の物は王へ、神の物は神へ」の言葉通りに。然し王権が強くなければ、西洋の歴史環境の中では異民族の奴隷とされてしまふのである。

ヨーロッパのキリスト教を内外から強く緊縛した要因は除かれた。西洋の宗教も新しい本質的

内心へと目を開く時期に来て居るのではないか。

追補四 食事、水

日本の味覚は繊細で、西洋のそれは荒っぽい。御婦人の中には、洋食に強い振りをして「おいしい」と大きな声をたてる人もあった。然しパンも肉もまずい。かたい肉を無理して嚙んで入れ歯を痛めた人も居た。これは本にも入れ歯の予備を持って行けと出てゐるさうだが、料理の仕方が違ふので固い部分を除いてゐないからであらう。

パンがおいしかったのはオランダだけであった。オランダはコーヒーが特においしかった。野菜は八百屋の店先には沢山出てゐたが我々の食膳には殆んど上つて来ない。人参は親指程の小さいもので、玉葱も小さかった。野菜作りは概して下手だ。リングも小さく日本程種類は多くない。お茶と梅干を持って行った。茶瓶が割れないやうに、アルミの一番小さい急須に、小さな茶碗を入れて行った。言葉で云つても仲々通じないが、急須に茶の葉を入れてカウンターに持って行って「湯を呉れ」と云ふと直ぐ通じるのが多かった。水が悪くて、石けんもよく効かぬ位だからお茶もあまり良く出ない。但し、スイスの水は良く、お茶の味が忘れられない。

(国民同胞―昭和四十六年四月号所載―)

ヨーロッパ旅行の折の歌

極北の空を行く

金星は燈台の如く輝きて極北の空や、明けそめぬ

碧玉の空と思へる雲海の目の下暗く拡がりて居り

雲原と思ほゆるまで雲の波目の下はるか連りてあり

明けそむる雲海にや、近づけば朝ぎりはやく翼かすむる

燈の色とりどりにアンカレッジの町こまごまと目の下にある

牧畜と林業をしもかぬらんか真白き線は水路にもあるか

雲界を鳴りをひそめてゼット機は今かつくらむアンカレッジ空港

アムステルダムより発ちて

空港の朝のひととき旅人の一群のわれらしばしやすらふ

ヨーロッパの空港静かにて我が一群のみ息づきてをり

ヨーロッパの人もちらほら動きをる此の空港の朝のひとつとき

まもなくも飛行機来るか何となくざわめきたちて今たゝんとす

雲の上又雲ありて霧のごとき雲にし入れば翼ゆるゝよ

目の下は雲の浪なりゆるやかに過ぎゆく雲は目路はるかなり

八重雲を分けてといひし昔人の心思ひつみ空過ぎゆく

はるかなる右の彼方にスウェーデン・ノルウェーの国拡がるらむに

スウェーデン・ノルウェーの山見えぬかと目路をこらすも雲のみにして

朝焼けの雲に向ひて飛行機はひたかけりゆく極北の空を

雲々の峯はあかねにそまりつゝ流れつゞくる極北の空

極北の薄明の空紅のごと彩られつゝ日はしづみゆく

薄明の色も今はし消えはてて極北の地に夜は来たらんとする

熊大の庭園樹

久し振りに熊大の校庭を通った。昔、生えていた黒松や赤松は一本も無い。工学部には昔は縦の木があったが、今は数本が半死半生になっている。到る所にある杉や桧も皆枯れかけている。外国産のヒマラヤシダとテータ松が元気になっている。

これを見ていると情なくなる。古来からあった日本産の松や杉、桧、縦は皆枯れていくのに、ヒマラヤシダやテータ松だけが元気にしているのは、熊本大学の思想内容を思わせる。

熊大の庭には、日本産針葉樹は住みえないで、外国産針葉樹だけしか住みえないのである。

明治天皇が明治十九年に東大に行幸になり『洋学専修の徒を以て生徒を教導せば、推して知るべし』と、熊本生れの元田侍講（天皇の先生）に諭され、元田侍講は、「聖諭記」として大切に書き残し、これが教育勅語の生れる発端となる。「元田永孚先生生誕の地」なる碑が岩田屋伊勢丹の前に、道に面して建っている。

熊大においても、その教官は洋学専修の徒になってしまったのであろう。そして、あの熊大紛争になったのである。

曾て印度で生れた仏教の哲理は、日本では市井の中に生きている。又支那で生れた儒教は日本では市井の中に生きているが、その発祥地では、遙か昔に亡びてしまった。中華民國の胡蘭生氏は、日本で「心経随喜」という仏教の研究書を出しているが、儒教も、仏教も、日本で研究して始めて最高の価値と真意が判る。熊大の正門（旧五高）には、何の看板も昔は立てさせなかった。今はマルクス学徒の汚れたピラがベッタリ貼られている。ベッタリ貼れば、たった一日の広告のために、永い間はげないことが判っていて貼る頭の悪さの標本である。

これをもって見れば、戦後アメリカ民主主義、今はマルクス主義花盛りであるが、浅間山荘事件や早大其他で毎日行われる学内リンチ事件など考え合わせると、文明度は、マルクス主義が一番低いようである。低いというより文明以前の原始思想でさえある。大学内部で殺人や相互の私闘が頻繁に起るのは、文明以前、或は未開ということである。ついでに西洋民主主義の文明度の低さについて一言する。

英国の歴史学者でトインビーという人がいて、戦後日本に二回来たが、案内する日本の先生やスポンサー（毎日新聞）がまずくて、正しい日本の評論を紹介できなかったのは残念であった。

彼は伊勢神宮が一番好きである。彼の文明批評眼で、日本を素直に見て貰えば良いのに、日本

には宗教がない、など書いていた。彼は、その著「世界と西洋」で、日本は東洋文明の保持者であるとして書いているのであるから、案内者が真面目に案内したら、朝夕の寺の鐘の音とか、市井の木魚の音とか、太鼓の音を聞き逃がさなかったであろう、と僕には思われる。

そのトインビーが、阿片戦争の話をもつて聞かされて、「恥ずかしい思いがした」と書いている。彼から見れば阿片戦争は国辱であるにもかゝらず、英国人にとっては輝かしい勝利の栄光の歴史であろう。第一次大戦、第二次大戦もヨーロッパの内戦でしかないものであって、第二次大戦以後ヨーロッパが反省したので、E E C（ヨーロッパ経済共同体）ができて、これが次第に政治共同体にまで発展しつつあるが、そこまで発展すれば、世界の戦争は殆んど無くなる、と彼トインビーは云うのである。

阿片戦争を当時の日本人は野蛮な行動と見たが、明治の時代、岡倉天心も同様の趣旨を当時の西洋人について「茶の本」の中に述べている。曰く、「一般の西洋人は茶の湯を見て、東洋の珍奇稚気となしている、千百の奇癖の又の例に過ぎないと思って、袖の下で笑っているのであろう。西洋人は、日本が平和な文芸に眠っている間は、野蛮国と見ていたものである。然るに満州の野に大々の殺戮を行い始めてから文明国と呼んでいる。」（日露戦争のこと）

日本人でトインビーと同じ考えで今回の大東亜戦争を見る歴史学者は少ない。文部省の教科書にしてからが未開な野蛮人（全体主義国家群）が文明人（民主主義国家群）に戦争をしかけて負けたと書いてある。

負けたのは、文明がなかったから負けた、と思っているが、文明が低いから負けたのではない。西洋人や今の日本人はどのように考えて来たが、西洋人の中でトインビー唯一人、日本の文明は東洋の文明を代表し、西洋文明に対立（対等につきあえるもの）すると考えている。とすれば、大東亜戦争は負けるより勝った方が良からうけれども、負けたから「文明がおとっている」即ち「野蛮」と考える必要はない。

然し、現実には、戦後四分の一世紀の間に熊大の庭木や思想は逐次西洋の樹木や思想によって追いやられているのである。例えば樅の木とヒマラヤシダーと、どっちが良いかというなら樅の木が庭園木としては勝てよう。イヌ楨や高野楨などもって庭園木としても良い木であろうが、それ等は熊大に植えられてはいなかったのが無理である。いちようは支那大陸から、いつ頃からか渡って来た化石植物であるが、神社、仏閣を根城にして日本に定着した。一説には、化石時代から生き残ったとも云われるが、庭園木として良い木である。テラダ松やスラッシュ松

は、早く大きくなるが、同じ松でも赤松や黒松より風格が落ちる。

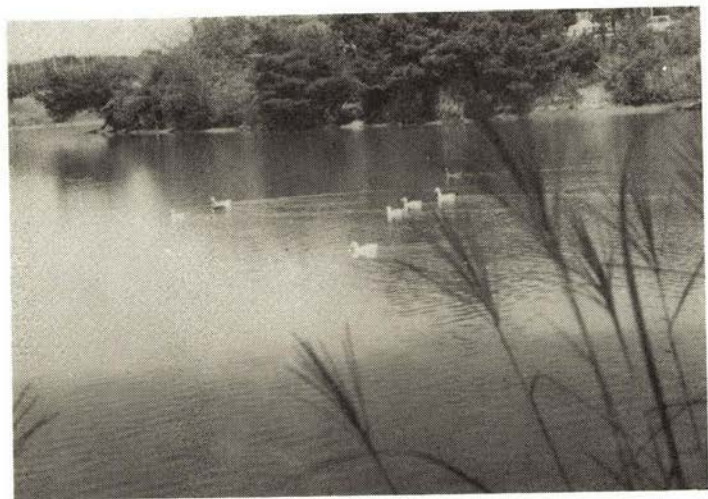
結局は、熊大からは日本古来の杉や桧や松や樅は駆逐されて、品のないヒマラヤ杉やテーダ松、スラッシュ松が保護されて繁茂している。

但し、忘れ去られてはいるが楠の木が庭の隅々に大きくなった。楠の木は庭園木としては悪い木ではない。しかしこれは、逆に楠公の精神が熊大に甦ったという証拠ではないので特に書き添えておきたい。

（「くまもと林業」所載）

論
稿
三

(教
育)



江津湖

開会のことば

Ⅰ 「全九州学生青年霧島合同合宿」 Ⅰ

皆さんは九州の各地より台風の余波の中について集まって来られたのでありますが、非常に大変な事だったと存じます。こうして同時代に生きる青年達が、合宿の大目的として掲げた『日本再建の方途』という如き問題について、徹底的に論じ合う機会を持つという事は全く稀有のことと思われれます。

例えば、現代日本の教育には『祖国日本』を口にするを恥じ、国を愛することさえ恥じるような雰囲気を感じられるのであります。この様な時代に教育を受けて居られる学生青年の方々に、特に「祖国愛」という事について徹底的に考えて戴きたいと思ひまして、有志の先生方と、此の合宿を計画致しました次第であります。

僅かな期間ではあります、此の貴重な時間に、同時代の青年学生の最も重大な問題について徹底的に話し合いをして戴き度い。之が私共合宿を開催致した趣旨であります。

開会の挨拶を申し上げますに当り、一寸一言私の感想を述べさせて戴きます。

私が終戦後、最も心を打たれた歌を数首紹介いたします。

かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜しまる (前橋市 安藤てる子)

その骨は拾ふすべなしシツタン河の砂一握を骨にするてふ (遺骨帰還)

夜もすがら灯をかかけつつとこしへの名残かなしみ君とひと夜を (納骨)

(以上二首 岡山県 大饗蓮華)

誇らかに吾が母ぞとぞ友に告ぐる吾子よ嬉しもこの母をすら (奈良市 潮井ゆふ)

此等の歌は、戦争未亡人の歌集「此の果てに君ある如く」の中の数首であります。自分の愛する凡てのものを捧げて尚悔いない国、かからん国の来らんことをこそ祈り、最愛の夫をも、又最愛の子等をも、捧げて来た母や妻の嘆きの歌であります。

だまされていた等という劣弱な精神ではありません。日本女性の伝統的精神の高き調べこそ、今の日本の愚昧な精神の横行する中に、その悲しい、然し何者をも恐れず、高い英雄的心緒を歌い上げて余す所のないものと思えます。

学者や先生方は、甚だ物体ぶった考えを故意に複雑化して述べて居られますが、その複雑なものも純一なものに統一する生命力がありません。哲学、或は政治学、経済学と申しましても、か

くの如く、徹底的に専門分化してそれを統一する生命力を亡くした時は、百万言を費しても、無意味というよりむしろ有害なものとなり、他の人々をも自己の不信不安へと、かりたてる丈でありましょう。しかも一般の人々が大多数之に雷同して居るのが、今の日本の姿であり、誠に憂うべき現象というべきであります。

立退きを強くも言はる庭先の紅き鶏頭亡夫が植ゑしもの

(栃木県 田中とし子)

王蘭ハクレンの散るに思へば君の命つなぎがたかるものにありしか

(香川県 土屋 緑)

この果てに君ある如く思はれて春の渚にしばしたたずむ

(宮城県 丹野まみ子)

一輪の花がほろりと散る、その散る花にも偲ばるるは夫の生命のはつる日のことであるという。何というもの悲しさ、しかも涙も涸れ果つるまで泣きはらしつてもその愛しき夫の今はのきはをよみ上げて行く強靱な心、そしてつき上げて来る一切の衝迫をつつむ豊かな人間性が、ここに深々として漂うのを感じしめられます。だが之等の精神の深さは、今日の思想的雰囲気からは到底理解しがたいものになっているのではありますまいか。

私は思います。此等名も無き女性こそ、此の迷い、分裂する日本の土台を支えて居るのであると。かく深く高き伝統的精神に従って、青年学生の皆様が世界史の現段階に日本の運命を拓いて

戴きたいと思いません。

御承知の様に、幕末において、此の鹿児島も、山口県の下関も、英米仏蘭四国連合艦隊等で、徹底的に砲撃された。之等を防ぐに何等の武力をも持ち合わせなかつた当時の青年達は如何にして立ち上つたか。他のアジアの国々が全て植民地となり果てたにも拘らず、遂に独立を護り通してその運命を開拓したのは、あの維新の青年達であつたのであります。歴史の必然などという如きものにより日本の運命は護れません。

皆様が此の歴史のありのままの姿を学び取つて、当時に劣らず困難な内外の情勢の中で、切りひらくべき祖国の道は一体何か、豊かな青年の情意を以て真剣に論じ合い、語りあかしていただきたいと切にお願いして開会の言葉と致します。

（「混迷の時代に指標を求めて」所載
―国民文化研究会編―昭和三十一年十一月七日）

「第二回全九州学生青年合宿」挨拶

縁あって我々百余名の者がこの福岡の地に集まり、三泊四日の生活を共にすることになりました。思えば不思議な機縁であります。現在、我が日本の国家国民生活は階級に或いは世代に分裂の一途をたどっていると申していかと思います。勿論それに対する打開策は種々考えられておりますけれども、観念によってとらえられた方策は、窮極において何の効果もあげることには出来なではありません。我々は今ここに八動乱の世界における日本の進路V—国民生活上刷新の根底を何処に求むべきか—ということを合宿のテーマとして取り上げましたが、このテーマを中心として年令や職業の差別をこえ、一切の成心を去って、心と心の触れ合う語らいの場所がもたれますならば、そこにこそ民族再生の根源が把握出来るのではあるまいか。我々国民文化研究会はかく信じまして、このような機会を今参加者の皆様に提供したものであります。分裂した国民生活をもう一度統一あらしめるための集約点として、ささやかではありますが、かりそめならぬこの機会を十分に生かしていただきたいと思えます。

（昭和三十二年国民文化研究会第二回全九州学生青年合宿研究会報告『民族自立のために』）

ぼくらはかく祈りかく意志する一』より。))

開会の挨拶 「共通の広場を形成するもの」

一「第三回全九州学生青年合宿」一

外交問題にしても労働運動にしても、はたまた勤評、道德教育に至るまで、氷炭相容れない政治的対立が続く。良識ある国民の一人としてこのような果知れない泥沼闘争を心よくむかえる人がおるであろうか。現状の不信感と前途への不安のうちに、窒息する思いで過しているのがいつわらざる国民の心情ではあるまいか。このような盲点についてフランスのロペールギランが「日本には共通の広場がない」という意味のことを云っている。このことは通説化するようになった。しかし対立と混乱は相も変らず根強く続いている。それでは何故共通の場が生れないのか。広場を形成する原理は何なのか。そのことについては考えようとしなさい。誰か又外国の文化人にそのことを指摘して貰わなければわからぬのかも知れぬ。しかしたとい外国の作家が指摘してそれが一般化したとしても、それでは解決にはならないであろう。日本人自身の痛感として、我々自身の声として、真剣に叫ばれるようにならねば、この課題は打開すべくもないのである。

思えば現代の日本人は大きな空虚の中に過しているのではないか。流行する言論、組織化される運動、それらには他国製イデオロギーの焼きなおしといってもいいものが余りにも多い。いい換えれば日本という国土と生活に根ざした正統なる思考法が失われているのである。国では文化国家を標榜しながら、そして我々の身边には東西の偉大なる文化遺産があふれながら、その言動は最も非文化的内容でみだされている。俗世史家は最近の昭和史を歴史なき時代とよぶであろう。このような時代にささやかな力を集めて合宿を挙行することは、かりそめならぬ歴史のいとなみである。ここに集って来られた方達は、九州一円は云うに及ばず、遠くは岡山、大阪、和歌山からおみえになっている。更に若きは十代の青年諸君から、古きは五十代の校長先生に至るまで、さながら国民生活の縮図である。私達はこれから四日間、世代を超え、立場を超えて、あるべき日本国民生活の典型を現出したいと思う。現代の対立抗争を打開する鍵は、私達のこれからの合宿生活の中に用意されることを確信して開会の言葉としたい。

(昭和三十三年八月二十一日「民族の明日を求めて」)

― 第三回全九州学生青年合宿研修会報告 ―

(国民文化研究会発行) 所載)

協同研究

熊本大学の諸友の論語の輪読会に参加して思ったことをまとめてみた。そして、新しく大学に入学された学生の方々の参考になればと思ふ。

学問とは一体何だらうか。

このことは、我々が学生時代にもやはり僕の心を把へた問題であった。

「論語の巻頭に出て来る「学んでときに之を習ふ。亦説よろこばしからずや」に続いて「朋とも有り。遠方より来たる。亦樂しからずや」とある。学問と朋友との関係が、大学生活の全てであるときさへ考へられる。

精神生活の不可思議な深さと広さを理解し、その深さと広さに堪へつゝ、迷はず進む道を見出して行くことが学徒の本分ではあるまいか。

然し、このやうに云ってみても、人間そのものが一番知り難いものであってみれば、迷はず進むといふ事は容易なことではない。物質の世界は、原子について知ることが広くなればなる程明らかになって、電子計算機といふ技術を以て、自然科学の飛躍が実現し、生体としての人間の解

明にも役立つであらうが、究極の人間そのものについては、依然としてますます知り難いものであることに変わりはない。

従つて迷ふことなく生きる道を見出して行くことは仲々困難な問題で、凡そ一生涯をかけての課題であらう。

然しながらまた、生きる道をかけての思想、哲学は、閉塞的な個人の思惟世界から生産されないで、人と人との対話から生れてくるのではなからうか。人間の精神は交流することによって、「生命」となるのではなからうか。嘗て或る詩人は「人と人との間に生命が生れる」といった。心と心が感応し合ふ不思議。共感共鳴の世界が展けて来て、新しい人生が始るのである。概念と概念との対立が新しいテーゼを生むのでなく、対話の中に於て初めて新しいテーゼが生れてくるのである。

単語と単語を結びつけると、何程でも新しい概念が生れて来る。此の点、漢語とドイツ語と相似てをるが、此の幾らでも生じて来る概念は、頭の中にみづから描く迷路に似てゐる。概念的造語なるものは、とかくそれによって人生を規定しようとし、活きた事実をそのままに見ようとする目をさまたげるものであるとするなら、この迷路から抜け出るために、我々はその概念、また

概念的構成の所産を、ほかならぬ我が身自身にこころみ、現実世界にためしながら進まねばなるまい。

人間の精神は交流の中に、「対話」の中に、新しい息吹きと共に自立する。ここに学問の「協同研究」が要求される理由があると言へよう。

学者が自らの研究室だけに閉ぢこもり、自分の外に一步も出ることをしてほしくないならば、此処には進歩もない。日本の思想がマルクス学説の圏内を今なほ彷徨してゐるのも、一方大衆に媚を売る売文業者が、学者然としてゐることにもよらうが、論争とか、真の協同研究等が起らないことに重要な一因がある。

益々分化して行く専門過程を元に引き戻して、政治、経済、文学の専攻者、はた又自然科学者等の対談によって、人間の精神を角度を変へて見つめて行き、更に協同研究の方向に展開して行くことが出来るなら、此処にはじめて発展的な思想が生れて来ると思ふ。

学問の視野は益々狭く、深くなるが、之を巨視の世界で綜合する力を失ってしまったのが、今の日本の無思想状態であると云へる。

進歩、退歩も、正邪真偽もその価値基準があまりにも概念的すぎるきらひはないだらうか。か

くで起る、無限の分裂のみが我々を包んでゐる。

新しく大学に入学された青年諸君にお願ひしたい。あなた方は大学の名にまどはされることなく、今の日本に真実の学問は影がうすく、「対話」からでなく妄想から出てきたことばが、学問の体裁をかぶって、国民の分裂抗争に大きく寄与してゐる事実を目を開いていただきたい。学徒としての責任を負ひつゝ互いに研鑽していきたいと心から祈るものである。

(国民同胞―昭和三十七年六月号所載―)

「日本」病氣のこと

昨年、熊本国文研の例会で黒上先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読を終り、其の後夜久正雄著「古事記のいのち」の輪読をつゞけて居ります。

毎回十名余りの会員、主として小中学校の先生方の集りですが、教育界の病根の深さを語り合つてゐます。

さて、聖徳太子維摩経義疏に「第三に文珠問ひて言^{いは}く、居士よ、此の疾^{やまひ}は當^{まさ}に如何^{いかん}が滅すべき

と。浄名（維摩）答へて言く、一切の衆生病めるを以て、是の故に我れ病む」とありますが、四千年前の印度には、病深きものがありました。仏教の達人も亦「病」にかゝって居ると申して居ります。

病に気付くことが病を直して行く唯一の方法ではないかと思ひます。今の日本は何となく変だと思ふ人は多いでせうが、「病」に罹ってゐるとは思つてゐないのでせう。

政治では自民党に黒い霧がかゝってゐるといつて社会党は喚き散らしましたが「社会党よ、お前もか」と新聞は述べて居ります。目糞、鼻糞を笑ふの類と思ひます。

私は、時々大学に参りますが、政治のスローガンが汚いまでべたべた貼つてあります。正しくまさく大学は赤旗に占領されてしまったと思はれます。特に文科系の人達がひどく犯されて居るやうです。果して文科系の大学出は、きははれて、中学や高校の卒業生は引張旗だといふことは、大学に於ける教育の悪効果を世間一般は知つて居るのだと云へると思ひます。唯知らないのは文部省丈のやうに思はれてなりません。一体文部省はどのやうな教育の在り方を期待し、又効果を期待してゐるのか。大学を卒業した人達がどのやうな思想になつてゐるのかを判定して居るのでせうか。

萬全の策があるなら今直ちにその策を研究して欲しい。たとへそれが行はれたとしても二十一年の教育の空しさは今に於て如何ともし難いではないか。

東大学長は小さな善意運動を提唱された。悪いことではないが、学長自身は、自ら責任を持つべき東大生がどのやうになつて居るのかを御存知なのだらうか。

先生の言葉を学生達は冷やゝかに保守反動だと心に思ひ乍ら聞いて居る現実に対して、どのやうにお考へなのだらうか。試験問題に対する答へが例へ八十点だといつてそれは最高の教育の効果であるとして満足されるのであらうか。学生達は唯問題に対する回答の名人ではあつても、物を、人生を本質的に捉へて行くには小、中学生にも劣つて居るのではないのだらうか。

全ての大学がスト突入の寸前にあります。之に対して国民は、文部省は、教授達はどのやうに考へて居るのでせうか。

親鸞は萬川長流に流るゝ草木を「まへはうしろをかへりみず、うしろはまへをかへりみず」と申して居ります。

奈落へと進み行く日本の姿さながらではないでせうか。

然し親鸞は「先なるは後をみちびき、後なるは先をとぶらひ」と人の世の在るべき姿を鮮やかに

に画いて居ります。

「日本」は病気になるてゐるのでせう。自分をも含めて、国民の一人一人が「病」に罹つてゐるのだと気付いたら問題は早く解決するのではないでせうか。

(国民同胞—昭和四十二年二月号所載—)

Xさんへ

拜啓 霧島の合宿が懐かしく、又郷愁のやうに思はるゝ今日此の頃、如何お過しですか。

大学は激しく動揺し、その解決の方途は見出されて居らぬ許りか益々その困難さを増して来たかに思はれます。大学問題は、これだけが独立した問題ではなく、一九七〇年に向ふ日本の腐敗、無能の姿でもあります。

私共は、此の「集団の暴力」に対し唯「集団の暴力」の對抗をのみ考へてはならないと思ひます。「目には目を、齒には齒を」は言ひふるされた言葉で、判り易い事かもしれませんが、之では社会の進行の真実の姿を現はして居ないと思ひます。曾て、ヒトラーは「暴力には暴力を」、

「思想には思想を」と申しました。やはり同じ発想法に外ならないと思ひます。

明治維新に於ける吉田松陰は幽囚に在って黙霖と国家を論じた。曰く「君と僕とは幕府を倒すことには同意見であり、又力を以て之を倒すことは間違ひであるといふことも同じ意見である。」
「然し」と云って、之より生命をこめた論争が起ります。身は幽囚に在り乍ら自分と最も考へ方の近い、此の一人の黙霖に対して、「君は一筆奸権を誅すと云ふが、僕は一誠兆民を感ぜしむ」と云って居ります。

一筆奸権を誅すとは、孔子、孟子が二千五百年前に行つたが未だ実らない。自分は幽囚の身に在り乍ら幕府の非を論じても無意味で、幕府も藩公も忠誠を尽さなかつた三百年の罪は大きい、之を諫めて忠誠に向かはしめなかつた自分の罪を思ふ。若し此の儘、此の幽囚の儘死んで行くとも、「唯一人の生きた人間に自分の志を托するんだ」之が自分の云ふ一誠兆民を感ぜしむと云ふ事だ。自分の言はんとすることが判らなければ絶交である、と申し送って居ります。

「茫然自失、為すことを知らない罪」を思ふならば、自分達には今日一日の「自由の日」があり、之を精一杯生命をかけて生きることだ。たった一人の人を動かすことだ。「一人から十人、十人から百人」と云ふ言葉も松陰の講孟餘話にあります。

「校長が駄目だ」等安易に自らの逃げ道を作らないことではないか。校長をも動かし、又同僚をも動かし、そして生徒をも動かすことだと思ひます。之は唯、団結する為でなく、自分が「生きる」と云ふ真実の意味であると思ふからです。団結する為に国文研に入るのではなく、自分が自分の一生に責任を負ひ、又社会に対する責任を負ふ、唯一人になつてもやると云ふ発憤の意味を以て、又孟子の「千萬人と雖も我行かん」と云ふ立志を以て国文研に参加下さるやう御願ひします。国文研は数を増すための運動でないことを重ねて申し上げます。国文研は此の様に、一人一人が一日一日を真実生きようとする者の集りに過ぎないと思ふからです。

昭和四十二年十二月三日

(書簡下書き 宛名不詳 昭和四十二年ノートより)

大学を良識の府たらしめよ

(一)先日、熊大スト実行委員と会った。彼にどうして老教授を十数時間もつめこんで非道い交渉をするのかと聞いた。彼は一生懸命、教授達が自分達の主張を聞き入れないからだ。又、教授達

はドクターストップを悪用して居ると云ふのである。此の「自分達の主張」を世の中に押しつける思想が既におかしい。大学生は国民の税によって、大学でヌクヌクと勉強して居ることを忘れて居る。つまり、同年令の働く人達は既に税金を支払って居る。その上にあぐらをかいて、更に電気料金、水道料金を僅かな大学の維持研究費の中から負担せよと云ふのである。

(二)無理を承知で横車を押す為には、学校に矛盾があると云はねばならない。そこで問題をすり替へて、大学の矛盾に目を向けさせて更に横車を一步進めた。彼の言によれば、教授の中には、「目覚めた学者」も居ると云ふ。問題は此の辺にある。評議會を批判する弾劾文が有志教授の名の下に大学に張り出され、又此の趣旨と同様な共産党熊大細胞のピラがばらまかれた。

(三)問題は生協に端を發した。そこで、生協に問題を投げかけてみると、新聞によれば今は赤字ではない。来年度赤字が出る。生協は教授理事と学生理事とから成ると云ふ。之等の理事には多額の報酬が出されて居る。生協の経営の責任は全て理事にあるので、大学自身には責任がないのが常識であり、世の通念である。僕は学生理事と云ふので、その通りだと思つて居たが、嘗ては学生であつたが今は学生でなくなつて居る者が何人か居る。生協を注視して、合理的運営を行ふ以外に問題は解決しない。学生諸君のみならず、教授をも含めて生協会員は焦点をはっきりして

貰ひたい。

四我々国民に与へられた新聞の報ずる所では、「学生の一方的リード」と紳士的に書かれて居たが、揚げ足取りだけに時間を消費して、十数時間も老教授をつめ込んだ。そして、評議会はドクターストップを悪用すると云ふ教授への不信感はどこから来たのか。これこそ現代教育の最終の成果である。スト実行委員は（何年生か聞かなかつたが）未だ童顔であつた。此の童顔をむしばむ不信感こそ戦後教育の最大の報ひである。

（四）熊大が革命への道を一步踏み出すか、さうでない道を選ぶかの重大な岐路に立つ現在、多数の良識ある学生と共に、良識ある大多数の教授の奮起を御願ひする。

（昭和四十三年熊本日日新聞「読者のひろば」投稿）

狂った理性

今日の新聞に「学長選挙させぬ―熊大共闘総決起集会で決議―」と云ふ見出しが載つてゐる。どのやうな理由があるにせよ学長の居ない大学を想定する大学生の理性は狂つて来たらしい。最近の学園紛争を分析する新聞社も、大学人も、文部省も、学園紛争は世界的風潮として済ました

り、或は人間疎外で済ましたりする。このやうに「物の考へ方」がをかしいから問題は少しも展開しない。学校教育が偏向して居るのを見過してと云ふより「くさいものにはふた」してよけて通つて居るのである。或る大学の経済学部ではマル経以外の講座がないと云ふ。大学の学科が此のやうなことであれば、マルクス学説だけが横行するのも当り前である。「くさいものにふた」をしておいて制度だけいぢくりまはしても何もなるまい。物を考へるには順序を立てて考へる必要がある。古典『大学』に「本末終始先後する所を知らば道は近し」とある。本末を明かにしないまゝ末にばかりこだはるのが現代の特徴かもしれない。道より遠いはずである。

「本」の字は、「木」が古い字形で、「木」と下の意を表はす「丁」とからなり、音は根ネからきてゐる。木の下の部分の意と記されて居る。林学は従来、幹に集中し過ぎて根については最近漸く関心を呼び興した。果樹や農学では早くから根についての研究が盛んで、日本農学の展開は肥料から始まったのである。そして、土地生産性向上の面で欧米の労働生産性に中心をおく農学と対比されるのである。

根本を忘れては何も出来ない。世の中も、根本を忘れて進んで居るやうに思ふ。

(熊本の林業「昭和四十三年九月号所載」)

パパ付き、カー付き、田舎付き

かつて「パパ抜き、家付き、車付き」という言葉がはやったのに憤慨した。随分前、木下恵介が日本の悲劇という映画を作った。苦勞して育てた子供達に、次々にそむかれて、自殺するといふ映画であった。

今住んでいる僕の家の近くでは、老人達は追い出されるか、別居同様な冷遇の中に在り、又は冷遇のまゝに死んで行った。

これでは、親の怨霊が充満してうまく行かないだろう。

ところで最近のはやりは、上に掲げた題だそうだ。それにしても、子守りが雇えないので、パパが居ると便利であると言ふ意味らしい。それにしても、思いやりのない、いやらしい言葉である。

戦後、母という言葉よりも、ママ（英語）がはやっている。

母という言葉程、私達をばげまし勇気づけ男子として生きる道を求めさせるものはない。

母は小学校の教育が変わったために、馬鹿にされつゞけている。学校では、母の姿を教えて呉れ

ない。母は、子供を教育する自信を失った。然し真実の言葉と、真実の心とは母が口うつしにして呉れるものだ。日本の母は、世界一立派な母なのだから、自信を持って子供の教育をして欲しい。

母がママになった時、母が母たる自信を失った時母でなくなった。そしてその時子供達は、マゴンと呼び、教育ママと呼び馬鹿にする。

序論が長くなりすぎた。

フォードという米国の自動車王は、農村の農閑期に、部品を組みたてさせているという。僕は大変立派なことだと思った。

この「ババ付き、カー付き、田舎付き」という題について思うことは、今年兼業を含めて、農家所得が百万円を越したと聞いたからである。僕は日本の農業の宿命をこれ以外にはないと思う。文明が進む程、ノイローゼも進む。此のノイローゼを解消するには、土イジリ以外にはないのだ。

公共投資が進むにつれて田舎と、都会の距離は近くなる。

都会の仕事でノイローゼになるのを、日曜百姓で解消する。そうすると日本のノイローゼは解

消する。

過密、過疎の問題は解決するのである。都市と農村の格差も解消する。

先日離農者に、百万円の国庫補助という標題が新聞に出ていた。

これは、日本農業の「五反百姓」という宿命に抗するものであり、ノイローゼを増大する処方箋であるように思われる。

パパ付きをやめて、

母付き、カー付き、田舎付きの楽しい日本になって欲しい。

(「熊本の林業」昭和四十四年二月号所載)

熊大のストはナンセンス

熊大にも生協問題をキッカケに一部の学部がスト体制に入ったと聞いた。僕は甚だ残念に思ふ。熊大は熊本県の学生が三ノ四割を占めると聞くが、熊本の土地は、熊本の環境は革命を好まない。僕がかつて熊大の前身とも云ふべき五高に学んだ。五高と熊本市民とは信頼関係によって結ばれ

て居たのである。五高生がとんでもないイタヅラをやっても市民は微笑を持って見守った。反面、五高生は「武夫原頭に草萌えて」と高唱しつゝも、真の学問を求め続けた。熊大生よ、真の学問を求めよ。スト権確立とは学問の世界ではナンセンスである。十有五にして学に志す。之は約二千五百年前の孔子の言葉である。そして彼は一生物学の道を求め続けた。君達は「古い」と云ふかもしれない。然し、学問の世界では「スト」はナンセンスではないか。吾々、熊本市民はこのナンセンスは許せない。生協の不合理を是正すると云ふ要求は大学が呑んだと聞いてゐる。それをキツカケにスト権確立と云ふ飛躍をした。従つて吾々市民としては益々ナンセンスに思へて来るのである。

（熊本日日新聞「読者のひろば」投稿）

熊大法文学部の措置に疑問

熊大ストについてナンセンスであることを指摘して三ヶ月たった。解除派の学生が、熊大自治確立の為に立ち上つて、工学部では大多数の賛同を得て解除を宣言した。然るに、全共闘派はこれを不服として工学部を占拠した。これに対し、教授や学生の果敢な自力解除が実施されたけれ

ども、ヘルメットも持たずゲバ棒も持たぬ者の側には十数名の怪我人が出て如何ともなし得なかつた。今回、機動隊の出動を要請した事について教授会がこれを支持したことも当然のことである。元熊大教授松本唯一先生の投書では、教養部の教授の在り方について疑問の点を指摘されたが、法文でも学生と教授間の闇取引が行はれて居る。法文学部はスト解除しないまゝ論文提出をして卒業させると約した。学生もストを離脱しないまゝ卒業する為論文を出すといふ。かういふことは自らをも騙すものである。学生は学生らしくフェアプレイで、すっきりした形で胸をはって卒業して貰ひたい。又、教授もすっきりした形で学生を送り出す努力をして貰ひたい。僕は特に、法文や教養部の教授側に首尾一貫した態度こそ願ってやまない。学生に迎合しては教育者としての責任は果せないのである。かつて五高の頃、白壁教授が居られた。先生は耳が遠いので時により沢山の学生が欠席者の代返をして居た。先生はそしらぬふりで代返をした者の顔をジロツと見られるのである。そして、その都度こちらは心の中に恥づかしい思ひがした。この様な気持ちを起させることが教育の重大な要素であらう。沢山の代返者が居ても先生は唯一回の説教もされなかつた。ストのまゝ、こっそりと論文を提出するスト派の学生は、自らをも騙し世をも欺く者である。又、法文の教授は此の風潮を助長するものである。自らをも欺いて恥ない様な大学の

学風こそ先づ正すべきである。

(昭和四十四年五月)

戦後教育の反省の好機

昭和四十三年十一月に始まり、四十四年六月に到る間の熊大のスト騒ぎを教育的見地から検討すると、戦後二十五年の教育の成果反省の好機に来て居るやうに思ふ。

戦後の教育のまゝに進んで行くとマルクス主義に大変弱い学生が育つて来たことがわかる。教育者も一般の人もこれ程学生の考へが「進んで」居るとは思ひもしなかった、と云ふのがあの時の実感である。友人の先生は、これ等の学生が育つたのは、あの激しかった学生闘争の頃に小中学生であつた子供達で、申し訳ないことになってしまった。あの頃、あんなことをしなければ、こんな大学生は生れて来なかつたに違ひない、と云はれる。戦後、町を風靡したクリスマス騒ぎはアメリカ文明の弊風と見て良いが、今では響盞を買ふやうなクリスマス騒ぎが少なくなった。そして静かなクリスマスになった。これに似て響盞を買つた大学紛争は一応鎮静したが、マルクス主義に弱い学生の層は決して浅くはないのである。原因のない成果はない筈で、大学の中のマル

クス主義花盛りは戦後教育の成果である。教育効果と関連して考察すると、大学教授はマルクス主義に一番弱く、二番目に高校教諭である。三人の子供の成長過程を見てみると此のことがはっきり判る。このやうなことから戦後日本の教育を概観すると、教育にも公害が広がって居るのが判る。どうすれば子供達を教育公害から守れるかと云ふことは、社会の最も重要な課題であるが、一月十七日の熊日記事は此の間の事情を一般に伝へる機会であった。今こそ戦後教育反省の好機と思はれるので敢て一言を投ずる者である。

(昭和四十七年一月)

「國語の建設」を読んで

『國語の建設』を読んでもると、國語を守るために死んで行かれた林さんのお父さんの姿が髣髴として来る。

そして、美しい正しい日本語には、無数の生命がそがれて成長して来たことがわかる。

此の本で、音（聲）は生命のうめきであり或は生命の飛翔のしるしであるといふ「一音一義」の考へや、五十音の説明は見事なものである。

言語が道具ではなく心（生命）そのものであると云ふことがはじめてほんたうに判った気がする。

美しい日本語は、母から子へ口うつしされるのであるが、母の心が濁り母の言葉が離れると、教育をしようにも、学校教育では手の届かぬものとなってしまふ。おまけに教育は、知識偏重、理論偏重に陥って、正しい情操の成長が期待できない。

現在の教育が不毛のものであったことはあの大学紛争が証明済みである。しかし教育者達は、不毛の教育であったとは考へず、唯一部の人が憂悶するのみである。

教育正常化の第一着手は国語の正しい教育にある。そして、知識、理論、自然科学偏重を排し、情操の教育を、正しく美しい国語を通じて実行すべきであると痛感する。今こそ、改革と称して戦後國語に加へられた暴力を一日も早く取除けてやる時期に到達したのである。

新しく生れてくる人達には、美しい正しい日本語を伝へる責任が私達に課せられてゐるのである。

（「木霊」―昭和四十七年十二月発行―林武著『國語の建設』の反響―所載の読後感想文より転載）

「熊本国文研第一回合宿」趣意書

去る八月、第十七回学生青年合宿教室に参加した教職関係の方々相集ひ、我等の交りを深めて、教育の真のあるべき姿を見出すことを目的として、第一回熊本国民文化研究会の合宿を開催することとしました。

感激の中に相別れて二ヶ月を経過しました。かつこの間、合宿の講師先生方から交々、その成り行きを憂ひて話された安易な方向を取ってしまった感じが致します。

南洲翁遺訓（岩波文庫）に、外交のことは一国をひっさげて倒るゝの気概なくんばある可からずとあります。何と痛烈な言葉ではないでせうか。中共と交はることによって、台湾との外交を絶つとは、中国の言葉の遠交近攻と云ふ言葉通りの外交を強制されたやうに思はれます。我々は近きも遠きもより一層交はりを深めて行く必要があります。

外交など一応おいて、さて教育とは何であるかについて、考へますと、人の「心」は実在するが空なものである。今まで笑つてゐた者がもう泣いてゐる。この空なる心をしっかりさせること、これが教育の本体ではないでせうか。今の教育はこの空なる内なる心については何の考慮も払ふ

ことなく、唯心の外の世界のものについてのみ関心を持って、所謂科学的教育が教育であると錯誤して居ると思はれます。

教育理念に錯誤があれば、これを正すと云ふことは国家の大事業であります、今度集った同志の方々によって、しっかりと教育の理念を把握して、この大事業の第一歩を踏み出して欲しいと思ひます。

かゝる意味において第一日に修猷館高校小柳先生に講演をして戴いて、その夜は自由討議を行ひます。翌日は、黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（各自持参）及び河村幹雄先生著「名も無き民の心」について、班別に輪読を行ひたいと思ひます。そして、最後に自由討議を行つて解散したいと思ひます。

全員参加下さる様、お願ひします。

（昭和四十七年十一月）

病院にて思ふ

今僕は或る病院で糖尿病を養うて居る。沢山の人が療養してゐるが、一人々々夫々の宿命を背負つて病氣と闘つてゐる。その中で、隣に居る人の宿命をあまりに悲しく思ふ。その人は学生の火炎ビンで傷つき、両腕の骨までその傷が達し、左手、左下半身が不随である。大便も小便も不随なのだ。そして時々、思考の方も不随になる。奥さんは昼の間一杯に働いて、夜になつてやつて来て、大急ぎで一日の洗濯を終へ、又朝から仕事に行くのである。傷ついた警官は「カァチャン」と尋ねつゞけ、他家の似てゐる小母さんを間違へては「返事もせん」と怒るのである。

生活と療養が「カァチャン」の腕一本にかかつて居るのに、孫が交通事故に会つたといふことで、二、三日来られなかつた。幸ひに生命は取止めたと云ふものゝ、頭の骨がゆがみ、腕にひびが入つたといふ。それを夫にも言はず、独りで苦しんでゐる奥さんの事を思ふと、一家に降りかかつて来る悪運の数々を思ふだけで、どうにもかうにもならない。

僕は午前と午後の運動が療養の仕事の一つであるので、朝夕熊本城内を廻つて、護国神社と加藤神社にお詣りしてゐる。自分はどうなつてもかまはぬので、此の人をお助け下さいと祈りはす

るものゝ、夜くどくど奥さんを怒るので、こちらもねむれず、どうかこちらもお助け下さいと、お祈りせずにはゐられなくなって、自分を不甲斐なく思ひ情けない次第である。

此の間に、三菱銀行人質事件が起って、警官が二人死んだ。二階級特進といふのが小さく出た。一人は二十歳、一人は五十二歳と出てゐる。此の人達の後のことはどうなるのであらうか。通り一遍の補償はあっても、手厚いとはいへないのではないか。

僕の隣に寝ている年老いた元警官の生活費と医療費はどうなつて居るのであらうか。現今、国のため直接生命を捧げる人は、自衛官と警官であり、特に犠牲は警官に多いやうに思はれる。

午前と午後の散歩が僕の療養の仕事の一つであるので、その護国神社にお詣りするのであるが、護国神社には、前大戦迄の軍民の殉国の方々をお祀りしてあり、又消防殉職者の碑はあるが、自衛官、警察官の殉職者の碑はない。併せて記した次第である。

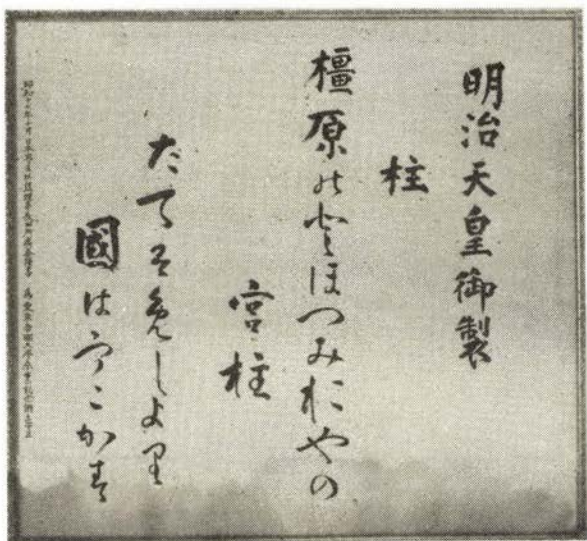
充分の調査もなく書いた文章で、間違ひがあるかもしれないが、杞憂に過ぎなければ幸ひである。

(昭和五十四年二月十一日熊本日日新聞)

“読者の広場”投稿)

論稿四

(戦前)



(東京帝国大学卒業記念として、先輩 田所廣泰氏) から贈られた色紙

山莊日誌

理二乙 瀬上安正

五月十三日 植木の仏巖寺さんに請願して来山あり。奔走し三十人程集む、あまり多く種々の質問出て、話がちぐはぐとなる。然しその話の中に「まあやって見い」と言はれた。日本精神の研究をやって居ると言つてをったのにそれぢや他の会と何の変る所もない。と云つて居られたが、我々は敢てそれを急とせぬ。入学後日尚浅き新入生も居るし、会員の友達も沢山来たのだから。

五月十七日 会報発送

五月二十日 例会後、愛甲、貞末、久保、上野と余と議論す。上野もよく吾々の気持と合致す。

五月二十九日 小楠先生の墓を訪ふ。橋本、城とも一人の三氏にあひ憂国の情、共に談ず。今日公会堂に於て、週年記念日で大講会があつて居るはずだ。

六月三日 新たに肱岡稔治来会す。

六月二〇日 納富さん来山あり。

六月二二日 九大鶴田さん来山。

七月 七日 福井さん来山一泊。

七月 八日 森さん来山、共に語らふ。栗山先輩も来山あり。

七月 九日 試験終了。先輩への九月に於ける懇親会の招待状を出す。森さん下山。ちいさん、

ばあさん、久ちゃんと活動写真に行く。夜中村主計先輩来山あり。一泊。

八月三十日 本日より勤労奉仕がある。勤労奉仕の真精神は、奉仕の精神と集团的統一並びに実践する歓びとに存する。大阿蘇が時たま雨雲の隙間に見える。小さな霖雨は吾等の意気に感じ
たものか、次第にうすれて、本来なら焼けつくが如き桑畑の土が春雨の後の柔かさだ。全ての
人が各々の仕事を営々としてやる。

八月卅一日 昨日の仕事にもかゝらず、誰一人の遅刻もない様だ。無蓋車に急設の板を打ちつ
けた椅子は、五高生を子供にした。彼等は喜んで乗り、小学生のやうにおしゃべりをし、未だ
あまりなれぬ土に眺め入って居る。

昨日に変わる今日の天気は昼のむし暑さを思はせる。でも朝は朗らかだ。徐々に展開する檜の林。
その間に見えつかくれつする阿蘇の載雲の雄姿。それ等がぐつと右にそれて行ったと思ふと、

電車の足がのろくなった。長い坂道が一直線に続いて居る。あへぐ様に電車の唸りが聞え、ほとんど止ってしまった時、わっと歓声をあげて彼等は喜ぶのだ。此の様なものを超文明的存在と考へて居る。歴史的存在だといひ、遺物的存在だといふ。途端車は又ごとごととのろのろと動き出す。

九月一日 今日我真中の日であり、又世に謂ふ三日目だ、と校長先生の話がある。

百姓の小母さんが西瓜を喰はせるとか云ふのでついて行つた。かんかん照りつける緑の反射の中に真円い西瓜が其処にも此処にもころがって居る。大きいのから小さいのまでくれる。思ふ存分喰ひまくつた。そして小母さんは親切に校長先生にもと言つて頼む。我々はこんな所にこんな親切を受けるのは嬉しいものだ。

百姓の小父さんが通りかゝつた。そんなやり方では駄目だと言つて、桑を掘りかけたが、此んな鎌では駄目だと言つて逃げて行つたとか。

九月二日 吾々の仕事は今日ではほとんどすんだ。校長先生昨日の西瓜に味をしめてか、西瓜を食はせて呉れた。そういへば昨日校長先生始め他の先生方の嬉しさうな笑顔を思ひ出す。明日は最後だ、しっかりやれとの校長の訓話の後、例の通り武夫原頭をうたふ。今日もやっぱり阿蘇

の煙は静かになびいてゐる。

九月三日 五日間の勤勞奉仕を無事に済した。やっと馴れ始めた此の平和の土地に別れをつけるのだ。朝夕乗った無蓋の檻褌電車ともお別れだ。でも吾等の仕事は終わった。皆一様に、誰一人の区別もなく仕事をした。肉刺こぶも何のその。皮の剥げるのさへ糞喰へ。

武夫原頭に於ける豚汁会。皆食ふわ食ふわ。

福井さん来山、一泊。

九月四日 今日は先輩方との懇親会だ。でも招待状をあまりおそく出したのでどうかと思はれる。唯原さんが一人来山あり。自由者と革新者との学内に於ける激しい争について種々の意見承る。東光会の使命たるや大なり。十有五年の歴史と伝統を誇るのは天下広しと雖も吾が東光会あるのみだ。吾々は大いに自覚せねばならぬ。

九月五日 原さん、丸田、余と三人横井小楠先生の墓に詣づ。広々と続く平原の彼方、此処にも悠然たる阿蘇の姿は横たはる。維新の先覚者小楠先生の墓にふさはしく村人たちの心掛かは知らぬが壁一つとゞめぬ聖域だ。原さんはしきりに知と行の合一を説かる。其処にこそ吾等の生くる道はある。

市原さん来山あり。朝鮮のメスの行脚のお話等うかゞふ。

九月十六日 第一回例会、御進講草案を読み、本学期に於ける抱負を語らふ。新しい意気に燃えて今度の東光を現会員の手により作成する事に決す。

九月廿三日 大義を輪読す。純忠それこそ我々日本人の生くべき道だ。

九月三十日 防空演習あり。出席者金沢、貞末、上野、水谷、井上、山の者。四十分の座禅の後、テキストを講孟余話に決す。

十月二日 余下山す。

十月七日 講孟余話を輪読す。やはり孟子と共に進まねばいかぬ。

十月十五日 本日学術協会発会式五高講堂に於て挙行。

十月十六日 本、明二日に亘り医大に於て学術協行はる。

十月十九日 小崎氏と久ちゃん結婚、大いに飲む。

十月廿一日 脇山さんの御土産により小崎氏と会員一同歓談す。

十月廿八日 提灯行列。例会取止め。私はあの熱狂の大衆が好きだ。歌ふ人間にしる、沈黙の人間にしる彼等は何か大きな力により動く魂がある。それこそ火野葦平に言はすれば、気味の悪

い程の凶太さだ。

十一月三日 明治節。式後黒石原に於ける豚汁会に行く。帰りに鹿子生、丸田、余三人隈府に廻り菊池神社に参拝し、菊池一門の誠忠の跡にその昔を偲ぶ。

十一月七日 鶴田さん来山。

十一月四日 新たに中山参会す。「学生連盟」の「愛国学生」の本多熊太郎氏「新興国家防圧に焦慮する歐洲外交」を読む。講孟余話着々と進む。

十一月十八日 本里新たに来る。中山、井上、貞末、丸田、瀬上六人で山の火鉢を囲み座談す。

東光の原稿尚集らず。催促す。

十二月三日 東光印刷にかゝれども日切迫しプリント屋に頼む事に決す。

(昭和十三年度「秋季東光」より)

いろいろの事ども

理二乙 瀬上安正

道德は人間の存する所必ず生ず、と云はれる。従つて道德は社会生活に即応したものであらねばならぬ。即ち道德は、社会生活の複雑化と共に更に便利な方向へと発展すると考へられる。

然らば果してかゝる方向へと道德は変わるものであらうか。

道德は時と共に変ずる、他のあらゆる文化と同様流転する。全ゆるものが流転するとは如何なる事を意味するか、此処に問題がある。即ち流転とは、単なる流転ではなく、進歩であらねばならぬ。或は完全なる調和に向つて進むものであると考へられる。私は必ずしも現在提げられてゐる道德そのまゝが完全なる調和では無いと信ずる。「我々の心の調和」に対する障碍に対して道義的な正義感が生起する、此の正義感の存在こそ道德そのものゝ価値の存する所であらねばならぬ、道德は単なる習慣ではないのだから。

吾々は、文化人として或る一定の道德を修得した。之は、単に基礎として与へられたものにす

ぎぬ。我々は現在持つてゐる道徳をその儘行ふ事すら負担になり、或は余りにも重すぎる場合がある。かゝる理由は何処に存するであらう。行くべき道が峻し過ぎる時我々は座ってしまはねばならぬだらうか。松陰先生は言はれた。「教に非ず、当然の事である。」と。我々は当然の事すら出来ぬのか。我々は鍛練を要するのだ。当然の事を当り前に行ふべき鍛練を要するのだ。之まで人間としての基礎である。之から道徳を自由に、任意に吾々は行ひ得るものとなる。全く負担になるものではない。然して此の時からほんたうに道徳の進歩があらはれる。完全なる自己意識中にあるとき、常に吾々には負担なく更に新たなる道徳へと進むものである。我々は敢て七十を待つて不躰矩の境地に達すべきか。

自 由

仏典には、煩惱を脱し、迷を去つて涅槃に入るといひ、基督は、悪魔と闘へと教へる。然らば、之にて人生を終れり、とするか。煩惱を去り、悪魔をたゞきふせる事は勿論容易な事ではない。然し一生を唯それだけに止めて我が事終れりとするか。

私は、然らずと呼ぶ。さすれば私は法螺を吹いてゐる事になる。私自身尚悪魔と煩惱のみから成ると言つても良いのだから。

然し私は、それ等を克服する事を断言したのではない。唯吾々はそれ等を克服した時始めて人間の基礎が出来たと信ずる。それ等を克服して始めて、人間となったのだ。此処に彼は自由人としての第一歩を踏み出したゞけである。自由は其処に存する。他人との摩擦が無い事が自由なのではない。自分の権利が踏みつけられさへせねば自由だと考へる自由主義が存する。客観的に見た場合には彼は自由かも知れぬ。然し果して彼自身は自由であらうか。否彼は自由ではない。彼は彼自身さへ動かせぬ不自由人だ。彼はサーカスの綱渡りが綱渡りに於て有する自由さへ持たぬのだ。彼は唯、自己の中にある、或は外にある何ものかの為に唯押し流される者に過ぎない。彼は自由ではない。彼は戦々競々として他人の権利と自己の権利を守らねばならぬ。

社 会

或は考へる。

此処に無限の真空がある。之に或る有限個の気体分子を拡散して見よう。各分子はあらゆる方向に各自の道を辿るに違ひない。

人間そのものが此の分子であった場合、人間は果して之で満足するか。或る一定の家と、一定の庭と、一定の畑とを配給された人間が、各々一人宛完全に、此の地球を分割して配置されたと

する。彼等は他の空間と何等の交渉もない。唯自分だけの空間を有するのみで果して満足するだらうか。然も、たとへ之で満足した所で、更に各個のものを統一しようとする試みそのものは人間の飽くことなき意欲の当然の帰結である。世界は分割されてゐない。彼等は一つ空間にぎっしりと詰って生活してゐるのだ。

我々はお互にていしょくしたい。人間自らを統一したい。唯それだけだ。先の仮定の空間に住んだ人間は高い鉄壁をどうにかして脱け出して必ず或る空間に倶楽部を作るに違ひ無からう。勿論私は倶楽部そのものを社会であると断定するものではないが。

(昭和十三年度五高東光会発行「東光」第四号より)

五高だより

— 東光会より —

我が国は今や大いなる維新を断行して居る。昭和維新即ち之である。我々はこの昭和維新が如

何なる性質のものかを究明し、之に如何なる態度を以て臨むべきかを明察すると共に、断乎たる決意を以て実践すべきである。

昭和維新は一大国難なり。之は明らかに我が国人一般の知る所。然して国難の真意を解せぬ者多きは歎ずべき一事である。日本国民の一人をも餘さず之を了解すべき秋に当り、天下の柱石を以て任せざる可からざる高校生の中にすら誤まれる認識を持つ憐むべき、否むしろ邦家の為に痛憤に堪へざる者が居る。国難は内憂外患と為す事が出来る。戦争遂行は一つの外患にも属し、内憂にも属する。先づ内憂について述べれば、倦み易く熱し易きは日本人の短所である。曰く、戦争はまだやっとる様です。誰か知らんかくの如き冷静にして、純客観的言辞を敢て広言する者日本の最高インテリを以て自任する大人なる事を。世人の注意の弛緩と共に彼は腹を膨らましてかく云ふ。然して小インテリは又得々として新聞を評して曰く、「日本が勝った勝ったとばかり書いた所で支那人も虫けらばかりの筈もあるまい。どうせ政府の指金か、ジャーナリズムの然する所だよ」と。我々はかくの如き存在を非日本人と呼ぼう。

即ち戦争遂行の第一難関はかくの如き非日本人をして内在的に追放する事である。之こそ戦争遂行の否国難打開の第一要件である。然して、戦争遂行に関する問題としては、国民の誠からな

る後援が戦士にとつての最大なる安心を齎らすものであり、力なる事を述べべきである。

戦争遂行に関する第二の問題は、戦争経済であり、それと共に又国民経済をも含め得る。戦争は勝たざる可からず。之即ち遂行の意義であるが、兎に角戦争続行を可能ならしむる一つの要因は経済力である。その政策は当局に任せよう。と云つても、我々がそれに対する真摯な研究を止めると云ふのではない。我々は簡易素朴の生活を以て経済力の貯蓄に邁進せねばならぬ。如何に多くの奢侈浮薄が、文化的或は近代的の美名の下に世に瀾漫して居る事よ。映画は常識、喫茶は息抜き、カフェ、おでん屋は骨休め、然して彼等は、欧米的浮薄の中に浸潤して行く。浮薄なるが故に浮薄を知らぬ。浮薄の中に浮薄ならざるものを見つける事、それは直観であり、自己自身で見つけ得る人は餘程偉い者である。唯凡人には浮薄の中に浮薄ならざる事の、発見し難きのみならず、浮薄そのものの中に頭を突込み易いものである。それに対するブレーキが、修養である。我々の此の世流が浮薄になった今日此の浮薄なる世を見つめさせて呉れるものが、古典の中にある、或は千年もの間に幾度も読み続けられた仏典の中にある。浮薄な人生の見方は常に欧米人の見方に存してゐる。人間を見る見方が常に、外形的なるが故に分析的説明的になる。浮薄ならざるものは常に内容的なるが故に総合的神秘的となる。分析的人間の見方に於ては、複雑なるもの、

多種多様なものが問題になるのではなく、本質そのものが、問題となる。即ち我々は簡易素朴の中に於て尚人間的な内容なるものを見つめて行ける。否むしろかくしてこそ、文化的と呼ばれる皮相的なものにより煩はされる事なく、人間的な内容を見つめ得る。

經濟そのものが、簡易素朴なるに於て内容を持つものである時始めて眞の經濟となる事、言を待たない。かくの如き經濟こそ現戦争下の經濟であり、又不変の經濟である。

国難の内憂について述べて来たが、昭和維新は国難であると共に、現代世界史の轉換である。

端的に云へば、歐米的世界史否むしろ英国史的世界史が、日本史的世界史への変革を示して居る。歐米、否むしろ英国は侵略国である。日本は道義国である。五十三対一の対立こそ、日本の国家意志の世界史に於ける顕現である。即ち大国の重圧による平衡の否定たりしのみならず、日本は創造を意図した。独伊の単なる現状打破の意図との本質的差異が、其処に存するのであり、然も、彼等独伊をしてかく立たしめし所以は、日本の世界史的意図なる事疑ふべくもない。日本は独歩である。ヒットラーの偉大に唾然たる日本人は居る。だが彼は日本国の更に偉大なる国家意志には氣付いて居ない。

英国は侵略国である。老獪なる外交と、神聖なる可き宗教をさへ政策とする非人道と、軍備的

恫愕とにより、幾多の国家を滅亡せしめて居る。然も皮肉な事に、日本の実力を最初に認めたまのは彼等であり、彼の国の学者によって、常に踊らされたのが、我が国の学者先生である。日本の国体を破壊するものは普遍性の強調である。故に彼等は普遍性を説いて日本の先生方に目隠しをした。日本の国体を破壊するものは皮相的平和である。故に彼等は先づ、諸先生に平和を説いて聞かせた。日本の学者連が、学問は自由なりといふ最後の止めで全く盲目になって居る事は誰も知って居る事実である。彼等は日本を知らない。即ち彼等は非日本人である。彼等は自己を知らない。だから彼等は非人間的幽霊的存在である。

彼等はまだ覚めないのか。日本の使命を知った時始めて彼等も生命ある人間になり得るのだ。幽霊的存在から始めて蘇生し得るのだ。真に日本的世界史の創造こそ日本の使命であり、世界古事記の創造なのだ。

『学生生活』第二卷第六号、昭和十四年六月
「大学・高校通信」の中から

東光会消息

我が東光会の創立は大正十四年である。学生並びに社会の思潮の最も乱れた時、その創立を見た事は又会をして意義あらしむる一つの根拠であらう。

日本の姿は常に戦闘的である。一は外に對し、一は内自己に對するものである。戦闘的といふ言葉の意味は防禦的、受身的なものでなく、自発的創造的なものである。誠の聲に耳を傾ける時、我々は必然的に創造的になる。即ち戦闘的になる。戦闘的といふものが好戦的といふのでない事勿論であるが、安易な平和論を含むものではない。戦闘的なものは形象的犠牲に払う注意以上に仕事そのものゝ完成を目指すものである。即ち勝利である。勝利は創造である。東光会の創立者が、戦闘的精神の保持者であった事により、その後を受けつく東光会員が、その伝統に生きる事は必然ではあるが、創立当時の戦闘精神は常に我々の会員の鑑ともなるものである。

東光会にもやはり興類がある。時には二、三人を以て頑張つて居た事さへあるのだ。然し彼等が、常に戦闘的生活を以て終始した事は、又、会が常に多人数を包含する事のみ目的としたものでなく、むすび（結び）の出来た日本人を作る事を目的とし、かくの如き日本人が、一人居れ

ば日本が存続すると云ふ信念を捨てなかつたからである。今尚我々は「むすび」の出来た日本人たらん事の方針を取るものであって、一面東光会が独善的であると云ふ非難を受けるのは常に其処に起因する。

共感の原理が、むすびの状態に於て始めて可能なる事は言をまたぬ。国民精神総動員が単に空論に終らんとする今日、各社会、小にしては友人、家族から会社、学校或は其の他の団体の生命が、此のむすびを通じたる共感の原理に基く事に留意せねばならぬ。

龍南史を通じて見て、むすびの消えた時龍南の衰頹を見る。龍南人としてのむすび、龍南といふ共感が消えなるとする時龍南の生命が枯渴したものとなつて居る。むすびの聯環的連りが更に、日本といふ共感の上に打ち建てられた時、日本は日本たり得る。

東光会の試みた他の特色は禅にある。創立せられて数年その背後を支持して戴いた師が沢木興道和尚であつた。禅的人生観は常に在るが儘のもの、本体を見窮めんとするもので濶達自在の境地に吾人を立たせる。囚はれた世人の所謂悩みが如何に貧弱なものであるかは、世人周知の事実であつて、然も彼等は悩みが如何につまらぬものであらうとも価値あるものだといふ公理を立てて世人を迷はして居る。彼等は公理そのものについては悩まうとしないのだ。吾々は須く達観

の境地に在らねばならぬ。禪について吾々は云々しまい。要するに禪は座禪をやる事だと一先輩に云はれた。他の特色は先に述べた結びの涵養所たる合宿（本部）を有する事である。一度此の幽境に入るや、他の被覆に覆はれる事なく、精神そのものたる人間に客観的に目覚め得る。山中なるが故に、親密度が増すわけである。先輩諸兄が尋ねて来るに好都合である。更に東光会の歴史が山の爺さん其他家族より幾度か語り草として繰り返され、単なる名簿的先輩に血肉をつけて呉れるのである。吾々は普通合宿のことを山又は山荘と愛称して居る。山が今尚電燈をつけず、ランプなる事は、社会的浮薄そのものに対する象徴的批判となり得るものであるが、この一事を以て奮奮墨守を宣言される事又宜なる哉である。

十五年の星霜を経たる今日、幾多誇り得る大先輩達を有する事は、最も喜ばしきものであると共に、時折りの訪れに当り、或は談論し、或は酒を汲み交はす好機を得る。

大体之までで東光会の進んで来た道を紹介する事が出来たと思ふから、少し現状について述べて見よう。吾が龍南がたどって来た道が創立当時の国士的教育を土台としたる自由教育であった為に、東光会なる物の必要が無かった事は事実であるが、学問といふ美名にかくれて、個人主義自由主義並にその上に立つ共產主義などが、信奉され出して以来、龍南の精神的伝統が失はれ、

個人絶対などと良い加減な戯言に、自分自身を見失って居る状態である。云ひ代ふれば、龍南の精神的伝統が、此の東光会によりやっと維持されて居るとも考へられる。現在の高校生が国に対して幾分自覚して来て居る事は明瞭である。現在の大学が腐敗して居る事は、過去の高等学校生活が原因して居るし、教授そのものが、過去の人間なるが故に、かくなつたものと考へられる。高等学校が、過去に於けるマルキシズム抑圧の為に、凡ての点で中学校的に墮落して居る。即ち高校生たるの独自性の喪失を余儀なくせしめられ、今尚歪められた伝統を固執して居るものだと解せられる。感受性多き青年が、世界を動かして居る此の日本について、何等の意識もなく過して居るとはどうしても考へられず、学校の講堂に於ける祝祭日等に於ける出席の増加は、必ずや何物かを語って居ると云ひ得るのである。唯高校生を誤れる過去の人間の現代日本に対する書籍評論等により、若き青年の国家意識を誤った方向に進める事こそ唯一の難関であり、吾々自覚せる若き青年との時代的精神交流のみが真に彼等を正しき方向へと進めるものだと思ふ。吾々の力を注ぐべき点は此処にあるのであって、明確に日本自体を知らしむる事が吾等の任務であらう。彼等は未だ薄明りの混沌状態にあるのである。が、光りの来る方向そのものは既に自覚しつつある事と思ふ。

東光会は今一週に一度の例会を山に於て催して居る。人員としては寮生多数の爲、新学期は今まで会員獲得のみに終ったのであるが、方針は最初に述べた様なものを取る事にして居る。然し積極的に吾等自身の日本観を確実づける爲に、漢文の高森教授、日本史の鈴木教授等にお願ひして古典、神話等についての研究を行ふ。

因に昨年の例会について云ふと、先づ、六時半より三十分程坐禅御進講草案の朗読、輪読、討論の順序で行った。輪読のテキストとしては「講孟余話」、「大義（杉本五郎少佐）」、「すめらあじあ（鹿子木員信先生）」。「一昨年は「名も無き民の心（河村幹雄博士）」、「永遠の戦（鹿子木先生）」等を用ひた。

年二回会報「東光」を印刷して居る。大体先輩諸兄との連絡機関であつたが、会報としての内容を昨年より持たせる事にした。本年は各高校の同信団体にも送るつもりである。

今度文理科対抗のポートルースに於ける団長並びにリーダーが、殆んど半ば東光会より出た事は、吾が会の積極性の一面の現れであると痛快に思つて居るが、尚寮内弁論会の活躍も吾等の会員が主となってやって居る。寮の総代として、長谷川、青田の活躍の期待は大いなるものである。龍南の中心たる寮に於ける活躍が、龍南思想の革新の最短路なる事は疑もない。

現在、アジア研究会の創立の計画を進めてゐるが、可成りの賛成者を得て居る。五月中旬頃発会の予定で、諸兄の御援助御鞭撻を請ふ。

〔同信協力〕第一号 昭和十四年春 正大寮発刊
—— 全国高校合宿消息集 ——

平家の落人達

僕の郷里、熊本の友が上京して、丁度別れる間際、一緒に送りに行った友が一寸した歌の片言を云って、その歌を知らぬかと今帰らんとする友にたづねたのだが、その友は直ぐ自分のは節がはっきりしてゐないがとて歌って呉れた歌は次の歌である。

オドンガ ウッチンチウチ

(俺達が打死んでも)

タガニヤーチ クリユカ

(誰が泣いて呉れよか)

裏ノ松山 蟬ガナク

オドンガ ウッチネバ

(俺達が打死ねば)

ミチバチャ イケロ

(道端にうめろ)

通ル人ゴチ 花アゲロ

(通る人毎花あげろ)

花ハ何ノ花

ツンツン椿

水ハ天カラモラヒ水

僕はたしかに此の歌の響を何処かで聞いたことのある様な気がする。次第に歌ひ返して居る

間に僕の記憶に遙か彼方から此のメロディだけが生き生きとよみがへって来るのだ。

自分がふと此の歌詞を考へると心の奥底でかなづる此のメロディの神秘的餘韻が何処ともなく伝って来るのである。

郷里の友を送つての帰りに二人はしきりに此の素材で寂しい歌を繰り返しうたったのだ。

そして突然友は、この歌は明治十年の戦争の歌だらうと云ひだした。然し僕にはその餘韻が遙か彼方から聞えて来て更に更に遠いまだ自分が生れて来るずっと以前の記憶でもある様に思へるのだ。

僕は答へた。打死ねばとある打は接頭語で唯死ぬといふ事と同義語であり、討死といふのではないのだ。此の歌そのものは放浪の響を持って居るのだから戦争の中からも生れた歌ではないと云つたのである。

そして僕は僕の幻想を語り出した。

それは源平の末期、驕る平家は久しからずとうたはれたその平家の行方についての不思議な物語である。

平家は逐はれて都を落ち幼少の安徳天皇を奉じ壇の浦の藻屑と消えて行つたのであるが、更に

其の中の或者は老人と女子供とそしてそれを率ゐる或屈強の武士共は遙か九州の山々へと逃げのびて来た。誰も知らぬ奥山へ彼等は放浪の旅を続けて行ったのである。それより以後七百年の長い間、誰知るとなく唯不思議な物語としてのみ明治の御代まで山中の生活は続けられた。彼等落人達の子孫は生活の資料を仰ぐ時身を村人にやつして何処ともなく消えて行ったのである。

その山々とは人々の知る五家荘といはるゝ所である。それは更に日本三急流の一として知らるる球磨川の上流人吉への回想を伴って来た。

恐らく今郷里へ帰って行った友が、人吉の出身であるといふ事に基く自分の記憶の連鎖だった為であらう。

人吉といふ地は、相良城といふ古城を擁して古い古い時代より一文化単位をなし、又堅固な城は山嶮と共に七百年の長い間、世の戦国の時代より護られて来て居たのである。嘗て加藤清正は此の相良城の話を聞いたのだ。かれは一度此処を訪れようと常に思つて居た。かれは唯此処を奪らうといふ野望だけではなく、その奥山の文化への憧れの為に常にかれの心をそゝられたのである。

かれは幾萬かの精鋭を引きつれて此の急流球磨川を遡って行ったのである。道もなく、唯河の

みは深山をけづつて奔湍となり、紺青の淵となつて悠久の昔より流れ続けて居た。十五日、二十日とはたても軍勢の進路は全く閉ざされて居る。唯流れのみ遠き山のかなたよりかれの心を招くが如く溜々と流れ奔ばしるのだった。かれの軍勢のみならず誰一人として、その辺りにたはむるゝ猿の外はその峻嶮を伝つて行き得ないのだった。遂に空しくかれは熊本之城へと引返して行つたのである。加藤清正の話は、秀吉の天下統一と家康の野望との間に介在せる一悲劇を残しつつ過ぎし時代の記録として、又郷土の人々の記憶とさへなつて今の世に語り伝へられて居る。ほぼ三百五十年の昔の事である。

人も通へぬ山中の文化の物語は、奇しくも僕の記憶の中へよみがへつて来た。そして、今し別れた友の言葉を憶ひ起して居たのである。

此の歌は子守歌です。

僕は此の言葉は今尚僕自身の頭の中で繰り返され、平家滅亡の物語を幼い時に聞かされたのを更にはっきりと思ひ起した。

平家蟹となつた壇の浦の落人。そして又、清盛の暴逆と重盛の純忠の物語。僕の記憶はそれからそれへと続いて行くのだったが、はたと僕の前に大きく浮き出して来たのは重盛の姿である。

嘗て僕は、所謂王朝の文化は平家と共に海の中へと沈んで行った、といふことを恐ろしいまで明瞭に思ひ出して来たのである。清盛の暴逆は遂に平家の滅亡へとさって行ったのであるが、美しくも奇しき涙をそゝる重盛の精神伝統は又何処より受けつがれたものであったのだらう。

平安朝の公卿の文化は平氏と共に消えて行った。悲しくもあまりに強く僕の記憶に残って居るその言葉。そして友の歌ってくれたあの囁々と響く子守歌のメロディは、放浪に放浪を続けねばならなかった或祖先達の物語ではなかっただらうか。僕は今までかくも希望を失へる放浪の歌を日本の歌謡の中に見出した事はないのである。悲しき祖先達の残した放浪の定めなき旅に、平家といふより正しき重盛の雄々しく悲しき物語につづけられし次代の民心の餘韻ではないだらうか。

続いて来た鎌倉時代、戦国時代は末法思想の具体的表現を色んなものに見出すのであるが、実朝の歌は又時代批判の切々たる響を持って居るものゝ一つである。

鎌倉仏教はかく人心の頹廢の中より真実常住の永久生命欣求の生活の中より生れたのである。あの歌が果して此の頃の歌であるかどうかは判らぬが、たゞ思ひ出づるまゝ書いた独断を許されたい。

(昭和十七年二月「新指導者」第五卷第二号所載)

大学の研究室より

僕は静かな研究室の中で林価計算の本をじっと読んで居た。あまりに静かな空気の中で唯三人のページを聞く音が伝ふだけである。と此の静かな研究室の中で次第に分離して行く心の寂しさのいや果てに誰からともなく話しが始めて来るのである。

次第に融け合ふ心の歎び、静かさに包まれ個我に分離する不安も消えて温き心に包まるゝ生命の脈絡の中に交々と開くる思ひに語り合ふのである。

A「どうも教室でノートを取る時間が惜しくなる事もある。然し自分で読み度いと思ふ本を読んで居ても又二十頁も読めば又違った本に目が移り仲々読み通せないものだ。」

B「僕も全く其の通りだ。僕等は精神分裂症に懸って居るのだよ。」

C「僕もさうだと思ふ。僕は学問といっても唯林業だけについても、凡ゆる学問の領域に拡がって居り、我々の其の時の意識の統一次第で、如何なる領域も自分の研究対象となつて来るのではないだらうか。」

A「どうもはつきりつかめぬが、君の云ふのは写真機の焦点の合せ方に従つて其処ばかり頭の

中で明確に考へられるといふ意味の事かしら。」

C 「さうなんだ。或時は経済、或時は技術又或時は美とか、色んなものに自分の意識が集中して来る。そして實際此の様に学問上では限界を決めて之だけが経済に、之だけが政治に、之だけが技術に属するといふ具合に厳密に分類しようとする。之を幾ら厳密に理智の上で分類しても仕方がないのではないだらうか。」

B 「さうなんだ。僕が精神分裂症といった気持は自分に一つの目的もなく、思ひ附きみたくに自分の気紛れな焦点に引きずり廻されて居って結局行きつく所も無い不安に自分でたまらなくなつて来るのだ。」

A 「さうだ、僕達は一つの目的を持たねばならぬ。」

B 「然し僕にはその目的が自分で別らん。」

C 「志を立てるといふ事が最も必要だと思ふが、其時々々の目的は自分の一貫した志に統一されたものとしてのみ価値があるんじゃないかしら。目的といつても結局気紛れな目的が僕達を引張り廻して行くんだから。」

A 「僕はもう云はれると全く恥かしくなる。志なんて持たんのだよ。」

B 「法学部や経済学部で高文が勉強の中心になるのも無理はないのぢゃないか。」

A 「さうだな。僕等の農学部などの進路は案外疎開して居てどこへ行くにも開けて居るといふ安心があるし、やはり、学問といふ様な事が時折は直接の問題になる事もあるんだ。」

B、C 「……………」

A 「僕は造林の演習に行つて日記を附けた。然し三行宛位しか書いてないのだが、考へて見るとあそこで考へる事を皆書いたら面白いと思ふ。結局あそこで実習そのものとしてやった事は自分達の思惟の辿つた一部分しか示さないのだし。」

C 「それは良いな。僕も技術的な事柄をやつて居ても其の事だけ考へられないし、又一つの事をやる時にはその事ばかり一生懸命考へれば良いと説明されるが、やはり全体的な繋りとして考へて行かないと別らないのだよ。」

B 「何しろ一つの事に心を集中するといつてもそれだけで無際限の奥行を持つて居て、そればかりやつて居ると次の事に時間が不足して来るんだ。」

C 「さうだ。僕は唯時間の上からばかりでなく考へそのものが、全体を直観的に見通した上で一つ一つの事は適当な地位を持ち得ると思ふ。結局学問といつても直観の分析にすぎず、部分的

には幾ら精密な学問をやっても全体から見ても間違って居る場合はもう駄目だし、又部分的には猛烈に精密な所はあっても、まづい点が可成り入って居れば、その研究はさうした価値を持たなくなるからね。」

C 「帰ってから何して居る。」

A 「大概八時頃からそろそろねむくなる。」

B 「本でも読み度いとは思ふんだが。」

C 「さっき志を持たぬと云ったが、よく毎日自分に愛想が付きなね。」

A 「あきらめて居るんだよ。」

B 「志を持ちたいなあ。信念が持ちたいなあ。」

一応之位で会話を打ち切らう。僕は之等の会話が真実なものを含んで居り自ら精神分裂を意識し又意識しないまでも得体の知れぬ不安に生きて居る現代青年の哀情を共に歎くものである。聖徳太子十七条憲法九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。其れ善悪成敗要ず信に在り。群臣共に信あるときは何事か成らざらん。群臣信無ければ萬の事悉に敗る。と仰せ給ふ「信」の欠落こそ一切の不安と動揺を生み出して居る現状なのである。此の信は文科、理科、又法、経、

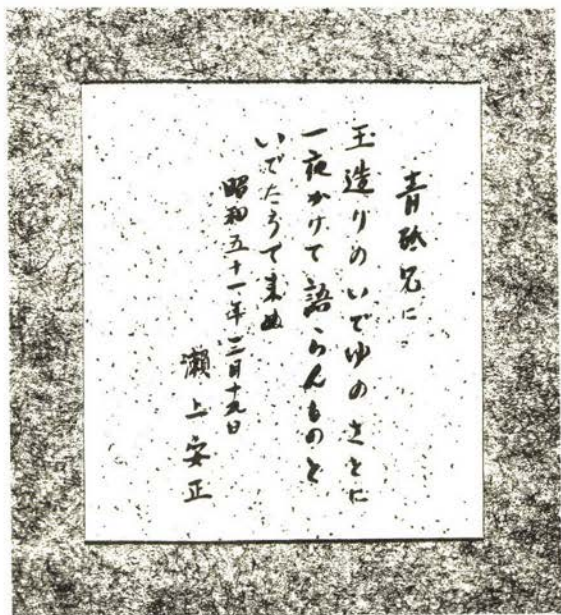
文、農、工、医、理等の外的差別を越え直接人と人とを繋ぐものである。然し現実には悲しい哉。

『学生生活』日本学生協会叢書一第一輯

日本学生協会発行 昭和十七年五月

書

簡



同信の友、青砥宏一氏に送った色紙

○
明けましてお目出度うございます。

母上様始め兄上様、姉上様、かずこちゃんも元気にて年をお越しになった事と拝察申し上げます。

私も至極元気で元旦には明治神宮に参拝致し、直ちに宮城に参拝致しました。今年には昨年比し、明治神宮参拝が幾分少なかった様に思ったのですが、省線電車、市内電車の終夜運転を休止した為かと存ぜられます。又、昼になったら皆押しかける事だらうと話し合った事でした。明治神宮の朝詣はそれこそ大変なもので母上様など想像もつかれないでせう。人の頭がずっと駅から神社の中まで一続きで、人の動きにつれて動いて行きます。

之程大勢の人達が各々の願ひを祈り、又全国の人々が祈願をこめて居る事こそ、神靈に交通してハワイ並びにマレイ沖海戦の如き大事に当っても天祐到るものと信知せしめられます。

今年こそ国運の決する時、又我等奮起して陛下の大御心に応へ奉る時と覚悟致して居ります。申し後れましたが学資無事受取りましたから御安心下さいませ。

一月二日

母上様

安正拝

(昭和十六年)

○

御送り下さいました学資無事受取りましたから御安心下さい。試験も無事終わりました。二日の日、寮の千野の内へ四名で参りました。甲州の盆地にあり同志で先々月なくなった野中君の墓参などして、かねて師とあふぐ三井甲之先生のお宅へも参りました。甲州はやはり高原の盆地とて、空気澄み豊かな秋色に周囲の山脈がかすかにけぶって居ります。日本武尊の御通りになったといふ此の土地に色々の事ども考へつゝ、今の日本の運命を考へて来ました。かくも美しき自然と微妙なる国運の前途が不思議な対照をなして居ます。

草々

瀬上義明様

(昭和十六年十一月)

○

其の後皆様元気との事、母上様より御手紙戴き何よりと存じます。さて、新聞等で既に御承知の事と拝察致しますが、此度私も満二十四になり徴兵検査を受ける事になりました。先日母上様に申し上げて置きましたのは十二月検査を受け二月入営となって居りましたが、昨日学校に於ける発表で今二年の者は卒業を待って入営致す事になりましたから其の点御知らせ致します。来年九月卒業後直ちに七月に受検する者と一緒に入営する事となりませう。今度の徴兵は幹部不足を補ふ為なりと聞いて居ります故、体格など可なりルーズな検査ではないかと存じます。私も御覽の通りのヤセッポチですが、第二乙位にでもなつて入営致す事になるだらうと存じます。身体検査受けぬ事には何ともいへませんが。

残念なことは今年卒業する寮生で十三名も居るのですが、皆行つてしまふと全く後の事心配です。次々に来年も行くのですし、やっと発展しかけた私共の運動も苦しい立場になる事と存じます。尚、去年卒業して寮に来て居る二人を加へて十五名にも上り、今日一人教育召集を受けに帰つて行きました。恐らく本召集が来て直ぐ行くだらうと云つてゐます。

始めの間は、唯今の様な学生の動員を予想して居た様ですが、米国との妥協交渉の最中もう戦

争はないと楽観でもしたか、一時さた止みとなつてゐたのですが、再び交渉失敗と共に大きく学校卒業者の動員が考へられて参りました。全く国際情勢の変化毎に日本の国策もガラガラ変るといふ様では世界新秩序はおろか東亜新秩序の指導さへ覚束なく存じます。

「原理日本」送つて来て居る事と存じますが、年三円六十銭ですから、いつか御はらひ込みになつて下さい。養田先生は熊本の八代出身の先生で日本に於ける唯一の硯学の先生であると存じます。肥後教育の伝統が失はれて来た事を嘆じて居られました。元田永孚先生、井上毅（梧陰）先生等の大学者の眞価を今の教育界に滲透せしめねばならぬと存じます。先づは御知らせ旁感想を述べます。尚今夏季学期の試験中です。

十月三十日

安正拝

兄上様

（昭和十六年）

○
拝啓 米英に対する宣戦の大詔を拝し奉り今更の如く皇国の有難さを実感致します。色々紛肴

に紛肴を重ねた今までの議論に今こそ昭々乎として大御心を戴くを得た事こそ喜ばしき限りです。戦争が始まって母上様などさぞかし御驚きの事と存じます。東京の方も全く英米に対する決意に燃えて居ります。が、宣戦後一週間にして平常の心に返って来た様です。二、三日の間は日の暮れるや直ちに町中真暗になったのですが、一昨日あたりより余程緩和して落着いて居ります。

全く日本始まって以来の大戦であると存じます。今、宣戦の詔を拝し奉った感激のまにまに億のみ民が一塊石となる事より外に日本を統一する事は出来ないでせう。天皇陛下の御心のまにまに生きるこそそ我等の学問の根本と拝されます。

去る七日に徴兵検査を受けましたが第二乙合格です。現役（甲第一）ではないですが必ず召集が参ります。卒業してからの事ですがかくかく事態が急迫して参りましたからは、いつ応召が来ないとも限りません。今までも出征した積りで思想改革に従って参りましたが、更にいつ戦場に行くかはわかりませんがそれまで捨身の覚悟で御国の為に活躍致したいと存じて居ります。

近日中、千葉の演習林へ測樹学の実習へ参ります。それから来る十七日には、吾々同志が主催致しまして出征学生留魂大会を開く事になって居ります。尚、来年一月の六日よりやはり千葉にて計理（森林計理）の実習がありますので、殆んど今度の休みは暇がありません。休みにはゆっ

くり内に帰って皆様の元気なお顔も拝見したいのですが、やむを得ず帰りませんから悪しからず
お許し下さい。

一昨日、快晴の日、富士が峯を仰いで作ったものです。

群峯は地底にひそみ富士ヶ峯ねの中空高く輝きてゐぬ

たれこめし雲晴れ渡り富士ヶ峯は山脈なみ越えて白く輝く

すめかみのみことのりぶみ戴きてむらくも消えし心地こそすれ

仰ぎ見る富士の高峯に大君の神ながらなる御代を謳はむ

萬代に動かぬ富士の高峯こそ聖の御代のしるしとぞ思ふ

過ぎし方大君の御稜威あななどりし醜みにくの夷あひすを打てしやまむ

大君の大み心を戴ける我が兵つはものに敵する者なし

十四日

安正拝

母上様

(昭和十六年十二月)

○
御無沙汰致しました。御送り下されし学資有難く戴きました。寮費と実習の時借りて居た金返しました。

二、三日前全くひどい雪が降りましたが、春のあは雪でとけてしまひました。一夜かけて作った我等の雪だるまも十日もつかしら。頭だけは昨日落ちてなくなりました。熊本に居てはこんな大雪は決して見られないでせう。八寸ばかりもつんだのですから。

寮では先輩が今年十二人も卒業して入宮致しました。此の混沌と乱れた思想界に十二人の同志を失った事、誠に残念なことです。我々も後半年もたてば卒業してしまひます。然し国家の精神的危機は如何にして打開されるだらうと考へますと、ほんとうに出征まで身を粉にして闘はねばならぬと存じます。今日は新入寮生の読合せでしたが、前回から松陰先生の書簡集を読合せして居ります。先生の家を憶念し、又国を思はるゝ切実の誠に身の足らざるを感じます。誠に、親鸞が、「浄土真宗に帰すれども、真実の心ありがたし」と申して居りますが、臣道を実践するのだといひつゝ、臣道実践の難きをつくづくと感じます。先日、松陰先生の詩歌集を二冊買って来ましたか

ら一冊御送りします。送るといってまだ送ってありませんでしたが、此の手紙がつく時分には着く事です。

兄上は又俳句を始められましたね。やはり自分の体験を整理し、言葉を正し、客観的に自分の精神を表現するのは歌に限ると思ひます。現代は詩の欠落した時代であると痛感します。

今上天皇御製

連峯雲

峯つゞきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとたゞいのるなり

峯つゞきおほふと詠み出でさせ給ひし御心を拝し奉る時、禍根累積して茲に至りしを深く深く思はしめられます。禍根が如何に深長に我が国の人心に喰込んだかを思ふ時、ひたすら捨身の求道を今我等自らはざる限り、之を払拭出来ぬと存じます。そして、その人心の乱るゝは、言葉の乱れより始まるといふ事を神皇正統記に述べてありましたが、全く正しき言葉にこそ正しき精神がこもるのであり、言葉の幸はふ国といひつたへしを不思議に存じます。私も今まで歌を作る事を心をこめて居なかつた事を思ひ、常に歌よむ事を思ひ立って、折があれば歌を作って居ます。禍根からこんな横道に入って来ましたが、はやくはらへとたゞいのるなり、とはやくはらへと宣

らせ給ふ御心をいたゞき奉れば、一日も米英を撃滅し又それに内応するデモクラシー世界観を追ひ払はねばならぬとこそ存じます。デモクラシー世界観といへども言葉の乱れよりくるものであり、それは我等国民一人一人を左右するものであり、又言葉は一人一人のものにあらざる事を思ふ時、実に至難の道と存じます。もうそろそろ春も近づいて参りました。氣候の変り目、御身大切になさいませ。

二月七日

安正拝

兄上様

(昭和十七年)

○ シンガポールの陥落の御祝ひ申し上げます。一日千秋の思ひに待った此の喜びは何にたとへられませう。

提燈行列は禁止されましたが、二重橋の電燈全ておとし下されし陛下の御心に限りなき喜びを得しめられ、救ひを与へられし思ひです。陥落の日には又東京は大雪でした。天も又此の日を美はしく飾って呉れるのです。

ますらをのかばねさらし、甲斐ありておごれる仇の城は陥ちたり

二月二十一日

瀬上ウタ様

(昭和十七年)

○ 愈々春となり皆様お変わりもない事と存じます。先日、学資戴いたきりで御返事申し上げますの忘れて申し訳もございません。此方も試験が始まりました。十一日から二十四日までです。その前

に入学試験でしたが新しい同志が二十名近く入ります。四名程落ちたのは残念でした。後半学生生活を今の世に最も充実せるものとして送り度いと存じて居ます。

(以下略)

安正拜

瀬上義明様

(昭和十七年三月十日)

○

本日表示の所に引越しました。明日より勉強に専心致します。然しあくまで正々堂々とやって行きます。梅雨も降ったり止んだりです。空梅雨かとも思ったのですが、今日あたり猛烈な降り様です。本郷は下水が完備して居るせいか蚊も居りません。が軒なみ家が並んで居るのはやり切れません。(略)

正大寮を出る時

住みなれし家をさかりて唯一人出でて行く身はさむしかりけり
明日よりはいかに暮さんと思ふにも友等住む家さかりかねつる

瀬上義明様

瀬上安正拝

（昭和十七年六月二十七日）

○
折かへし御返事致します。唯今本郷にて勉強に専心致して居ります事先述の通りです。松陰先生等の親を思ひ兄を思ひなさる心をしみじみと味はひ居ります。又友等の心に支へられつゝ勉強致して居ります。母上様、兄上様ほんとお騒がせ致した事お許し下さい。必ずや御安心下さる様お願ひ致します。又御上京なさるとの事です（略）其れには及びません。母上様の神に祈りなさる心が伝って限りなく力が溢れて参ります。取急ぎ御返事まで。

六月二十九日

安正愚拝

瀬上義明様

（昭和十七年）

○
御激励の御手紙拝見致し勇氣百倍致し、更に常に常にかくも御心を悩ます事を思ひ有難くて涙が出て参りました。何やかや取まぎれ、昨日も学校で一日暮しました。今起きた所です。御製を拝誦し奉ってもほんたうに大御心を戴く事の出来ぬ愚かな身です。(略)

明治天皇御製

夏草

事繁き世にも似たるか夏草は払ふあとよりおひ茂りつゝ

夏山水

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

七月六日

安正愚拝

瀬上ウタ様

(昭和十七年)

○
先日は敵機の来襲を受け未だ曾って外夷の侵入を許さなかった神州に、然も帝都にまで侵入し

て来たこと、我等の時代になってかくの如き事、護国神靈に申し訳もありません。又、真珠湾に散った九柱の神靈に対しても誠に面目ない次第です。

丁度、学校の研究室（三階）で随分大きな飛行機など話し、今のはマークが違って居た様だといふので窓にかけよって頭の上を過ぎゆく飛行機を見たら、その時高射砲が打ち出し、続いて飛行機の後を追ふ高射砲の破裂、敵機は爆弾を落し、旋回までして逃げて行きます。爆弾を落した時やっと空襲警報がなり出した次第です。五分もしたら爆弾の後から煙が立ち上り、相当の火災を起した様です。我々は直ちに警備につき、不礼なる敵機について話したりして、三方に立ち上る煙と味方の飛行機の爆音と遠くで高射砲を打つ音を聞き乍ら三時間ばかり過しました。殆んど始めの中は無我夢中で全くどうしたら良いかわからぬ位でしたが、次第に皆落着いた様です。全く真昼の事にて、土曜日の昼食時をねらふとは敵もよく期を得たものと思ひます。

宮城におかせられては、何もございません。でも、大御心を痛め奉ると思へば申し訳もございません。

市民は至って落着き皆平気です。敵の不礼に対して唯々憤慨して居ります。

空襲警報解除が行はれる時分には、三方に立ち上がって居た火災の煙も全く影をひそめ被害も

大した事はありませんでした。其の夜二時頃、空襲警報が発せられましたが無事、翌日は海岸にて防止撃退したと発表されて居ます。

もう大きな筈も出た事でせう。ほんたうに内に帰って故郷の春を過したい気持ちで一杯です。もう母上も高瀬の方においでになったかと思つて居ました。いつも御無沙汰して申し訳もありません。今年卒業する者の徴兵検査が行はれて居ます。間もなく皆すむ事でせう。

皆様のお元氣な姿に接し度くてたまりません。写真もすぐ出来たらお送り致します。

四月二十三日

安正

母上様

(昭和十七年)

○
御送り下されし「科学論文の書き方」落手致しました。心細かい配慮有難うございます。卒業論文にも応用致しませう。僕の方は自然科学的論文でなく、人文科学に近い方面の研究ですが色んな点で参考になります。

其後遅々としては居ますが、一歩々々目的実現の道を辿って居りますから御安心下さい。

先づは右御礼まで

草々

安正愚拝

瀬上義明様

(昭和十七年七月九日)

○
皆々様もお変わりもございませんでせう。私も無事勉強を続けて居ります。独伊の夏季攻勢の勢を以て着々歩を進めて居ります。今年こそ夏休みも皆様と一緒に送れるかと思つて居りましたが、丁度七月一杯まで授業があり、八月一日に入って大旅行があり、それが十五日頃終ります。木曾、

高野山、大阪をへて四国を一巡しますので其の後十五日間試験勉強に大童です。

実習のレポートは着々済して行つて帰つてからの仕事にならぬ様に致さねばなりません。殆んど大部分の有名な林業地を廻りますので、今まで見た事もない美林や貯木場等を見る事になるでせう。

大東亜戦争で木材不足から統制会社等出来ました。満州でやって居る一国一企業一会社の競争なき会社機構は結局失敗に終わったのですが、その轍を又内地にてもふみさうです。

僕は、此の会社の機構等について近頃色々考へさせられますが、業者の凡る苦闘、それは家計と同様、又一つの企業も決して無駄なき節約が行はれ、その維持発展の為に払はれるのですが、その互に競ふ心を否定して、それが今までの経済は唯、利潤追求であり、之からは全然利潤をはなれたものだといふ経済の立論があまりに強い潮流をなして居る事は、決して良い事ではないと思ひます。

それは、青少年学徒ニ賜リタル勅語の中にも明かに御示しになり、兄上様より僕に対して御注意下さった所の、「其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各々其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ」とありますが、「中ヲ失ハズ」「正ヲ謬ラ」ざる事の深き大御心を拝し

奉るのです。然もそれは、「古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ」て始めてよくなす所とこそ拝し奉ります。「国本ニ培ヒ国力ヲ養ヒ以テ国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ」と宜らせ給ふ大御心は、「其ノ本分ヲ恪守」する事の如何に難きかを更に深く顧みしめらるゝのであります。

文を修むる事の難き、又更に感深きものがあります。

昭憲皇太后御歌

寄道述懐

人なみにふむとはすれど敷島の道の広さにまどひぬるかな

道

かへりみて心にとほゞ見ゆべきをたゞしき道に何まよふらむ

と御述懐なされて居りますのに特に深く心を打たれた次第です。色々長くなりましたが、近頃の事どもお知らせ旁、感想等を述べました。

七月十五日

兄上様

安正拜

(昭和十七年)

めっきり涼しくなりましたが母上様如何御暮しでございますか。二十十日、二十日も無事に済んで御安心の事と存じます。もう蚕も大きくなった事でせう。柿もそろそろ食はれる頃ともなつた事でせう。こちらも全く秋となつて、井の頭の森には落葉も落ち始めて居ます。日が暮れると急に寒くなります。この一週間は毎日いやな雨続きでしたが、今日は全く晴れて全く秋らしい雲の動きが見えます。

今、日本の状態が支那事変解決に当り非常に苦しい立場にあること色々聞いて居ます。所が大
学も今その使命を十全に果さなかつた事、世間周知の事実が問題となり、学生の動員といふ事を
実行する様です。動員といつても徴兵延期をやらぬ事と、今年は大学、高校、専門学校皆十二月
卒業、特に大学生は卒業後直ちに徴兵検査らしいとの噂専らです。来年は八月卒業とからしいで
すがはつきりした事はわかりません。また何れ明らかになる事とは存じますが。
何分気候の変り目とて十分御気をつけ下さい。

九月二十日

安正拜

母上様

(昭和十七年)

○
拜啓 唯今召集令を受け取りまして、お召にあずかり、之より軍人の本分を守らんと愈々決意を新たに致しました。早速軍人勅諭を拝誦致しました。

一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし

一、軍人は礼儀を正しくすべし

一、軍人は武勇を尚ぶべし

一、軍人は信義を重んずべし

一、軍人は質素を旨とすべし

と示させ給ひ、「右の五ヶ条は軍人たらんもの暫も忽にすべからず。さて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ。抑此五ヶ条は我軍人の精神にして一の誠心は又五ヶ条の精神なり。心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき。心だに誠あれば何事も成るものぞかし。況してや此の五ヶ条は天地の公道人倫の常経なり、行ひ易く守り易し。」

と言葉を尽して軍人の道を諭させ給ふ大御心を戴きまつり、唯々たがはざらんことを念じ、足らはぬ身を願ず、忠節を尽す覚悟でございます。二十六年の長き間、母上様に御心配かけ通し、

又兄上様にも唯ならぬ御心配のみおかけし、又大学を卒業するにも御心労のみおかけ致しました。今軍人に召されて、此の足らぬ身、唯々誠もて軍人の本分を尽すべく存じます。

さて、試験も終へましたので、唯今論文を書いて居りますが、先生にもお話し致し、先生と相談申し上げます。話は別ですが、一昨日の夜、応召来た事を知りました。昨日電報を受け取り、ひたすら召集令の参るのを待って居りました。

論文を二十五日頃終り、二十六日帰郷の準備等致し、二十七日頃こちらを立つつもりです。そちらに着くのは二十八日夜頃となります。さしせまって居ますので或は帰る日は少しは遅くなるかも知れませんが、その時はすぐお知らせ致します。論文等一切こちらは済まして行く積りで居ます。着々進んで居りますから此の方は御安心下さい。論文を出して置きますれば必ず先生の方で良きに取計らって下さる事と存じます。来月二十五日頃の日付で卒業出来る様に取計らって戴きます。荷物は高瀬の方に早速送る様に致します。

早く帰ってゆっくりお目にかゝり度く存じますが、暇もなく、唯熊本ですから折々お目にかゝれる事と存じます。

取り敢へず右の通り、又拝眉の上

九月二十三日

安正拜

母上様

（昭和十七年）

○

考へれば、早そちらを發つて二十日になります。未だ何の吉報もさし上げられず誠に申し訳もございません。早く喜んで貰はうと思つて、先づ卒業証書を御送りしたいと思つて居たのですが、本日、卒業証書をいただけるといふ事が明らかになりました。喜んで下さい。十月三十一日付です。未だ森林法律の届が出て居ないといふので、毎日交渉して居たのですがその沙汰もなく、がっかりして居たのです。でももう二、三日したら証書をいたゞけるとの事、そしたらすぐお送りします。やつと之で一つだけ安心して貰へるかと思ふと私もほっとします。之ばかり待つて居ました。

職の方は未だきまりません。学校の方も又之から骨を折つて下さるでせう。今までは卒業してからと申して仲々受けつけぬのでどうにも仕方がありませんでした。今まで毎日、学校で勉強し

て居りました。然し、卒業証書を貰ったら専心職捜しをやります。勿論学校にも頼んではありませんが自分で捜します。之より以外には道はありません。

赤ちゃんが生れたとの事、お目出度うございます。姉上様も元氣との事安心致しました。之から愈々瀬上家も立派に名を立て、行くべき時に生れた赤ちゃんが元氣に育つ様に祈って居ります。ほんたうに私も之から少しづつでも家の為にくる日に来たのを喜んで居ます。

先づは取敢ず、卒業証書戴き次第御送りします。仏壇にすぐそなへて下さい。又応召の時の御礼も職がきまってからにし度いと思つて居りました。職が決まったら兄上様に又その事は御願ひします。こちらでプリントにでもしたのを送ります。

近日中に職もある事と思ひますから御待ち下さい。先づは取敢ず御知らせまで。

十一月十日

安正拜

兄上様

(昭和十七年)

○
其後急に寒くなりましたが、皆様相変わらずお元気の事と拝察致します。でも始めて冬の寒風に当る赤ちゃんは如何でせうか。私はまだ東京の気候になれないせいか三日ばかり風邪でやすみましました。東京は四時半になるともう日が暮れて途端に寒くなります。

さて、私は無事卒業は致しましたが、未だに卒業証書を送って参りません。明後日でも行って貰って来たいと思つて居ります。

又、就職の方も大体決定しさうです。履歴書と先生の紹介を持って来いといふので出しに参りました所、二十四日に正式に会ふ事にするとの事で、一応入社試験といふ形であらうと思ひます。

三菱のタワオ産業株式会社です。英領北ボルネオです。母上様、兄上様等の御期待に副ふ事の出来なかつた事申し訳もございません。然しどうしても今南方に行つて、直接向ふの物資をどんどん日本へ持つて来るやうにせねばならぬ事、日本にとって最急務なりと存じ、矢も楯もたまらず、又ほんたうに南方に着実に日本が根をはるためにはどうしてもどしどし人が行かねばならぬと思ひます。従つてどうしても行きたく思つて右の所選んだ次第です。途中潜水艦等の危険はあるかも知れませんが、皇軍の戦果を確保するためだと思へば、決してまさかのことがあつても無

駄死ではないと思ひます。又、向ふへ着けば軍政下、大体治安も確立して居る様ですから安心です。うんと御奉公して参り度いと思ひます。我儘何卒御許し下さいませ。

戦時なれば遠い様にも感じますが、下関より船で四日もかゝりません。四日位ですから決して遠いとはいへません。満州から日本に帰って来るよりも却って早いでせう。若しも決ったら早急に行く様になると思ひます。恐らく今年中に参る事と存じます。行く様になったら早速帰って卒業の報告もかねて、お宮、お墓など参り、又皆様にも御会ひして行きたいと思ひます。

北ボルネオに行く事、何卒御許し下さいませ。

十一月二十一日

安正拜

母上様

○
(昭和十七年)

御手紙有難く拝読致しました。

ほんたうに父上様亡くなられて二十五年、母上様の苦心一方ならざるを思ひます。特に此頃お母さんの事を考へます。ほんたうに一日も早く安心なさいませ様に祈って居ります。

今度こそ、ほんたうに此の御恩に報ひる様に致しませう。兄上様と私と元氣に世に働きますればほんたうに母上のお喜び如何でせう。此の二十五年の長い間は、又私共瀬上家にとつて、じつと春の来るのを待つて、地の中に芽をかくして居た時代ともいへます。愈々兄上様も子供も多くなり、又学校に於ても、更に重い責任を持たれる事となつて参ります。又、私も之から一日も早く一人前になる様に努力致します。これから色々な事が起るでせう。然し、母上がじつと忍ばれて貫ねておいでになつた真心を思へば、必ずどんな事でも乗切つて行ける事と思ひます。

(中略)

卒業証書お送りすると申しましたが、これはさうで、どうして送らうかと思案して居ります。適当な箱でもあつたら直ぐお送りします。

就職の方、未だ確定しません。もうすぐ決るでせう。先日の風邪がまだ完全になほらず、診断の医師が判断つきかねて居りますので早く風邪をよくします。

南方に行く手続、相当複雑です。特に、軍に関係ある身ですから、軍の許可がある様な話してしたから、手続の事、役場の兵事係に頼んでおきました。兄上様からも高瀬の役場で一応お調べ願へませんでせうか。大体東京ではこんなになつて居ります。

「会社の証明書を持参、本人出頭の上、聯隊区司令官の許可をとる。其の上で役場を経て、外国寄留届を聯隊の方に出す。」

之よって行ける様になるとの事です。又、会社に入り次第御報らせ致します。大体大丈夫です。熊本先哲の歌、声をあげて読みました。ほんとにいゝ歌です。皆に読んでやります。

又お金有り難うございました。皆様に宜しく申し上げて下さいませ。

十一月二十九日

安正

兄上様

○

今日、戸籍の方受取りました。之で渡航手続が出来ます。

色々会社の方の準備も着々進んで居ます。一昨日、測量機械や製図器等仕入れました。セレベスでケンダリーを中心として調査を進めるのが僕らの任務です。ケンダリー附近にセレベス一の川が流れて居ますが、長さ六十里もある大きな川の流域と取組むのですから仲々容易な事ではありません。

(中略)

恐らく今月の末位に行く事になります。じっくり研究もして参ります。今マレー語を少し宛勉強して居りますが案外簡単の様です。でも一つ一つ暗記するので仲々大変です。学術的なことは皆和蘭語ですから「和蘭語四週間」といふ本を一冊手に入れました。蘭日の辞書がなくて弱ります。ドイツ語に似て居るといふ事です。案外楽だと云って居ます。

向ふにボニ湾といふのがありますが、その沿岸にブキス族といふのが居ますが、本によると所々の海岸に移住して発展的な者らしいです。蘭印は皆マレー語を使ふインドネシヤ族ですが、その中でもブキス族といふのは特に優秀らしいです。之等の族の奮起をまっけてほんたうに日本に心から従ふ立派な人々にしたいと思つて居ます。でも恐らく将来遠い事でせう。

旅費の事など心配ありません。刀の短いのが欲しいですが、之も至急送つて貰へないでせうか。班長の大塚さんも持つて行かれます。やはり銃は軍から貸してもらふが、刀を持つて行った方が良いだらうと申されて居ます。こんな事を云ふといさゝか心配なさるかも知れませんが、決して想像した程野蛮な所ではありません。それはずっと向ふに居た人達の保証付ですから御安心下さい。

赤ちゃんのおできはどうなったでせうか。和子ちゃんの頬ばれはもう良くなってしまった事でせう。「保険金」のこと「刀」のこと至急御願ひ致します。

母上、姉上様に宜しくお伝へ下さい。

一月十六日

安正拝

兄上様

(昭和十八年)

○

いざ行かん八重の潮路をのりこえていまだ相見ぬ国の果まで

母君も又帰りこむその日まで安く過しませ老いし母上

千鳥鳴き後おふ見れば我を送りし人の心の偲ばるゝかな

戦のいつ果てつらんと思ふにも海の永路の思ひやらるゝ

千萬の仇に向ふも天照らず神の御稜威のまにま進まん

随分荷物も沢山になりましたが元気です。お送り下されし浴衣無事受取りました。私の荷物、

古宮敬一君に送って貰ふことにしてあります。

二月一日

瀬上ウタ様

瀬上安正

(昭和十八年)

年
賀
状



熊本城

謹しみて新年のお慶びを申し上げます

戦後十三年を経て、混乱は最高潮に達したかの如く思はれます。政治は保守、革新のスローガンの下に激しい対立抗争に明け暮れ、国民は置きざりにされた観さへいたします。

かくては、国民の憂は解決さるべくもなく、更に日教組の旗の下に学校教育にたづさはる先生方は、労働運動と称しながら、破壊的政治運動の中心を形成し、教科内容と併せ考ふれば、教育の中正等期すべくもなく、今後の教育について思へば慄然と致します。

本年は諸先輩師友の御努力により、輝かしい日本の将来の一端なりとも拓き得るなら幸と存じます。

昭和三十四年元旦

謹賀新年

西歐的精神の矛盾概念は、我々東洋人に理解出来ない迄逼迫した緊張関係をもって、考へられてをるとすれば、米、ソの思想的対立、或は人間自然の感情的対立、或は又平和論の最高潮に伴つて戦争の最大の危機をはらんで居る時でもありません。

キリスト教の「最後の審判」、ドイツ神話の「神々の没落」の如きを思ひ合せると、一九六〇年こそは、人類の悲劇をはらみつゝ明けて参つたといへませう。尨大な宇宙兵器を伴ふ「第三次大戦」の戦争物資の蓄積は、人間の理性によつて之を止め得るものでありませうか。人類の多幸を祈念しつゝ。

昭和三十五年元日

謹賀新年

過ぐる一年の日本の混乱は、史上未曾有のことでした。単に世界情勢をさながら写し出す鏡に

過ぎぬ日本ではなかつたでせうか。今年も更に此の混乱に拍車をかけて良いものでせうか。

世界の情勢を誤りなく之を把え、消化し、対処する。之を日本主義といふならば、今日日本主義は何処にありや。

祖国日本への復帰をのぞむ沖縄其の他の人々が希求してゐる日本とは此の様な混乱の日本ではないはずです。世界に荒るゝ独立の嵐、之は日本が敗戦の結果捲き起したともいへませうが、新興独立国家群の憧るゝ日本とは此の様なつまらぬ日本ではないと思ひます。日本人自身が復帰すべき日本を失つた今日こそ、高らかに日本主義の旗が掲げられるべき時であると思ひます。

昭和三十六年元旦

賀 春

あらたまの 年はめぐりて よろこびを

分ち合ふ日の 楽しきものよ

もろひとと　ともに祈らむ　とこわかの

み国のいのち　よみがへる日を

昭和三十七年元旦

謹　賀　新　年

昨年は米ソの緊張は戦争直前の状態にまで高まって、幸にも又漸く平常の状態を回復致しました。このやうに強い緊張に堪へられるといふことは両国共に夫々の国民の利害を越えた団結の力によるものと考へます。省みるに、敗戦後の日本は個人の利害打算が、全ての行動の基準になつてしまつたとしか考へられません。個人の生活においても、国家的事業においても決して安易な時のみではなく、そのやうな困難を乗切するためには、夫々の個人が、又国民がその苦難を乗切る文の強靱さが必要であると考へます。国民的団結もなく、個人的強靱さもなく暗澹たる祖国の将来を憂へつゝ年頭の感懐を述べた次第です。

孝明天皇御製（元治元年）

さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふも国を思ひつ民おもふため

昭和三十八年元旦

謹 賀 新 年

朝 日

朝日かげかがやきいでておのづからはれゆくきりの流れてやまず
朝ぎりのおのづとはれてさやかなるみ国のゆくて神に祈らむ
みだれゆくみ国のさまを正さんと立てし誓の又新たなり

昭和四十年元旦

謹 賀 新 年

昨年は国を挙げて混乱の渦中となり齊しく憂を共にしたことでした。此の様な混乱が長く続く

かぎり、日本は自滅の一途を辿ることともなりませう。一日も早く此の様な混乱から脱却し正常
明朗な日本の正道の展げんことを年頭に当り祈念致します。

何卒今年も宜しく御指導御鞭撻の程お願ひします。

昭和四十一年元旦

謹 賀 新 年

万川長流に流れゆく草木を親鸞は「まへはうしろをかへりみず、うしろはまへをかへりみず」と申して居りますが、今の世も又かく觀ぜられてなりません。

人の心は不信に満ち、政治の上にも保守、革新共に信を繼ぐに足らず、又教育の上にも悉くの
大学に赤旗が翻へり、スト寸前の有様に思はれます。

然し、親鸞には、「先なるは後を導き、後なるは先をとぶらひ」といふ解脱感があります。省
みて我が身を思へば、到底先なるは後を導くなど出来ませんが、後なるは先をとぶらふ戦列に加
はらせて戴きたく存じます。

述 懐

罪業の深きを思へば天地の広きに我が身居るところなし

昭和四十二年元旦

謹 賀 新 年

来るべき昭和四十五年の安保騒動まで国内は大揺れに揺れることゝ思はれます。二回に亘る羽田事件や殆んどの大学にくすぶって居る大学のスト騒ぎも深く之につながるものと考へます。

大学生は古典の「大学」に示された志を喪い、マルクスに走るか、表面冷静を装ひつゝもニヒリズムに走る以外に道が無く、又国民もレジャーに小突き廻され、国際的にも指導的責任にある立場をも忘れて、喪志の傷ましい姿を見るのみです。我等は、一日一日の「行」として周囲に渦まく「彼等の巾広く、根深い運動」を見すかして、そのしゅん動を許さぬまでに国民全体の良識を早急に立て直す必要があると思ひます。特に風に揺ぐ芦であるマスコミは、「革命への道」を企図して居ないにしても煽情的風潮にあり、国民の良識がマスコミの煽情を抑制するまで高まっ

て来る必要があるやうに考へられます。

永遠の将来を確立する為に本年も元気で御活躍の程祈り上げます。

昭和四十三年元旦

新春述懐

国のためのち死なんと思ひしゆ三十年の年は過ぎにき

安らげく秋過ぎ行きて冬来り春甦る御世をこそ祈れ

新年お目出度う御座居ます

過ぐる年は、東大を初めとして大学問題に終始しました。然し教育者自身の反省の声も、その子達の親からの反省も逆に聞かれませんでした。

云ひ替へて見れば此の子等は終戦以後、教育不在の中に育ってきた子供達であり今尚放置された儘の姿です。大学問題は唯単に学園丈の問題でなく、「日本全体」に繋がった根本問題と思ひます。「日本全体」と云へば大げさなやうですが実は私達一人一人の毎日毎日の「生き方、考へ方」

に繋つてゐるといふ意味でもありません。

我々は職場でも、生活の中でも、安易に〔闘争〕なる言葉を使つてゐます。此の概念化した〔闘争〕の姿が、誰一人殴る者無き学園の中でも、ヘルメットを冠り、角材を持って行く姿である。幽霊など居ないと教へた民主教育に〔闘争〕なる幽霊が取りついて、白中夢に居る姿であります。此の幽霊からは何も生れないのみか〔闘争〕の幽霊は私共親達や教育者にも取りついて居ます。

マスプロ教育で、対話が無かつた。家庭に対話が無かつた。確かにさうです。子等が救はれると共に、教育者も親達も共に救はれる道は、今迄に放置した親と教育者の罪を償ふために、唯今直ちに対話を始めることではないでせうか。対話とは何か。自らの生命を傾け尽して語ることで。自らの心をも正すことです。

今日も荒廃した日本に無量の過去から無量の未来に常に新しい太陽が昇って参りますが〔真実〕の一日が、日本建設のため明け且つ暮れるやう祈念します。

昭和四十四年元旦

東大闘争のテレビを見て

戦ひに出で立ちし日のさながらに銀杏並木は立ちてあれども

ヘルメット角材持ちし若者の怒号群れ行く銀杏並木に

謹 賀 新 年

東大安田城攻防に始まった昭和四十四年は漸く終り、沖縄返還の見透しもどうやらついて、お互ひに慶びにたへません。

然し、騒然たる世間の姿に迷はされて学問を放棄した学生達は、革命の先駆たらんとして居ります。憂ひても憂ひてもどうにも仕方のない祖国の荒廃は、学界の思想混乱によるもので、明治以降の学風が、自らの内面を忘れて洋風心酔に終止したことに源を発するものと思はれます。江藤淳氏は、「象徴主義の小さな穴から西欧の底にあいてゐる広大な背理の世界をのぞいた。」と今にしてその非を発見してゐます。

老、松本唯一先生は、特殊潜航艇に乗って、シドニー港深く侵入、戦死した松尾中佐の老母堂

を伴ってオーストラリアに渡られました。オーストラリアの戦争記念館（日本では靖国神社）に飾られたボディベルト（千人針）を探した新聞記者と、之を返して貰ふために粉骨碎身した老教授と、そして安っぽい戦争否定のマスコミに毅然として屈しなかった老いた母の姿に、敵も味方をもつなく人間の真実が今も尚あることを明らかにしました。

女子高校生が旅行に行くために、汽車に乗り込んで来ました。東京に行くといふので、靖国神社に参拝するのかと聞きますと、否といふことでした。修学旅行で三人の僕の子供達も、唯バスで通り過ぎた丈でした。靖国神社は日本歴史の墓標です。歴史の原点です。之をストレンジャーとして「見物」する。

此処に抽象的觀念の遊技にふける学問腐敗の根源があるやうに思はれます。

この国のくさき一つも外つ国にあらざるものをまして生命は

昭和四十五年元旦

年 賀

中国の苗劍秋氏は国連が中共を承認したことは、世界の悲劇の始まりであると申しました。果して中共承認より旬日も経ず、印パ戦争が始まり、国連安保理事会は為すすべもなく、その無能ぶりを発揮しました。

盧溝橋事変の始まりについて、佐藤氏は次のやうに述べてゐる。劉少奇に指導された学生先鋒隊は、緊迫する雰囲気の中で対峙してゐる中国軍と日本軍の中間に潜入し、両軍に対し同時に発砲して、さっと身を引いた。両軍は「すは敵襲」と錯覚し、戦争の渦中に入ったと。

今度の印パ戦争も同じ戦術によって、戦争の渦中に入った気がする。世界中で、戦乱が続くのは、唯中共の周辺しかないのである。

思ひを国内に移す時、各政党も、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、教育、裁判と悉く、中共の影に動かされて居るやうに思はれてなりません。影でなく早くその本体を凝視して確かな考へに基づいて行動すべき時でありませう。

年頭に当り

正道を踏みてんものと思ふのみせむすべもなく月日はや行く

顛倒夢想を遠離すべしとのらしたる古へ人の真言しぞ思ふ

昭和四十七年元旦

謹賀新年

セイダカアワダチソウといふ雑草が、戦後アメリカから入って来て、都市周辺の空地は殆んどこの草で覆はれてゐます。この草もアメリカではこんな暴力を振はないが、日本といふ新天地では我物顔に蔓延してゐます。生物すら見事な統一社会を作つてゐますが、日本に生れ、日本に死する「人間の思想」は、歴史の風土の中で、もっと細やかに結びついてゐるはずです。

「よそ者」たるマルクス主義や、唯物主義（経済主義）も、大学を根城にして日本国中に蔓延してゐます。こんなものが、我々に納得される筈ありませんが、その「正体」は見極める必要があります。ありませう。

美しい自然の風土の中で、そして又永い「歴史の風土」の中で、儒教や仏教の深い哲学——「心」——についての思索が、日本に帰化してゐます。

この深い「心」の文明が、浅い「物質」の文明を帰化せしむることができるなら、我々日本人は安心して（ノイローゼにならないで）生きて行けると思ひます。

昨年七月から、林業研究指導所に移りましたので、宜敷く御指導下さい。

美しき山川生みしみ祖らのやまとの道を守り行かなん

昭和四十八年元旦

謹 賀 新 年

昨年は伊勢神宮の第六十回遷宮がめでたく終わりました。二十年に一回の遷宮ごとに、日本は政治的フェニックスとして甦へるのだと林房雄氏は申されます。

そして千数百年続いて来ました。

戦後の灰燼の中から、この二十年間で、世界最高の物質的繁栄にまで到達しましたが、心の世

界は荒涼たるものとなり果てました。来る二十年間で、この心の荒廢の灰燼の中に、豊かな心の世界が開ける日を祈るのみです。

新年に寄せて

日の光うららに受けて新しきいのちの芽生え祈らるるなり

昭和四十九年元旦

謹 賀 新 年

七百年に一度、地球を襲ふ大温暖、海浸、火山の大爆発、悪疫の蔓延、この間を縫って民族の大移動が起り、そして戦争、これに伴ふ新興宗教の発祥などについて井上赳夫氏は発表してゐます。

そのやうな時期が来るべき二十一世紀に当ります。

過去においては、世界と同じやうにその都度日本にも国難が襲つて来たが、建国をも含めて、我々の祖先達は、それ相応の内乱をも克服して、国の運命を打開して来ました。

そのやうな惨烈な歴史の前触れを、がっちり胸に受けとめて新しい一年間に向つて相携えて前進させよう。

来し方も生命の限り生きて来し大和の行方護らせ給へ

昭和五十年元旦

謹 賀 新 年

戦前、シオン議定書なるものが流布した。それには、秘密のユダヤ王国があつて、それに日本がそむく時は、多くの国がこれに戦争をしかけて、打ち倒す。又、共産主義といふ抽象理論を与へておけば小鳥のやうに口から口についばんで、日本は自滅すると記されてゐた。二つの日本国の運命に関する予言について考へると、最近の共産主義の蔓延は国を亡ぼします。この議定書が誰によつて書かれたものであれ、日本人一人一人の問題と別に日本国といふものをこのやうに把へ、このやうに希望し、意志する観念の存することを忘れまい。我々日本人が守る以外にこの日本の国を守る者は誰も居ないのです。

もろともに呼び交はしつゝ新しき御代の栄えをひらかんと思ふ

昭和五十一年元旦

謹 賀 新 年

今上天皇御在位五十年の祝典が厳肅に取り行はれたことは史上始めてのことで、国民斉しくお慶び申し上げた次第でありました。それに引続き行はれた総選挙では自民党の腐敗と共産党の野蛮性が国民の批判を浴びたのでせう。政治的悪気流の中にあつて、東山魁夷氏の「風景との対話」の中の「西と東」といふ文章に救はれる思ひがしました。「古い昔から外来の文化による刺激を緯糸とし、民族の本来の文化の性格というか、その愛着を経糸として、織り継がれて来たのが日本の美術史の姿ではないだろうか。」

経糸も緯糸も皆外来文化に替へようとする努力のみが此の百年間続けられたために、此のやうに愚劣な時代になったものと思はれます。今年からは経糸への愛着と緯糸の刺戟としての外来文化といふ価値判断を過つことなく正しい第一歩を踏み出す時と思ひます。

新年に寄せて

朝もやに皆つゝまれて新たなる朝日輝き今昇るなり

昭和五十二年元旦

謹賀新年

朝日に寄せて

大空はあかねにそみて大阿蘇の上に横たふむら雲のあり

一しほにあけ色ときはああたり日出づるらしく動くともなし

朱の色やゝに変わりて自づから明けゆく朝のすがしきろかも

朝もやも闇も自づと消えゆきて今日の一日もさはやかにこそ

狂気に満ちし年を送りて来む年は正気溢るゝ国となしてむ

昭和五十三年元旦

謹 賀 新 年

柱と頼む先生方友人が次々に亡くなられた一年が過ぎ去りさびしく悲しくなります。自然の世
界では一本のもみの木が倒れるとその上に無数の稚樹が芽生えてうつろになった空間を埋めて行
きます。われわれも一人一人たち上って日本の生命となりたいと思ひます。

亡き師友を偲びて

みだれゆく御代の姿をなげきつゝ身をはむ思ひに失せたまひしか

ただならぬ時は来りぬもろともに群りいでて御国守らん

昭和五十四年元旦

短

歌



故郷 南関町の熊野座神社

昭和十五年 — 二十三歳 —

御製を拝誦して

すなほにて雄々しき心を美はしき大和島根に満ち溢れしめむ

一日一夜降りし時雨は打晴れて心すがしく朝日照り込む

朝日さす森に友等の集りて御歌誦する心すがしき

秋たけて降りし時雨の残り香はかすみとなりて森にたちこむ

夜久大兄を送る

心強くたのみし君はたゝかひのさ中に召され出で征きますか
焼太刀の清き光をあらはしてなびかぬあだを打ちはらひ給へ

(「出征」)

小山兄の便りに

ねたきり雀と長き病の床に居て思ひをのぶる君の言葉はも
病める故に歩めぬ足をかこちつゝ鋭き筆もて批判したまへり
祖国無窮の生命信ぜずば闘ふとも自力の流転続けむとあり
乱れたる国内どよもす歌よまむとふ君の言葉の強き調べはも

(「しきしまのみち会」 — 正大寮)

佐賀にたゝかふ友等に

ますらをの悲しきねがひ貫かむと電報によする友の決意はも

三人のたけき友等を不逞呼ばはりし自らが非をおほはむとするか

生ける者の意志奪はむとする学者道義を言へり如何なる道義ぞ

乱れたる世に正道をふみ行けば心狂せりと人は思ふか

醜ばらのはからひ憎しみ国思ふ友等の誠に応へむとだにせず

友等のまことふみにじらむ醜ばらの不逞の意志にいかで屈せむや

醜ばらのはからひに耐ふるみ友等の心おもへば憤り抑へえず

迫害にも何ぞ屈せむ国内に耐へつゝたゝかふ友等おもへば

たゝなはる群山なせる醜ばらのやからふみこえふみこえ進まむ

目には見えね夜昼神は益良男の悲しきたゝかひまもりますらむ

先の日に闘ひたふれし藤原兄のみたまは現しく我等の上に

死する迄たゆまず闘ひし若き友の願ひは悲しみだるゝ世故に
現し世にさはりはあれどますらをの悲し雄心神に通はむ

(「日本太郎」)

靴 音

疲れ果てし身を横たへてさまざまの事ども語る若草の上に
うらうらと春日かぎろふ青空に真白き雲の渦巻く見ゆも
ゆるぶ心はうつゝともなく消ゆるかと思ふに友の言葉も聞えず
春の陽を満身に浴びて目つぶれば軍靴の音の大地につたふ
つはものゝ列は長きか遠くよりひゞく音もありそのどよめきよ
足音のみ耳にひゞきて物も言はず過ぐるつはものも春日浴ぶるか
地ひゞきは総身に伝ひたちまちに心どよめき起きむと思ふ
起き立てば見渡す限り若芽ふく春の園生をつはもの行く

春風にとくるが如くゆるびにし身もかるやけき心地するかも
真清水の湧き来る思ひ語りつゝ萌ゆるいてふの並木路を行く

(「御軍」)

比叡山合同合宿のポスターを見て

「比叡山合同合宿」とふポスターは色もさやかに輝きてあり
嶺高く夏の白雲光りつゝ比叡の山を思はするなり
琵琶のうみ真下に見るとふ宿坊に友らと集ふ日のみ待たるゝ
全国の学び舎に此のポスターは貼らるゝときけばなつかしきかな
合宿のしらせ待ち居る友どちの誇らかに眺むるさま目に浮ぶ

(「日本太郎」)

映画シナリオを作る

合宿の映画作るとシナリオを書きてしあれば希望あふるゝ
友どちの集ひこむ日を思ひつゝあれやこれやと思ひめぐらす
森陰に友らとつどひ永久の生命に連るを如何にぞあらはさむ
かつどよみかつ湧き上る川の瀬の思ひは映画に表はすすべなし
映画に心さながらあらはさむすべもあらく唯迷ふのみ

(「日本太郎」)

聖戦四年

生きとし生けるものの力を集めつゝすめらみことに仕へまつらむ
四年あまりの戦にしてつはものあまた失せつゝ国護りけり
今も尚戦ひつりのり百万の大軍忽ち大陸に行く

進まむと心定めて進みなばいかなる仇かさへぎることあらむ
時の動きに心失ひ任せなば世の行末は護り得ざらむ

今の世の苦しみつぶさに味は、ば和戦をすぶる決意出でこむ

(「日本太郎」)

東京大震災記念日

二十年の昔思へば神々の怒りのかしこき事をし思ふ

人の和の乱れそめしはその心驕りし故と胸に刻まむ

天地も動かすといふ言の葉に祈りこめつゝ神々を祭らむ

(「日本太郎」)

北白川宮殿下一周忌に靖国神社に参拝す

白雲の輝く秋の大空に神のみ社いつかしく立つ

しゆくしゆくねかと友等と進みみ社の大広前に今額ねかづけり

ここだくの御霊集めて祀りにし靖国の社に大宮偲ぶ

蒙疆の黄塵くるふ野の果に神去りまししゆひとせ一年をへぬ

ますらをは宮のみあとをしたひつゝふみも行かなむしきしまのみち

大宮のみあとしたひつ集ひにしみ民の行手護らせ給へ

明治天皇の大御歌誦しますらをの願ひを神にひたに告げ奉る

千々ちぢになく虫の声にも人の世を知り給ひにしみ心尊し

(「日本太郎」)

北白川宮殿下陸軍大学御在学中御講義ありし

「しきしまのみち」についてのみ文を拝読して

ますらをの道を示して今の世の乱れ嘆き給ひし御心かしこし

明治天皇のみことかしこみしきしまの道開き給ひし北白川の宮

ありとある人の心をしきしまのみちに統すべむとふ御言葉かしこし

(「日本太郎」)

甲斐行

千野兄の家にて

つかれし身一日休めむと四人して友の故郷に旅行く楽しさ

旅行けば見ることごとがめづらしく谷間の家をなつかしみ見る

見はるかす甲府の里は山めぐり夕日射照す静けきところ

師の君の居給ふ里もあのあたりと指さしつゝぞ秋の道行く

うるみたる星一つのみが日のくるゝ甲斐の山なみの上に見えつゝ

故郷に帰りてはずむ心根は友の言葉にあふれ出づるも

此処の山彼方の山とゆびさしつ友の物言ひ聞けどあかなくに

いとし子を待ち給ひにしみ親等のみ許に友等うち集ひつゝ

年老いし母君もまたいとけなき君の妹もよりに語らふ

秋たけて熟れしぶだうの酒くみてみ国のさまを語らふまどゐ

語り合ふ国内のさまを目のあたり思ひ浮べつなごむ今宵は

夜の風の冷え冷え吹ける高原の清き川原にわれら降り立ちぬ

秋月夜山の姿もかすみつゝ森の彼方にねむりたる見ゆ

そこゝに森かけなすは川柳と君の語るになつかしきかな

つきぬ思ひ森のをちこちにかきたてゝ君は語るよさまざまのこと

流れ来る早瀬の音のたえぬ月夜川ぞひ道を友等と歩む

野中孝夫兄のみ墓に詣でて

秋の日のてらす山辺にみまかりし君のみはかに友とまうづる

生き給ひし限りは悲苦に身を焦こがし若き生命の雄叫びせしを

なき人をいたも偲びて風もなき山辺の道を友と行くなり

道の辺の草さへ黄ばみ冬の日の風の寒きを思ひやるかな

ゆく手には秋の日てらし静かにも遠き山々霞こめつゝ

八ヶ岳富士が峯さへたゞに見ゆる甲府の里は生命こもれり

三井甲之先生の御許に行く

神代よりしづけきたゝふ此の里に長き年月師は住みますか
よみ給ひし歌のしらべはこの里のさまもうつしてなつかしきかな

色づきし桑の中道過ぎ行けば師の君の家のしのばるゝかな
待ち給ふらむ師の御心をしのびつゝ歌口ずさむ足も軽らに
久々に会ふことなれど常日頃相見しがごとなつかしきかな
静かなる山里に居て国内をなげきまもらひ戦ひますか

読みかけの書ひらかして異国の闘ひしのび語りますなり
今にしてマルキシズムを日の本ゆ追払はむと語り給ふよ
戦を約して帰るその道は日もはや暮れておぼろ月照る

今しがた門まで出でておくりたまひし師のみ心に答へ進まむ
「神代より定まれる道」と高らかに歌ひ進むに力湧きいづ

慰 靈 祭

○

大空ははろけく晴れてみ空なる風の動きの松が枝に見ゆ

そびえたつ松が枝繁きあはひより見ゆるみ空は限りもあらず

秋風の吹きのままにまにみおやらのみ霊よ来ませ神祭る日に

生き死にの境を越えてかへりみずみおやの心うけつぎゆかむ

たゝかひのもの中にありて文書きしみおやの心有難きかな

戦のいとまいとまにみおやらの残せし文を読みかへしつゝ

虚仮の世に書き残されし文のみは人の心に連りて生く

年々にまつるべき人の数そひて限りもあらぬ人の世を憶ふ

昭和十七年——二十五歳——

寮を出で本郷に行くにあたり

別れすむといへど一つに連りて闘ひ生きむ乱れにし世に
広き世に連り生きる友等しぬびたえぬ闘ひ続け行かなむ
別れなば我が大君の御心をさやにいたゞく外に道なし
展けゆく御代を待ちつゝますらをの友垣進め神のまにまに

（「しきしまのみち会」）

田所廣泰大兄のみ霊のみ前に捧ぐ

なつかしき師の君の文にあらずしてはたまひしといふみたよりなりき
なすこともなくてかへれば師の君は相果てたまひ今はあらなく
生きて会ふよろこびをのみ祈りしを師の君果てし今は悲しき

日の本の内なる力目覚めよと生命の限り闘ひし君

日の本の力つき果てやれしときますらたけをの生命たえにき

師の君はかくれたまひてつたなかる我等は如何に生きて行くべき
たのみたる師の君ゆけばせんすべもあらなくたゞに悲しみまどふ

又外つ国より帰るさ、君を思ひ友等を思ひしをうたひて

日の本に頼むは師の君と思ひしに帰りて見れば今はあらなく

たまゆらに消ゆるみ魂の八潮路をうつゝ伝ひて我を呼びしか
祖国を祈れと君のみ魂はつたなかる我をも呼びて示し給ひしか
真青なる大海原の底つ波ゆすりにゆりて絶ゆる間もなし
底ひ波青海原をゆするとも目路の彼方はたゞになぎたり
目路の彼方見えぬ祖国の岸うつも此の真青なる波にこそあれ
大海の底つうねりのたゆるなきみ国のさだめ胸に迫り来

又

船倉の小暗き中にエンジンの音もきかずて友と語りし
風もこぬ暑き小暗き船倉に祖国思ひつ君のみ名呼ぶ

吉成君へのかへし

常よりの君の文字故久方に君に会ふかと面影に見ゆ
久方の君のたよりに生きて会ふ喜びわかち母に文見す

過ぎし日を母と語らひ生きてある友等かぞへて昼をすぐしつ
久方の友のたよりにすぎし日の昨日の如く思ひやらるゝ

※吉成君は故人の五高時代の同級生

折にふれて

いひなくばいもを植ゆると老いし母日ねもす畑に立てる悲しさ
帰還せる我もすぐよかに早なりて母の手伝ひする日はいつか

又

植ゑ残りし畑にゆけば早植ゑのいものつるのび心ゆたけし
けふよりは母の手伝ひ畑打てば今年の秋のみのりまたるゝ
早乙女の数多つどひてすゞ風に髪なびかせついても植ゑて居り
早乙女の手にしなだるゝいもの葉の風にたゆたひ心ねたまし

夜久兄へかへし

切々の君のおもひの文故に澄みたる君のみ声ひゞき来

はらからの上思ふのみに生くる君の文よみ行けば心ふるひぬ

良き友等数多神去り拙き身我等はいかで道拓くべき

平和日本の大道たちて友等集ひ又も相見む時の待たるゝ

昭和二十三年——三十一歳——

筑後川のほとりにて

時の間に夕べの色の消えはてゝ清くすみたる空のいろかな
満々と湛へし水もいやはてはたぎつ瀬なるか響きつたふる
夕映えの消ゆるときしも古への人のこゝろのひたに思ほゆ
望月の光をうけてそよかせにきらめく若葉涙にも似て

とゞろとゞろとたえぬ荒波かぶりつゝ鳴くやかじかの声のさやけさ
いやちかに聴かむともへどかじかの声消えにしあととは波の音のみ
人にさへきかるゝ声をはゞかるか洩らせや洩らせたゞ我にのみ

(昭和二十三年六月「興風」第三卷第六号)

○

虫の音のすゞろ鳴きつゝ秋は来てみ祖のみ魂まつる時きぬ
み祖らの心思へば永らへてなすなき我等身ももだえ来る

一年は早過ぎ行きて此の年も間無く過ぐると思へば悲しき

(昭和二十三年十月「興風」第三卷第八号)

昭和二十四年——三十二歳——

友と会ひて

改札すとして動き出せる学生に混じりて語る古き友はも

久しくも相会はざりし其の友は変わりもせず若者と語り居り

学問のこぼしき道をたどり行く思ひを語る友の面わよ

世を思ひ学問の道拓き行く友の面わはたくまじきかな

黒々と群れて乗込む人波を探せど友の姿はや無し

あれを思ひ之を語りぬ短き間早もすぎたり友の出会ひは

昭和三十五年——四十三歳——

病院の窓辺に

夕日影さゝぬともしき灰色の空を眺めて窓に佇む
身も心も疲れはてつゝ病み倒れし我が身をひとりあはれみてをり
病みしときは病みたるごとくふるまひて心おきなく養へと宜ふ

昭和三十六年——四十四歳——

みともらのつどふこの日に天かける神のみたまも天もりますらむ
生ける友死せるみたまも日のもとの行くてを思ひ倚り集ふらむ

日南海岸を旅して

よする波かへるその波しくしくに南の国思ほゆるかも

椰子の實の流れ流れてこの国に流れ寄り来るくしび思はる

よる波のいやしくしくに南の国の思ひ出いま我が胸に

さんご礁の真白き波を思はせて巖かむ波さけてくたくる

いく千年流れつきせず黒潮の巖かみつゝいまも波うつ

たゆるなくこやみもあらず黒潮の流れつきせず巖かむなり

神のみ代流れ流れて来し人の望郷の思ひ我によするか

しくしくに恋し祖国にわがあれどたらちねの母いまはいませず

太平洋の荒きその波うちこえて行きしむかしのおもひせつなく

望郷の思ひにも似て椰子の木を植うる心の偲ばるゝなり

副島羊吉郎先生のお宅を訪ねて

佐賀の原ひばりしばなき春風の今もつめたき城原の里

真白なる砂の河原に美しき水は流れて止ることなし

さゞなみのゆるやかに見え小魚のかげの乱るゝ美しき水

(「国民同胞」六月十日号)

友の言葉に

とつとつと語りそめにし友のまみはとみに輝きわが心打つ

言の葉の一つ一つにすぎて来し苦しみのあとにしむごとくに

おのがじしおひしつとめを語り合ひて国のすがたを思ひやるかな

(「新しい学風を興すために―第一集―」)

すゞかぜは若草山を吹きのほり汗ばむ面の快きかな

名もしらぬ千草の息吹きさ緑なし広きその谷ほのにけぶりぬ

大阿蘇の森も畑もうすもやの奥にけぶりてはるかなるかな

うすもやの奥ゆつばめのとびきたり山かげにつと消え去りゆきぬ

うすもやにつばめ見えかつかくれつゝ飛びかふなべに入日さすなり

(同 右)

天草にて

ますみたる潮の中ゆあらはれし巖の面は光りて見ゆる

岬なす千枚岩のこの沖に海人あまのつり船たゆたひてあり

女子をんなら貝掘るもありこの岬人集りてにぎはしきかな

春風に真向ひて行く船の上に酔ひさましつゝ一人ゆくなり

熱帯のセレベス島を思はする天草の島なつかしきかな

太陽は光りかがやきマンゴーのみどりの葉陰にひるねしたるかも

にぎりめし

ばあさまのつくりしといふにぎりめしを見つゝしあれば母の思はる

にぎりめし食ふだに思ふわが母のつくりしめしのあまきあぢはひ
死に果てゝやせおとろへし母のみ手にのせたるにぎりめしの悲し思ひ出よ

阿蘇にて

朝がすみたなびく谷を望みつゝ若き友等と過す一とき

一夜過し今朝はわかるゝ時来り一ときごとの惜まるゝかな

写真をとると屋上に出で来ればすがしき大氣肌をさすなり

噴煙は太くたなびき風もなく大氣の流れゆるやかにして

頂の真白き九重の連山を朝日静かに照らし始めぬ

一人して苦しむ時は友ら皆悩みてありと思ひ給へや

いかならむなやみも友と分かち合ひひらきてゆかむ道あるしるしを

(雲仙第八回合宿教室にて)

昭和三十九年—四十七歳—

桜島にて

快きひゞきをたてて朝あけの港出でゆく舟勇ましき

大きな汽笛の音のめづらしく港の宿にねむりさめたり

船の音響きあひつゝ朝明けの海を行き交ひにぎはしげなる

朝なぎの静けき海に跡をひき出でゆく舟のさま勇ましき

(桜島第九回合宿教室にて)

輪読しつゝ

かけがへなき一日一日をつみ重ね生きよとふ言葉我に迫りく

教ふる道を正し合ひつゝ生きて来し友等の言葉の強き調よ

その父を犬死したりとふ先生にすがりて泣きし子のありしとふ

国のためたふれし父をまもる子のせむすべもなき悲しおもひよ

昭和四十年——四十八歳——

濃みどりの高くそびゆる山の辺に友等集ひて御旗掲ぐる

日の御旗風のまにまに昇りゆきてさやか風の風の見ゆる心地す

壮重の楽の調べの流るゝに身内しまりて心高なる

(城島第十回合宿教室にて)

慰 霊 祭

九月十三日

つたなくてなすすべ知らに人の世の移りてゆくを見るが悲しさ

さはやかのそのみ声もて現し世に獅子吼し給ふ姿あらなく

嵐ごと空に向ひてとぶ島の天降りませみおやらのとも

(「国民同胞」十月十日号)

東光会同窓会に寄せて

十月十一日

大空はあかねにそみて金峰の群山清し熊本の秋

一日ごとに秋深まりて道の辺のすゝきは今日も毛ばだちにけり
ゆくまゝにすだく虫の音かずそひて帰りゆく道さびしくもなし
荒れくるふ嵐に向かひひるむなくひるがへりとぶつばくろのあり
草も木も打ちなびかせて吹く風も乗り切る力我にもあらせ給へ

○

すずむしの鳴くねはしげし秋の気の肌冷たき道帰りゆく
良き友等今はなくして我等のみ生き永らへて遅々たる歩みよ

昭和四十一年—四十九歳—

橘湾を雲仙の山より望む

美しく静かな湾のその奥は橘中佐の故郷なるか

(雲仙第十一回合宿教室にて)

慰 霊 祭

九月

桜葉は皆散り果て、青空のさやかに見ゆる秋は来にけり
秋来ればみたままつりの近づきて心静かに昔を思ふ
新しき友をも迎へ友どちの心なごまむみたままつりは

旅の友に寄せて

九月

十有余年の長き月日を見たままつりにつくせし君は今旅にして
歴史はふるく国新しきヨルダンの荒野の果を旅ゆくらむか

昭和四十二年——五十歳——

南洲翁の生れかつ死したる鹿児島の上に

学ばむとして旅立つ長男・一誠に贈る

四月

国を負ひてたつべき時に南洲の生れし土地に君学ばむとす

おほどかに思ひて行くな皆人の行き得ぬ学びの庭に行く身ぞ

南の国のはたては動乱の世界にたゞに向かふ所ぞ

国を思ひつ人の世を思ひつ君の名のまことをつくし学び給へや

○

国民は我がことのみを思ふとき一人大君は民を思はず

若き等のかくそだち来てみ祖らのみ国つきゆく姿尊し

(阿蘇第十二回合宿教室にて)

黒上先生に

逝きし人返すすべなみ残りたるふみ読み返し伝へ行きなむ
残し給ふふみをし読みて若きらに伝へ残さむやまところを
残りたるみ文を君としたひつゝくり返し読みまたくり返し

(慰霊祭献詠)

さくらの落葉

さくらばは日ごとにちりてつくつくし蝉なく秋ははやも来たりつ
つくつくしなくをし聞けばふるさとの昔もしぬに思はるゝかな

明治天皇の御製「ひとりつむ言の葉ぐさのなかりせば
なかに心をなぐさめてまし」を拝誦して

言の葉に伝ふる外に我が心つたへむすべはなかりしを思ふ
なすすべもあらずと思ふ時にしも言の葉の道一人求めむ

民と共に生きむ心の一すぢに言の葉の道求め給ひき

今上天皇の終戦の御歌に

皆ことごとく我がためをのみ思ふ世に大君一人世を思ひ給ふ
大君の捨身の心今にして思へば我を救ひ給ひき

身を捨てて此の世を救ひ給ひたる大君に我つかへまつらん

一人あらば二人と思へと親鸞の言葉のこゝろ今我にあり

一人して世を思ひ給ふみ心につかへまつりて生きゆかむとす

人のため世のためつくす真心のつたはらん日はいつの世ならんか
長からぬいのちなりせば人のため世のためつくし生きゆかむとす

東光会の同窓会にて

秋深き立田の山に相見ざる友も集ひて昔語らん

さきなるはあとを導き国守る心伝へし東光会はも

○

言の葉は皆いさかひの種となることを悲しむ妻とのあはひを

言の葉の道足らざるかことごとくいさかひの種となるを悲しむ

眞実を伝へむと思ふその心伝はらざるを悲しみて来し

妻にしも伝はらざるを真心といふべきものか心足らはぬか

学生に歌をよませたまふ師を有難く思ひて詠める歌

若きらに歌作らしし師の心尊く思ふ今の世にして

心の限り生きたるまゝを歌に詠みつたへ来し国わが日の本は

いにしへの高き心をうけつぎて生きてぞゆかむ今のみ世にも

若きらも老いたる者もことのはのまことの道に心つながらむ

法華經を初めて聞きて

「根」くらく無明に住むとふみさとしの言葉に打たれ心ひらく
無明を愛し無明を去るをいとひたる昔の我に今はあらなく

酒のみて無明の闇にさ迷へる我をば捨てん今の今より
昔日のわれと異なり今よりは良き父親にならむと思ふ

昭和四十三年——五十一歳——

桜見の宴に加はらず独り帰る

四月

桜さく花見のときし春にそむきひとり帰るはさびしかりけり
酒のめばわからずなりていづくともわかずさまよふ我を悲しむ

五高八十周年記念に当りて

雄心を育みたりし武夫原を去りてゆ三十年はや過ぎ行きたるか

若き日の心は今も我を結びみ国に尽す心は消えず

若き日の心覚ませし松陰の心は今の吾わを生かすなり

此の国に生まれかつ死ぬ「生命」をし今我が胸に強く思ひき

日の本のとはのいのちに短かゝる生命捧げて生きゆかむとす

全体意見発表に際して

松陰先生の心をつぎて生きむとふ言葉に心たぎりやまずも

若き日に松陰先生の言の葉にいのち見出せし感激を思ふ

吾子も又此の道行けと共に来て学ぶ此の日に涙あふれつ

正道を踏みて行けかし若きらよ生き行く道はけはしかるらむ

全体意見発表の折詠める

緊張はふと和らぎぬ窓の外の庭にしのかつ雨のひとつき

はげしくも降りたる雨はしばしにて日は照りにけり集ひの窓辺に

小雨になりて日は照りそめぬいづくよりかかそかにひぐらし鳴きいでにけり

(霧島第十三回合宿教室にて)

慰 霊 祭

たゞかひつたふれたまひし師と友をひとしほ思ふ秋は来にけり

(「国民同胞」十月十日号)

昭和四十四年—五十二歳—

いたどりのわづかに生ひて草といふ草は生ひざり阿蘇の神山

熔岩の山の背づたひ草も木も生へぬ神山今登りゆく

草木の生ひざる峯の底ひには地鳴りもやまず煙吹き居り

白煙の立ち登りつゝ大空の雲に連なりみ空おほへり

永劫の神山の火の消ゆるなく若きらの胸に燃え続けてむ

(阿蘇第十四回合宿教室にて)

慰 霊 祭

九月十六日

亡きみたま生けるみ友ら相集ひみ国の道の乱れ正さむ

み民らの願ひひろごり相集ひたまよぶ今日の憂ひ深しも

み民らの願ひひろごり若きらも相集ひつゝみたままつりす

昭和四十五年——五十三歳——

三島由紀夫氏自刃——百ヶ日の命日に

降りゆくみ世にさきがけ散り給ふ君の心を忘れて思へや

君ゆきて百日ももひはたちぬいやましに乱れゆく世のみ楯とならむ

空速あそき天の通あもひ路に天降り来て友らの誓ひ護らせ給へ

松田信一郎君へ

五月二十日

ただひとりたよりし母の今はなくなしく野辺に送りたまふか

かけがへのなき母君を失ひし君はもいかに過したまふか

たよりたる母を失ひよるべなき日々送るらむ君をしぞ思ふ

サボテンの花開きぬ

サボテンの花知らぬといふ我に花の一鉢友は貸すとふ

丹誠のこの一輪の花いかならむ花の開くかと日ごと待たるゝ

うず巻の毛羽だちの中ひそみたる花は真白かはた紅か

身にあまる棘のあはひゆぬきいでゝ紅の花四つ咲きほこりをり

あでやかな紅の花三日にしてしほみし今は夢かと思ふ

合宿に向ふ途中

八月六日

合宿地はそこと思はれ光る雲そびゆる峯の上にたち居り

雲のふち白銀の色にかがやきて斜光さしつゝ日は入らむとす

○
尾根ぞひに曲れる小路たどり行けば風冷やかに谷ゆ吹きくる
いたゞきはそこと思ふに足下のしげみ深くにほとゞぎす鳴く
その声のあまりに近く優しきに心ときめき足をとゞむる

(雲仙第十五回合宿教室にて)

○
九月二十一日

すゞろなく虫の声はも波ににて或は高鳴りまた低くなる
縁近く聞きゐる側に鳴きそむる虫も合せて鳴くが楽しき
端近く聞きゐる時に新しく加はる虫の音ねひときは高し

片岡君の奥さんの葬式の日

豪の父にすがりて遊ぶ子を見ればいたく悲しも母なしにして

昭和四十六年——五十四歳——

こぞの春はからず君と相知りしこれの小路を一人して行く

朝夕に君と語りて行きし道一人さびしく今日も行くなり

家はなれ遠き海べは言の葉も住ひもなべてなじまぬものを

朝よひに波の音すらむ一人して旅行く思ひに君ますらむか

新しき学び舎にして新しき学びの道を拓き給へや

学びの道正さむものと思ふにもせむすべもなく君をし思ふ

いつの日か君の学び舎訪れて語らはむ日の心待たるゝ

四月二十二日

（註

熊本県立教育研究所に務めておられた光永先生が天草の県立倉岳高校校長として赴任される時に詠まれた歌）

○

八月

かの山かげの町に吾子は居るらむに此の合宿に来ぬを悲しむ
親の思ひ伝へ得ざりし悲しみのひたによせ来る霧島の原

(霧島第十六回合宿教室にて)

「日本思想の源流」の出版を祝す

過ぎてこし御代を思へば自ら涙あふるゝこと多くして
すめらみことはたゞ国民の上のみを思ひ給へることのかしこさ

水前寺公園にて

真清水の湧きて溢るゝさゞなみに木もれ陽の影群れて射すなり
さゞなみのまゝに群れたる小魚の影も今年の秋をよろこぶ
パラチオンの毒なき川に小魚の群れのたのしく朝日さすなり

月下美人始めて咲きたり

はつかにも日毎伸び来し此の花のつぼみは今日にも咲き出づらむか
今日にしてつとにふくらみ今宵かも花の咲くらむ時近づきぬ

動くとも見えず咲きいく異国の花をし見ればいとほしきかな

永き日を今日は咲くかと待ちのぞみし花おもむろに開き始めたり

真白なる清しき花の咲き初めて香りほのかに部屋に漂ふ

すゞやかに咲きたる花はえもいへぬ香放ちて今咲き終りぬ

さぼてんをかねて愛であふ人をしも呼びて語らふ此の一時を

一夜かけて咲きたる花のいかにかと起きてし見れば早しほれたる

もみぢ紅に染む

もみぢ葉は緋色に染みて冬の陽の照らせばさやかに浮かびいでくる

十月

心こめ作りしもみち美しく色そめあげて冬日照らせり

次年度の「ホテル阿蘇の司」での合宿の打ち合せをすませて
阿蘇の司よ来年の合宿の地よその日まで幸くあれとて振り返り見る
五百の友の集ふその日をひたすらに思ひて生くるみ友等を思ふ

浜田収二郎兄に

何ものも省みずして合宿の準備すゝむる友し偲ばゆ
死なばもろとも口に出ださね心には思ひしことを君に告げなむ
この合宿かりそめならずいくたの生命こゝに集めて成り立つものを

小田村兄に

十有六の永き年月自らのことかへりみず生きて来給ひし

つまらぬと一言のらさず此の事務に尽し給ひしことの尊さ

心尽すといふはかくのごとき己が身を省みずして生き給ひてし

己が身を省みずとふそのことの重きを今に思ひみるかな

吾子、徳島より帰る

十二月

車より下りむとすればにっこりと笑ひし吾子の我をむかふる

久々に帰りし吾子の大きくなりて見まがふ程にたのもしきかな

昭和四十七年——五十五歳——

信の東京遊学にあたり

四月

乱れたる学びの道を正しつゝ根強くすゝめ大丈夫ますらをの伴
日の本の国の乱れは学問の乱れによるぞ心してゆけ

楠公祭に

風冷たく雨雲低き博多湾に楠公祭の友等偲ぶも

黒雲は低くたれこめ海くらき博多湾上鳥居一つあり

黒雲に向ひてたつか海の中にただ一つたつその鳥居はも

天地もくらくみだるゝ今の世を心かよへる友がき守らむ

とのぐもり雲ひくゝたれ防塁に正成公の昔偲ばゆ

尊氏は九州の地に下り来て勢を得てまたもそむきし

時習義塾に電話つく

塾の生命国内に満ちて拡がれと今し電話はつかむとするか
待ちに待ちし電話工事ははかどりてまもなく工事は終らむとする
いよいよに局につながり新しく電話の生命今生れむとす
此の電話すこやかに育ち塾の生命国内に拡がり満てよとぞ祈る

○

火口より吹き上ぐるけむりうづまきつ風のまにまに雲につらなる
底深く地鳴りとよめばひとときはに白煙高く空に上りぬ
永劫の昔のまゝに地底より吹き上ぐる煙いつかしきかな

ペマ・ギャルポ君の話を聞きて

チベットの亡国の民切々と訴ふる言葉忘れかねつる

(阿蘇第十七回合宿教室にて)

眠れぬまゝに

八月十日

ことごとく狂ひだせしか役所にも居る人皆は我に牙むく
世はいかになりゆくものか一人して生くるくるしみかくのごときか
若き等の萌え出る力に日の本の生命の芽ぶきたゞ祈るなり

子ども

十月九日

縁に活けし月見のすすきのさゆらぎに三人の子等をはるかに思ふ

熊本県教育研究会総会に寄せて

十一月

堪へ難きを堪へて集ひし七年の苦しきことを忘れて思へや
今は尚こゞしき道のつゞくとも畏るゝことなく進み行かなむ
正道まさの絶ゆるなければ末遂に拓けむものと思ふ今日かな

(御題 詠進歌)

熊本行きの車中にて

疾く起きて家をいづれば明けやらぬ空にきらめく星影しるし
白みゆく空に山影見えそめて夜は明けゆくも汽車の窓辺に
白き霜筑後の野辺に降りしきて車内冷える今朝の旅立ち
友がきをさしていであつ旅なれば心はづむも朝の冷気に
山の端にかゝれる雲を照り通し日は昇るなり晴れしみ空に

本妙寺詣で

熊本の友らとつれだち清正の菩提とむらふ本妙寺へゆく
清正の威勢と遺徳の調和せし古きみ寺の坂道をゆく
癩病の盃一氣に飲みほせし伝説胸うつ情なまじりの清正
友の分けしローソク線香をねむごろにこもごも供へてぬかづきまつりぬ

本堂のみ側に立てる「朝鮮人金官之墓」の銘碑目につく

国を越え生命を越えて清正をひたに慕ひし金官の墓

清正の銅像たてる台地よりながむる肥後の国原うましも

わが友は国のまほろばと賞づるかなうましき肥後路に冬の日さすも

昭和四十八年——五十六歳——

仁田峠にて

八月六日

縦の木の梢も山も一息にのみこむ雲の肌につめたし

縦の木の梢の上を雲わたりほとゝぎすの音鳴きやまぬかも

大谷を雲吹き上り木々も皆包み込むなり仁田の峠は

合宿を終へて

島原の港も村もかすみをりて雲仙の山夕暮れむとす

雲仙の合宿の地はかすみかゝり眉山の彼方に今うすれゆく

三年のあとか雲仙に廻りくる合宿にまで力続くか

船ごとに大きくゆれて外に出れば夕日は赤く雲の中にあり

船は早三角港の入口に近づかむとて汽笛鳴らせり

緑なす天草島に松は無くさびしきまゝに夕暮れむとす

天草と本土を結ぶ大橋の下をくゞりて船は行くなり

橋すぎて港の入口の燈台は色づく見えて夕づかむとす

○

(雲仙第十八回合宿教室にて)

親と子と相伝へつゝ日本の大和の生命つたへむとせしに

己が生命なげうちてこそ国の生命護り得むものと思ふこのごろ

—聖徳太子の「国家の事業を煩となす、ただ大悲憐むことなく志益物に存す」との御言葉
を思ひ返し、太子すらかくのたまふに、いはむや凡夫の子の志定まる日を心永く待つ外
なきかと思ふ—（前の二首につづく走り書き）

島根より来られし試験場の方へ

玉造温泉の友偲ばれて島根ゆ来し人なつかしきかな

話し居れば純朴の人かの友の国柄かとぞことにしたしき

酒飲みつ歌つくりつゝ生きて行く友の姿のたゞになつかし

歌つくりガリ版切りて闇夜なすみ国の内に叫びつゞくる

慰 靈 祭

十月十日

あたらしきみたまもむかへわかきともとたままつるべきときはきたりぬ

（「国民同胞」十月十日号）

昭和四十九年——五十七歳——

新年に寄せて

日の光うらゝに受けて新しきいのちの芽生え祈らるゝなり

小柳左門君の講義をきゝて

八月五日

若くしてみ国に生命捧げたる先輩の歌さはやかによむ

かの友は帰り来る日もあらじとて友恋ふ歌を残し給へり

(霧島第十九回合宿教室にて)

慰 霊 祭

九月十六日

明けやらぬ庭の茂みに鳴く虫のさやけく秋は来にけり
友の顔の一人一人を思ひつゝたままつる日の近きをぞ思ふ

昭和五十年——五十八歳——

新年に寄せて

来し方も生命の限り生きて来し大和の行方護らせ給へ

○

八月九日

此の友もかの友も来て笑み交はし阿蘇の火口はにぎはしきかな

自づから集ひ来りて古き友らうつしゑをとる心たのしき

二十年の長き月日を積み重ね努め給ひし友ら尊し

(阿蘇第二十回合宿教室にて)

慰 霊 祭

たらぬ身もあひたづさはりすぐる代の長き月日を今送り来ぬ

(「国民同胞」十月十日号)

昭和五十一年—五十九歳—

新年に寄せて

もろともに呼び交はしつゝ新しき御代の栄えをひらかむと思ふ

玉造温泉にて

三月

玉づくりいでゆのさとに一夜かけて語らむものと出でたちて来ぬ

八雲たつ出雲のくにに球磨川の焼酎さげてはろばろと来し

すさのをの命のいのちそのまゝに君は居たまふ歌よみしつゝ

すさのをの命なつかしそのはゝを恋ひわたるとふ命なつかし

(「青砥通信」)

第二十七回全国植樹祭始まる

五月

大君に命さゝげて出でしより三十あまり三つの年はへにけり

久滋川の山の奥^{おく}処^どに大君と木を植うる日の有りと思ひきや

真白なる花をちこちに咲き出でて夏の始めの喜びに満つ

大君のみ心のまゝ生きて行かむ我が行末のつゞく限りは

○

日の本の苦しみをたゞ背負ひつゝ生きて来ませり吾が大君は

一歩一歩と歩ませ給ふ天皇陛下に民の心はいそぎあつまる

三万の人の心の集りてすめらみことと心通ひぬ

此の一日を待ちに待ちたり一ときの生の喜びいはむすべなし

熊本県庁を辞めるにあたり

六月三十日

二十有五年の月日過ぎゆきてわがそゞぎたる生命いづくに
うけつぎて行く人も無きその道に草も茂るか山の辺の道
生きて来しはるかの日日今日もまためぐりすぎ行き果ても知らなく

○

八月九日

陽光は真向ひにてり松浦島の湾より望むは外海なるか
島々は光の中に浮きいでて松の姿も黒く光れり
外海と思ひし海のはたてには濃くはたうすく島々のあり
古き友新しき友集ひ来て今別れ行くおのおのものに

(佐世保第二十一回合宿教室にて)

慰靈祭

九月

八百萬國に満ちたるまがつみのありのことごと打ち払ひ給へ
大和島根の天地おほひおしよする雨風雲のうなりすさまじ

今上天皇御在位五十年の祝日に

大君に生命捧げよとさとしてしいつかしき母は今はずして
吾がいのち捧げて行かむ今日よりはたゞ一筋を踏みて生きなむ

元日の朝

朝の祈りすませば朝日さはやかに縁にさし入りさはやかなりけり
物音も一つとてなき正月の朝日の光幸にみちたり

三十有余年の昔死すべかりし身は生きて天皇の御歌拝すも

賀 春

朝もやに皆つゝまれて新たなる朝日輝き今昇るなり

元日に天皇の御歌を拝唱して

進む道は神代の昔神々の開きたまひしきしまのみち

死ぬべかりし身は存らへて此の幸をよろこび居ると君につげまつる

三人の子等は巢立ちて正月を妻と二人して神まうでする

松田信一郎君の結婚式に

大学の紛争起り乱れて術なきや決然とたちてそを打ち払ひき
にこやかに笑みいますとも全学連をしのぐ雄心内に秘めたり
時習義塾を起して友の真心を拓くべき道講じたまひき

じゅんじゅんと説くことの葉は国を憂ひ友を思ふ思ひのほとばしりかも
めぐし妻今得しからは漂々の旅もまゝならぬと思ひ給へや

終業式を終へて

(熊本女子商業高校) 三月十九日

あゝ一年早くもすぎで終る式は淡々として過ぎてゆくかも

会ふは別れの始めといふに三百の一年生と今別るゝなり

何も判らぬまゝに過ぎたる今日の日に退任の挨拶は心にしみき

余命幾ばくと数ふるとき言の葉に去りゆく人の心偲ばる

坂本精児君の結婚式に贈る

菊池川の真砂のながれ朝宵に見つゝ育ちし君をしぞ思ふ
純忠の菊水の流れ今の世に汲まむと思ふ友等集ひて
深き契り成るらむみ子も菊水の清き流れを汲み給へかし

国旗掲揚

八月八日

静かなる朝もやかゝると思ひしにはげしき風の吹きてやまずも
強くなりまた弱くなりみ空吹く風のまにまに旗ははためく
ちぎるゝかと打ちふるへつゝ日の丸の旗ははためく朝風のまに
吹奏の楽は動ずることなく太鼓の音もたじろぎもせず

(雲仙第二十二回合宿教室にて)

○
年取れば身にも心にも弱り目の自づからいで来て心寂しも
さりといへど若き友らの続き行く姿を見ればたのもしきかな

慰霊祭に寄せて

九月十三日

合宿を始めて二十二年とふ長き月日は夢の如くに

合宿を開くためとてさはりあれば全てをやめて努め来にけり
いかならむことのありとも合宿は開かむものと努め来にけり
一回一回努め来りて二十二の合宿は遂に終りたりけり

○
友等皆集ひ集ひて靈よばひしつゝ昔を偲びますらむ

（「国民同胞」十月十日号）

虫の声に

虫の音はまだ明けやらぬ草むらに残りてすがし初秋の朝
亡くなりし師と友を思ひ朝ごとに虫の音悲し初秋の庭

また虫の声に

一つやみ二つなきやみ一夜かけてなき明したる虫のあはれさ
静かなる時のめぐりに自づから明けゆく朝の心すがしき

還曆に詠める

九月十三日

いまにして一すぢの道たどらむと思ひつきたり還曆の日に
人生の絶えむとすなる今にして一すぢの道行かむと思ふ
行き行きてたふるゝまでも踏み分けむ中国の果てもインドの果ても

昭和五十三年——六十一歳——

朝日に寄せて

一月

阿蘇の峯遙か連なりそが上に朝日輝やき雲は光れり

朝日かげさし入る時し世の闇もやも自づと消えゆくものを

大空はあかねにそみて大阿蘇の上に横たふむら雲のあり

一しほにあけ色こきはああたり日出づるらしく動くともなし

朱の色やゝに変わりて自づから明けゆく朝のすがしきろかも

朝もやも闇も自づと消えゆきて今日の一日もさはやかにこそ

狂気に満ちし年を送りて来む年は正気溢るゝ国となしてむ

○

三月十五日

その母をしたふあまりに小熊らはなすすべもなく迷ひなげかす

九州は淡雪降りて消えゆくに青森地方は大雪といふ

雪の上に又雪つもりて青森に墓守り暮らす母思ひの君よ

母と子と歌よみしつゝ暮らしたる生きのよろこびこゝにみのりき

(註 長内俊平氏の御母堂の歌集「朴の朱実」出版の折の便り)

中園君の結婚を祝ひて

三月二十五日

南の海の島なる山椿の赤き心の君を妻とす

み国内たゞならぬときつまめとり子等はぐくむはかしこきろかも

すめ国の仇なすまがを打払ひ進み給へや孫子の代まで

深き縁によりて結べるはこのちぎりはぐくみ給へ縁の限り

春季皇霊祭の日に

三月二十日

春雨の一夜やまずに降りにけり木々も庭辺もしとゞに濡れむ

雨だれの一夜をかけて落ちたれば庭木も草も生きかへるらむ

小田村大人に「昭和史に刻むわれらが道統」を戴きて

四月

昭和の御代に全てを捧げて生きましつ御命思へば尊くもあるか
国を思ひ友等たづさへ日に月につとめ給ひて生き給ひけり

しきしまの道を踏めとてことあるごとに教へ給ひて今日に至りぬ
愚かなる我にてあれど一すぢの道踏みしめて歩み続けむ

父の日にプレゼントを貰ふ

初めて父の日の祝ひ貰ひたるよろこび何にたとへむかたなし
新しきバンドをしめて誇らかに明日より行かむ教壇の前

黒上正一郎先生の御墓に詣でて

御墓には春の来りて桜花つぼみはじめぬ朝もやの中

うぐひすも静かに鳴きぬ眉山とふ美しき山の麓の御墓辺

師の御歌読みつゝくればあひまつる思ひさへして心なごむも

再びと訪なふこともなからむと思へば悲しこの御墓辺よ

有馬宏君の葬儀に

七月二十六日

われらがゆくてまもらせ給へわれらまた君をとぶらひ進み行かなむ

一すぢをふみ行く外に道はなしとたゞひたすらに思ふこの頃

○

日の御旗掲ぐる時につばくろは楽にあはせて舞ひに舞ひゆく

楽の音のひびきにあはせいづくよりつばくろ来りめぐり行くなり

日の御旗一回りしてつばくろは雲海の中にたちまち消え行く

ますらをのあまた集ひてにぎはしく合宿するは心楽しき

広々と広がる海の果てなくもうねり行くがに心拡がる

高らかに歌うたひつゝ久米の子のあまた並びて打進み行く

(阿蘇第二十三回合宿教室にて)

時習義塾より歌を送りくる

九月

度重なる歌会の歌送りきてしきしまのみちこゝにひろがる

一人一人心のかぎり歌ひてし歌のしらべはとゝのひ始めぬ

自らなりいづるまではなかなかならぬものかと思ふこのごろ

言の葉のまことの道をきはむるが今生くる道と思ふこのごろ

松本唯一先生の歴史講座を拝聴して

先生の集めたまひし刷り文は一日毎に整ひてあり

我が集めし資料の数と比ぶれば心の深さしのばるゝかな

一日一日生き給ひたる感激を今のうつゝに生きたまふなり

されどあゝ時折まぶたとぢられて老ひたまひたる姿を拝す

若き日の感激さながらに今日の日を生き給ふらむ一日一日を

慰 靈 祭

三井先生田所大人のいつかしくはるかな生命に参る今日かな
若き日の友の面輪のひとつひとつとつさやかに思ひ歌たてまつる
あゝ十年いかに生きむと祈りつゝまつりの庭に遙かかしづく

昭和五十四年——六十二歳——

亡き師友を偲びて

一月一日

みだれゆく御代の姿をなげきつゝ身をはむ思ひに失せたまひしか
たゞならぬ時は来りぬもろともに群り出でて御国守らむ

糖尿病にて入院

一月十八日

我が生命新たに永く生きよとて与へ給ひしと思ふかしこさ

余病起こし或はめしひになるやも知れずと言ひし言葉の常にひゞきく

忘るれば小さき虫に似し姿直ちにあらはれおびやかすなり

あるかと思へば直ちに消ゆる虫にかも似たる姿は目の内にあり

払へども払へどもなほ消えてまた現はるゝ虫の姿わづらはし

○

一月二十一日

例会を始めたまふと思ふにも行かれぬ私の申し訳なし

我が病運よく癒えなばますますに世に尽さむと思ひはじむる

幸ひに病癒えなばますますに君と国とにつかへまつらむ

大君に捧げし生命いつにても終らむものと思ひいでつる

老いの生命なに惜しからむ大君にいついなりとも捧げむものを

皇道のためることなく国内に拡がりゆけと朝毎祈る

皇道の榮えにさやる者さには増ゆるを悲しむ打ちてしやまむ

東大となべての大学ことごとく王道のさやりとなるを悲しむ

皇道を皇道としてきはめむとする教授の一人も無きを悲しむ

皇道に身を捧ぐとふ教授一人無きを悲しみ一生を終ふ

○

一月二十二日

日ごと歌詠みつゞけむと思ひしに早くも五日むだに過ぎにき

朝に日にあまたつくらむと思ふにもいくだの歌も詠みえぬ悲しさ

道に会ふ人少なきに冬日さし独りゆく道の楽しくもあり

小鳥の森と記せし所赤き実のすゞろになりて鳥集まりぬ

鳩群れて飛び下り来るをみださじと遠くたゞずみ見るは楽しき

石垣をめぐるかづらを取りのけていつかしき姿くすす悲しさ

自づからまつはりつきしつると葉のやはらかさもて古城はいつかし

古城のいらかいつかしきにもたぐへつゝ老木のこずゑ空にすがしも

朝日影背おひてたてる櫓三つ黒々とたつ朝の空に

城内を廻る

○

一月

階の石のあはひの日だまりに静かに腰を下しながらむる

冬空の動くともなき雲の中にそびゆる城のいつかしくして

大きな城の上なるしゃちほこの重み美しく城をととのふ

常緑樹の楠の青葉の森中にそびゆる城のいつかしく姿よ

老大木はかすみにぬれて落ちてくるしづく時をり身におちかゝる

梅の花かすみの中に咲きそめて浮びいつるがに朝日さしたり

朝がすみの中に櫓は浮び出でていはほのごとくそゝり立ちたり

朝日子はかすみの奥にわづか照り宇土櫓はも影絵のごとし

静かにも春は来りぬ老木の群立ちたるにかすみこめつゝ

石垣の上を歩めば我が影の深きから堀の上に落ちたり

から堀の深きにうつりし我が影のさゆらぎしつゝ光りて見ゆる

紅梅の花咲き初めて開かむと冬日暖かき梅の林に

一本は今日開きたり梅の花一日一日に春は近づく

紅梅と真白き梅の一日ごとに花開きつゝ匂ひたゞよふ

梅の林に歌詠みをれば梅の香の匂ひ来るなり春風にのりて

同室の入院患者に

一月

学生デモの火焰ビンにやられて七年の長き歳月を病いやすとふ

側に居て苦しむ様を見てしあれば政府は何をしをるかと思ふ

国のため命捧ぐといふことを眼のあたり見つこの苦しみに

生活も苦しき中に昼はしもつとめて夜は看病に来る妻よ

その上に嫁は交通事故にあふといふ何と悲しきことのみつゞくか

我がことを忘れてたゞに此の一家をたすけたまへと祈りてやまず

人の世はかく悲しきに常のごと春は来にけり雨ふらしつゝ

○

梅の花ちりて舞ふかとおもほへて真白き雪のかぎりなく降る

二月一日

○

そびえたつ城の櫓は日の光うけて輝く寒空の中に

二月三日

一本づつ咲き初めにけり梅の花今日の寒さに数そひにけり

いつとなく皆開きたる梅の花寒さますますきびしき中に

夕日かげやはらかにさす梅林にそこはかとはほふ梅の香りは

同室の患者を思ひて

二月四日

朝夕に早く良くなれと祈りたる隣の患者は移り行くとふ

全学連の火焰ビンにて受けし傷遂にいえずと聞くが悲しき

その傷の治療費いかになり居るか家人は夜毎来て朝帰り居る

生活もさぞ苦しからむ医療費もまゝならざると思ふにつけても

朝よひに護国神社に参りても県警察の碑は一つもあらず

国のためたふるゝ人は今の世に唯警察のみと思はるゝなり

国のため命さゝげし人をまもる御社とこそ思ふにつけても

二月六日

晴れ渡り風冷やゝかに吹きぬくる朝の古城さはやかにして

朝日さへ春めきて来てその風もやはらかくこそ頬を吹き行く

行く人の足どりもかろく春近き古城の旅をたのしむらしも

我が病ひ春の日と共に消えゆきてすこやかならむ時のまたるゝ

二月七日

広庭に春の陽ざしは満ちみちて梅の香りは風に乗りくる

二月八日

春の日のうらうらうらてれば霜とけて春のかすみとなりぬるらしき

春來れば我が退院も遠からず來ると思へば心樂しき

一日余りそのまゝなれば更にはも進まぬものと思ひて良きか

或はも眼は遂にめしひにと進み行くかと恐れしものを

二月十日

もずもひよもかすみの奥に鳴きしきり古城の森はにぎはひてをり

かすみとも雨ともつかぬ霧雨のはつかに降りて物はうるほふ

裸木もくすの茂みも春かすみにかすみで見ゆる春立つ朝

明日はしも友等集ひて紀元節の良き日を祝ふ時とはなりぬ

年老ひし師は杖つきて詔勅をよみたまふとし思へば尊し

二月十一日

うらうらと日は照り渡り建国の今日の良き日を民等たのしむ

梅の花皆々開き建国の今日の良き日に香り満ちをり

友等皆集ひ集ひて先哲を偲ぶと思へば我も行きたし

二月十二日

澄みとほり真青の空にまぶしくもうき出すごとく花は開きぬ

長寿を祈念すと太鼓の音の鳴り渡り護国神社に人等集ひ来

朝よひに詣でし甲斐あり今はしも元氣になりて退院近し

両隣りにいねたる人をまもり給へと祈る甲斐ありていたく良しとふ

二月十三日

宇土櫓大天守閣小天守閣と重なりて見ゆるこゝいつかしき

太刀さして行き交ふ武士はあらねども昔の様を偲びてやまず
雲の上ゆく心地する幅せまき此の石塀の高みを行けば

二月十四日

我が病遂にいゆる日近づきて園生の梅の花散らんとす

春かすみ満ちたるなべに腰かけて蜜柑の甘き汁を味はふ

後数日通へばこゝも訪ふことも無しと思へばさびしく思ほゆ

烈風はいつとしなく春めきて太鼓の音ものどかにひゞく

二月十五日

霧の日に夢のごとくに咲きし梅の今はひとひら散るぞ惜しまる

ひとひらは静かなる風にいつくともなく空に消え行き見えずなりにき

何ならむ小鳥は軽く鳴きさやぎいよいよ春は深くなりゆく

紅梅の紅きを照らす朝日かけすけてさやかに見ゆるひととき

二月十六日

雀子も春来れりとさへづりて楽しく鳴くよ梅の林に

紅梅の花もまじりて梅の花白く浮きでぬ朝日浴びつゝ

ことごとくに花咲き出づるに老木は未だしとてか花二つ三つ

身体悪きリハビリの子等走り来てたどたどしくも我を追ひ越す

我も亦今日は走らむと思ひたち子等にまじりて走り始むる

泣き声とも叫びとも思ふ声あげて走る子もあり朝の公園を

霜ふりてつめたき道をはだしにてえいさえいと走りゆくなり

草の上走れば先生は大声に子の名を呼びて道を行けとふ

二月十七日

天地は騒然として風吹く中に毅然と城はたちをる

雨風の一夜ふき来て梅の花見るかげもなくしほれしあはれさ

二月十八日

花びらは芝生の上に散りしきて春一番と吹きあれたりき

紅梅も白き花びら花ながら散りたるもありはげしき嵐よ

世を祈り人を祈るといふことの難きを今に思ひ知りたり

二月十九日

生けし花いよいよしほれて退院の時は刻々近づきて来ぬ

子供らが一人づつ持ち捧げたる花はも遂にしほれ初めにき

生命の若やく子等の持ちて来し花はひとしほあでやかなりき

枯れざらむとビニールの紙に巻きしまゝ置きしも遂に枯れなむとする

一月も共に病をやしなひし人等と今は別るゝ時の来ぬ

別るればまた会ふ時も無からむか時の流れを止めむすべなし

圭子の結婚に

天地の精は桜の花となり日の本つ国に咲き満ちてあり

天地に春は満ちみつ今日の日は嫁げる君の幸をぞ祈る

○

五月

始めての給料取りて喜びを家に送り来る末の吾子はも

やうやくに学資もいらぬと喜びて居るに金をし送りくれたる

長く続きし学生々活も今終り巢立ち行く子は頼もしくなりぬ

人のため世のためつくす時にこそはげむ心の内より湧かむ

(註 御子息信君宛便りより)

松山公士合格に贈る

三月

今の世の乱れ思へば南洲の頃し惚ばる心して行け

南洲の頃にも似たる世の乱れ思へば難し学びの道は

南洲の頃にも似たる日の本の乱れを正せ学びの道に

熊大学内講演会に行きて

五月

学内の講演会にみ友らの欠けるを見ればかなしく思はゆ

これのみに我がいのちあるものと思ふに友ら欠けたるもあり

○

八月七日

始めての合宿を此処に開きしゆ二十四年の年月をへし

はるかにもへだたりしものか此の月日世は乱れつゝまたなぎゆきつ

若き友いやつきつきに集ひ来て霧島神宮に今日も詣づる
太鼓の音とゞろき渡りすめ国のはじめのときの昔偲びつ
天降りまししみおやの神の力もて此の若人ら守らせ給へ
神宮の境内よりは桜島そこと見えつゝうす煙はく
明治維新の昔偲びて若人の歌を誦するを聞けば尊し

吉田松陰の死を憶ふ

八月九日

死すること常のごとくに詩を吟じ行き給ふ姿光るがごとし
幕吏共呆然として立ちしまゝなすすべ知らず見送りしとふ
同囚の志士らも松陰の壮絶なるその死を歌に詠みとむらひぬ

(霧島第二十四回合宿教室にて)

皇居にて

八月二十八日

遙かにも大君仰ぎすこやかにすぐせ給へと祈り奉るも

再びと訪ふこと無からむ宮城に独り静かにをろがみやまず

中国の人達来りてうつしゑを取りて居るなり何思ふらむ

遙かなる昔の思ひなすことも遂になくして世を終るものか

大君の辺にこそ死なむとうたひつゝ出で征きし日の忘らえぬかも

楠公銅像の前にて

八月二十八日

独りしてはるかなる空をながめつゝ今にたち給ふ楠公の像は

青銅の青さびさはにつきをりて悲しく思ふ世のうつる様に

楠公を仰ぎて生きむ人もなくたゞ中国の人等訪ひ居り

嗚呼忠臣楠氏の墓と書きし人は中国の遺臣と聞き居るにあゝ

時移り人変りつゝ中国の観光団の今此処に訪ふ

日の本の大和の生命よよみがへれとたゞ祈りつ拝す今日かな

妻も来ずたゞ一人して宮城ををろがむ悲しみ忘れて思へや

明治神宮にて

八月二十八日

せみしぐれなくなる夕べひとりして宮居の道を参る今日かな

右の森のくろきが中に鳥なき一羽は突然道よぎり行く

何ならむ梢の上に二羽三羽小鳥とまりてむつみ居るなり

夕くれてさびしき森にせみの音の色々の音に鳴くが嬉しき

家族ごと参りし人のゆるやかにぎはひ行くはたのしかるらむ

かしはでの音のひゞきて大神に参る心のなつかしきかな

外つ国の人もまる来て参り路を行くがたのしき涼風の吹く

台風の来るがに思ふ夕風にのりて鳥の一羽飛び行く

さんざめく夕べの風はあはたゞしく台風近き思ひぞすなり
鳩も人もむつみ行く道大神のみ社の道はたのしくもあるか

附 年譜、弔辞、弔歌、その他

明治天皇御製

樹間花

こずゑのみ人に知られて櫻花
木がくれながら散りや果つらむ

徳永正巳謹書

瀬上安正 略年譜

(年月日)	満 年令	(関 係 事 項)
大正 六・九・一一	〇	玉名郡南関町宮尾四五三に於て、瀬上満太郎・ウタの間に生まれる。
大正 七・九・二八	一	父満太郎死去(五十二歳)
大正一四・四	八	南関町立賢木小学校入学
昭和 五・三	一三	同小学校卒業
昭和 九・三	一七	県立玉名中学入学
昭和 一〇・四	一八	同中学卒業
昭和 一三・一二	二一	第五高等学校理乙入学
昭和 一四	二二	東光会に入会
昭和 一五・四	二三	「第一回全国学生連絡遊説旅行」で、五高を訪れた小田村寅二郎氏(現、国民文化研究会理事長、亜細亜大教授)と出会う。 全国の大学、高校、高専の学生を集めての最初の合同合宿、原当麻の「無量光寺」の合宿に参加。 東京帝国大学農学部林学科入学

昭和一六・一二
昭和一七
昭和一八
昭和二一・五
昭和二二・八・一〇
昭和二三・七・二九
昭和二四・一二・八
昭和二六・九
昭和二七・一一・二一

九

二四

二五

二六

二九

三〇

三一

三二

三四

三五

正大寮（東京府北多摩郡三鷹町牟礼四四七―三）入寮

——先輩、友人と通信協力生活を営む一方、全国の学生達との交流を盛んにする——

徴兵検査

大学卒業、三菱商事入社

召集令を受ける

北ボルネオ・セレベス島マカッサル市鳳敦産業（三菱商事支社）に転勤

終戦により引揚

松山居鶴子と結婚

永和商事創設（福岡）

長男、一誠誕生

次男、三貫誕生

熊本県庁林業課奉職

——これ以後、勤務のかたわら熊本大学学生らの指導を自宅や小泉八雲会館等で行う

三男、信誕生

昭和二八・一二・一三	三六	母、ウタ死去（七十五歳）
昭和三一	三九	国民文化研究会（現、社団法人）の創設に中心となり尽力九州霧島に於て、国民文化研究会主催の「全国学生青年合宿教室」（第一回）が開かれる。（期日 八月十九日と二十二日、三泊四日）
昭和四六	五四	——以来、毎年行われることになったこの「合宿教室」に連続参加（一回と二十四回）、学生及び社会人の指導に専念——
昭和五一・六	五九	第一回合宿教室レポート「混迷の時代に指標を求めて」発刊
昭和五四	六二	熊大信和会の学生寮である「時習義塾」の開塾（十月八日）にともない、折にふれ輪読会などに参加
昭和五五	六三	熊本県庁退職
	七	熊本女子商業高等学校に生物の教師として奉職
	七	一月十七日と二月十九日 国立病院に入院
	九・十九	持病、糖尿病等の検査のため上京 交通事故にて死去

弔 辞

(小田村 寅二郎)

今は亡き、われらのかけがえのない、そして、まことの友であられた瀬上安正さんのみ霊のみに、国民文化研究会に連なる同信師友に代り、謹み、敬い、畏みつゝお別れのご挨拶を申し上げます。

国民文化研究会は、今は社団法人の組織を整え、二十四年間にわたり、累計七千人近くに及ぶ大学生諸君に、祖国日本の悠久の生命を学ばせるべく渾身の努力を傾けてまいりました。その国民文化研究会を創始せられたお一人が、実は、瀬上安正さん、あなたでありました。それは昭和三十一年のことでありまして、われわれのみならず日本人のすべてが、その日の生活に追われるばかりで、自分のこと以外に心を及ぼすことの出来なかつた時期でもありました。あなたもまた、幼いお子様を決して棄ではないご生活の中で、奥様とともに子育てになっておられた最中であつたと思ひます。

しかし、あなたは、生来の「ますらを」と申しましようか、心一筋に、祖国日本の当時の悲しむべき精神的自信喪失の現状を見据えられ、九州各地の友らに呼びかけて、大学生を集め、一人

でも二人でもいいから、立派な日本人の心の持主になつてもらうべく努力しようと立ち上がられ、そして作られたのが国民文化研究会でした。その第一回の合宿が、その年、昭和三十一年の夏に霧島で九十名の学生を集めて開かれました。そして、その時のレポート、『混迷の時代に指標を求めて』と題するレポートに記録されているあなたの「開会のことば」は、今読み返してみましても、言々句々憂国の真情と、若い後輩に寄せる切々たるまごころの吐露であつたのであります。また、当時、事務所も何もない国民文化研究会の事務所は、熊本市池田町九九九番地となつており、それは言うまでもなく、瀬上さん、あなたのご自宅でありました。ご夫婦そろつて、国民文化研究会の創立事務と、第一回合宿の準備をして下さつたのであります。あなたは、正に「国文研」生みの親とでも申さずにはおられません。爾来今日まで、あなたは熊本で沢山の、すばらしい後輩に、あなたのお志を、そのまゝあますなくお伝え下さいました。沢山のすばらしい人士がこゝ熊本の地に輩出しております。そしてまた、あなたをお慕い申し上げる人々は、熊本のみならず、全国に沢山出てまいりました。あなたのお心は、その人々の心に、また、私も昔からの仲間たちの心に、つゆ微動だにすることなく、受け継がせていただいております。瀬上安正さん、あなたのお身体はあの世にお去りになられましたも、あなたの尊い憂国の御志は、奥様は

じめお子様がたに、ご近親の方々に、そして私ども「国文研」の仲間たちに、いつまでも、いつまでも、ありましし日々のごとくに、生き続けてまいることでございましょう。

さいごに、いま一言申させていただきます。それは、この八月に霧島での第二十四年目の「合宿教室」が終了しました折、あなたが、お書き下さった「走り書きの感想文」という短い文の末尾に、「吉田松陰の死を憶う」と題した三首の和歌を記されました。それは、合宿中に、私が講義の中でお話しした「吉田松陰の死にぎわの情景」を、お心にとめられてお詠みになられたものと思われます。その三首の第一首は、「死すごと常のごとくに詩を吟じ行き給ふ姿光るがごとし」という和歌です。「死すごと常のごとくに」とは、そのまゝ瀬上さん、あなたがこのたびお亡くなりになられた死に方、そのもののように不思議に思われてなりません。あなたはそのお言葉通り、「死すごと常のごとくに」のご心境でお亡くなりになられたご様子です。

また、その二番目のうたは、

「幕吏共呆然として立ちしまゝなすすべ知らず見送りしとふ」

とあります。「幕吏ども」ではなくて、ここでは、奥さまをはじめお子さま、ご近親の方々、そして私共友人のすべてが「呆然として」あなたの訃報に接したのであります。あなたは、余りに

も「あっさり」と去ってゆかれました。遺された者はすべて、呆然とするしかありませんでした。そして第三首目は、

「同囚の志士らも松陰の壮絶なるその死を歌に詠みとむらひぬ」

というおうたでした。いま、あなたのご逝去を悼む全国の友らから、この葬祭の場に弔い悲しむ和歌が陸續と送られて来ておるようであります。おうたのお言葉通り皆が「その死を歌に詠みとむらひぬ」でございます。八月におよみになったこの三首のおうたに、不思議にも今日の御旅立ちを予感なさっておられたのでしょうか。まことに思い一入の三首のおうたでございます。

私は、瀬上安正さんが、旧制の第五高等学校にご在学中から今日まで四十二年間にわたりまして一身同体のお付き合いさせていただいてまいりましたので、お別れに当り、申し上げる言葉は尽きません。しかし、もうお別れといたします。ご在世中に賜りました篤きご友情に対しまして、ここに改めて同人一同とともに、心から厚く御礼申し上げ、安らかなご冥福を、ひたすらにお祈り申し上げてお別れとさせていただきます。

昭和五十四年九月二十二日

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村 寅二郎

弔 辞

(加 藤 敏 治)

今は亡き瀬上安正兄のご霊前に哀悼の思いをこめて、お別れの言葉を捧げます。

余りにも突然な、あなたの、ご逝去の報に接し、耳を疑い信ずることができませんでした。あなたを敬愛した全国各地の友皆が、その報に驚き誤報であることを願ったのです。

瀬上さん、あなたは何故、このように早く永遠の旅に出られたのですか。私たちの前から姿を隠してしまわれたのですか。諦め切れぬ思いで、あなたの名前を呼び続けているのです。そして、あなたの在りし日を偲びつつ、現実となった永別の悲しみに痛恨の涙を流すのみであります。

まして、不慮の事態により、杖とも柱とも頼む、あなたを失われた奥様を始め肉親の皆様のご悲歎は察するに余りあり、お慰めする言葉もありません。

せめてもの救いは、あなたのお顔を涙ながらに礼拝した時、そこに一点の苦痛の色も見えず安らかな眠りについておられたことでした。そして、また、救急車に同乗しておられた奥様に手をさし伸べて最後の別れをされ、間もなく意識を失われたと聞いたことであります。

瀬上さん、思えば、あなたと初めてお会いしたのは昭和十四年、あなたは旧制第五高等学校三

年に在学中でした。それから四十年間、本当に長い交遊が続ききました。然も、私たちは一つの信念、信仰により心から結ばれた同信の友でありました。ともに祖国日本の永久の存続と発展―神州不滅を確信し、身命を捧げて祖国を守らむと誓い合ったのです。また、あなたは私より年長でもあり、常に畏敬し信愛する先輩でありました。私は多くの優れた同信の友に恵まれました。然し、あなた程長い歲月の間、学生時代そのままに青春期の純粹な心情を一貫して持ち続けた友は無かったと思います。特に敗戦後の精神的荒廢と動乱期にあつて、私は混迷の淵に沈滞してしました。その時も、あなたは学生時代と全く変らぬ心情を持って私を教え導いてくださいました。あなたが居られることが、私の大きな精神的支柱でありました。

特に、何にもまして昭和三十一年戦後始めて九州の大学生を集めて合同合宿を開催した時の喜びを忘れることができません。この合宿は、瀬上さん、偏に岩をも通す、あなたの念力により実現したのです。私たちは、あなたの強靱な意志力と熱烈な行動力に触発されて奮起したのです。その後合宿は継続して開催され戦前と同じく全国的規模に拡大されました。そして合宿再開が契機となり、私たちが学生時代先輩から教え導かれて進んできた道統を、戦後の青年達に伝えるべく結成した国民文化研究会の、あなたは常務理事として、会の運営と後輩の指導に率先して尽力

されました。

「ますらをのあまた出でてにぎはしく合宿するは心楽しき」

瀬上さん、あなたが昨年のお合同合宿で作られた歌です。あなたは自らの栄達を願わず、ただ一筋に誠実に自らの信念を貫徹された真の日本男児「ますらを」でした。それ故に、あなたは若い「ますらを」を育成することを無上の喜びとされました。特に熊本大学の学内団体「信和会」を中心として今日まで続いている学生寮「時習義塾」の創設と塾生の育成に傾注された、あなたの限り無き情熱と不断の献身を忘れることはできません。

瀬上さん、ご覧下さい。ここに参列している「時習義塾」にかつて学び或は現在学びつつある多くの後輩やその友人達の姿を。これらの後輩達は、あなたを師と仰ぎ、あなたを追慕して集りました。そして今あなたの思い出を、その教えを回想しているのです。

瀬上さん、あなたの信念に満ちた鋭い眼光。瘦身にこもる峻烈な気迫。あなたから叱咤激励された思い出も数多くあります。同時に、あなたはやさしい先輩でした。「合宿するは心楽しき」と、あなたは歌っておられます。楽しい時嬉しい時のあなたの笑顔が今も鮮明に浮んできます。本当に無垢な童心溢れる笑顔でした。そして温い愛情が自然に伝わり、心が和む思いがしたこと

も今は悲しい思い出となりました。あなたの思い出は尽きることもなく続きます。

名残りは尽きません。然し、愈々永別の時が近まりました。瀬上さん、本当に長い間お世話になりました。お礼の言葉もありません。

瀬上さん「生るるも身まかるも つながるために わかれる」ことは私たちの共通した確信でした。あなたは身まかれましたが、その魂は、私たちの共通の心の故里、永久に消えざる祖国の生命、祖国の胸に帰られたのです。あなたの遺志は、ありませし日の強烈な印象とともに若い後輩達の心に留まり、永遠に言い継ぎ語り継がれることを信じて疑いません。

現世では休むこと無く努め励み給いし瀬上さん、あなたの愛する三人の御子息も立派に生長されました。どうか安らかにお眠り下さい。そして、願わくばご遺族と私どもの行末を見守り給いで、み魂のご加護を賜らむことを心より御願いたします。

瀬上さん さようなら

合掌

昭和五十四年九月二十二日

友人代表 加藤敏治

(国民文化研究会理事、八代市助役)

弔 辞

(松田 信一郎)

先生、来年の夏には、また御元気に御目にかゝれますものと楽しみにして居りましたのに。それはもう叶わぬことなのですね。

余りにも突然で、余りにも悲しい御別れが残念でなりません。

いつも優しく私達青年を御導き下さいました先生にこんなにも早く御別れのことばを申し上げなければならぬのでしょうか。

先生に初めて御会いましたのは、昭和四十三年八月の霧島での「学生青年合宿教室」でしたね。以来、先生を生涯の師と御慕い申し上げて参りました。先生に御会い出来ましたことを幾たび有難く思ってきたことでしょう。先生はいつも全身全霊まごころから私達に接して下さいました。私たちの愚かな話にも深く耳を傾けて聴いて下さいました。そして、いつも諄々と御諭しになりました。先生は正しく、私達を教えて育てて下さいました。

あの大学紛争の激しかった頃のことか思い起こされます。ストライキ、学内封鎖と日増しに荒廃する大学を憂慮され、その正常化のため様々に力を尽されました。その先生に接するうち、私

達は、大学に学びながらたゞ傍観することがいかに恥ずべきことであるかを思い知ったのです。やがて、大学が正常化し始めた時、先生は心からそれを喜ばれました。

先生の喜びは、いつもそのように自分をはるかに超えたものに連なるものでした。先生が最も大切にされたものは、誠心まごころと信心しんじんと慈悲じいの心とでありました。先生と御話していると、心が洗われ、新たな力が湧いて来るような気持ちになりました。心から日本を思い、その素晴らしさを次代の若者に伝えることを念願とされてこられた先生、先生の御志を受けつぐには余りに微力な私達ですが、力を合せて頑張ります。

お別れの時にあたり、先生が終生尊敬して居られた吉田松陰の弟子に贈った言葉を読ませて下さい。

「杉蔵往け。月白く、風清し、飄然馬に上りて三百程、十数日。酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事、誠に急なり、然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かすところにあらず。それただ積誠これを動かす、然る後動くあるのみ。」

かぎりなく、かなしくさびしい先生との御別れですが、どうか安らかに御眠り下さい。

瀬上先生、さようなら。

昭和五十四年九月二十二日

熊本大学・信和会代表 松田 信一郎

(昭和四十八年工学部卒業 現、千代田コンサルタント勤務)

弔 辞

(柏原省三)

故瀬上安正先生の御霊前にぬかずき、熊本女子商業高等学校の教職員一同を代表致しまして、謹んで最後のお別れの詞を申し述べさせていただきます。

一昨日の夕刻のことでした。先生の奥様から、先生が交通事故の為、日赤病院に入院、意識不明である旨のお電話がありました。早速教頭と共に駆けつけましたが、先生の御容態は予想以上に重く、遂に病院でお別れ致さねばならぬこととなってしまいました。翌朝、先生の御不幸を知った職員達も、日頃、先生の慎重な御運転振りを熟知しておりますだけに、まさか先生が交通事故でお亡くなりになるとはと、口々に驚き、かつ嘆息しておりました。私自身も、前日には先生から最近二、三歩歩き始められたお孫さんの模様や、御次男の挙式のお話しやら承ってお別れ

したばかりです。現在こうして弔辞を認めていまでも、あの折の先生の笑顔がまざまざと睨に浮かんで来て、今更のように人生の無常が痛感されてなりません。思いもかけない突然の御不幸、奥様のお嘆き、そして死目にもお会いになることのできなかったお子様方のお悲しみ、いかばかりかと御推察申し上げます。心からお悔み申し上げます。

思えば、先生が二十数年勤められた県庁を御退職になり、本校にお見えになったのは、正式に言えば五十一年七月でございました。そうそう、あの時は部長さんと次長さんがわざわざ来校されて、口を極めての推薦でございました。畑違いとは言え、余生を教育に捧げたいと先生のたつての御希望であり、また、かねがね大学生を中心とした研究会のお世話をなさっていた関係もあって、教育に関しては一家の見識を具えておられました。最初の間こそ多少の不馴れも感ぜられた様子ですが、お馴れになるに従って、新しい職場に自分は生甲斐を感じると常に述懐されていきました。文字通り、温厚篤実なお人柄は熱心な御指導と相俟って、生徒も随分懐いていたように見受けれます。論より証拠、昨日も今日も、先生のお亡くなりになったことを知った生徒がお供えした菊の花が、今は主なき机上に馥郁と香を放っていました。校務分掌面では奨学生係を担当して頂きましたが、綿密な御計画、周到な事務の遂行は、全く敬服に価するものでありました。さ

らに、先生には、五階ホールの清掃の監督もして頂きました。建築後十数年を経過していますので、窓の開閉も思うに任せぬようになっていましたが、先生は誰にも知らせることなく、約一週間いろいろ苦心していじり回された結果、どうにか自由に開閉できるように仕上げられました。以て、黙々と仕事にうちこみ、しかも、己の功を誇ることもない先生の為人を語る好個のエピソードになるかと思えます。先生は糖尿病のため、暫く体調をこわされましたが、最近はずっかり元気になられ、これからまだまだ活躍して頂けると期待していた矢先の御急逝、全く惜しんでも余りある人を亡くしたと残念でたまりません。御在職僅に三年余りでしたが、先生には学校のため、生徒のため、精一杯努力して頂きました。学校長として心からお礼を申し上げます。先生どうもありがとうございました。

どうか安らかにお眠り下さい。

昭和五十四年九月二十二日

熊本女子商業高等学校長 柏原省三

弔 辞

(堤 千 春)

先生、こんな形でお別れを述べようとは、夢にも思っておりませんでした。二十日の朝のホームルームで、突然の先生の御逝去を知らされ、私も、みんなもびっくりして、「えーっ」と言ったりでした。

今でもあのお優しい笑顔で、生物のお話が聞こえてきそうな気がしてなりません。つい先日、教室にハチが入って来て、みんな驚いてハチの方ばかり見て笑っていたら、先生も御一緒に笑って、「ミツバチのダンス」の復習をさり気なくして下さいました。

決して真面目な生徒ばかりではない私達ですが、半年間、先生の御教育に接して、大勢のファンができています。それは、生物のお授業ばかりでなく、時には教科から離れて、豊かな御体験の数々を語って下さいました。ある時は科学の進歩について、またある時は読書量の少ない私達が、少しでも本に目を向けるようにと、御自分の愛読書などよく紹介して下さいたりで、ますますみんなは先生の偉大さに魅かれていきました。

先生は「生命の連続性」について教えて下さいました。しかし、その先生はおいでになりませ

ん。教科書やノートを開くたびに、先生のお声が、教わったことが、ありありと思い起こされま
す。先生のみ教えをこれからに生かすことが、生命の連続ということになるのだと存じます。私
たちが先生から学んだことは、言葉では言い表わせない程大きなものでした。これからは、私た
ちも今までのことを反省して、生物を一生懸命に学びます。

先生も遠くから、どうぞ、私達をお導き下さい。

そして、どうぞ安らかにお眠り下さい。

さようなら

昭和五十四年九月二十二日

生徒代表 情報科二年 堤 千 春

献
詠

夜久正雄

思ひきや弟のごとく思ひきし君がにはかに世を去らむとは

若きより心かたみにうちあけて語りし友は先逝きしとふ

国文研活動の基礎作りしと友の告ぐるに嘆きはまさる

つねのごと吾振舞へど君思ふ哀しみいよよ深くなるかも

己が身はおきてもまづは国のこと憂ひしみ心つがざらめやも

宝辺正久

まがごとを聞きて明けぬる朝けにも心は萎えつ君を思ひて

妹の君に謝しつゝ逝けりと友が語る電話を聞けば泣かざらめやも

駅のホームにわが手を握り集ひ興すと君言ひ出でし二十四年前

東洋と西洋の文明を融化すべき日本を説きて君倦まざりし

肥後なまりにをたけぶ時も年老いてもいふ時もつねさやけかりし

熊本の若き友らを愛でましゝ君のつどひやたふとかりける

東京のみたままつりのけふの日に君とぶらふとたが思ひけむ

日の本のとはのいのちに帰りゆきしと偲べどもあゝ君はやなき

徳 永 正 巳

松陰の死を憶ひつつ常のごとますらをのこは死に給ひけむ

ますらをの誠つくせし生きぶりを語りゆかなむ後の世までも

まごころを貫き生きしますらをのみ靈安かれとただ祈るなり

山 田 輝 彦

火の国のをのこの意気地貫きて果てたまひしかあはれますらを

一すちを踏みて悔いなき生涯と思へど悲し君まさぬ世は

ひたなげきなげけど生きてうつし世に再びあはむすべなしいまは

小柳陽太郎

何といふまがごとかあゝ思はぬにみいのちたちまちはたまひぬとふ
夢かとも思へどうつゝ君とはに去りたまひにきといふはまことか
うつし世のさだめかなしもみとりする時もあらずてうせ給ひにき
かくばかりかなしき別れのうつし世のうつゝにありといかでおもはむ
みひつぎの前のうつしゑにこやかにおもわは今もうつゝと思ふに
あふれくるおもひのまゝに語りまししみことば今も耳に残れど
一人出家すれば魔宮皆動ずといふことばさながら生きたまひにき
黄菊白菊あふるゝごとくみひつぎのかたへしみゝに咲くがかなしき
朝な夕なたゝずみ給ふみ姿をしのびまつるも君が門辺に
門のべの草木かなしもいかばかり心そゝぎて見たまひにけむ
思はざるみしらせうけて残りたる吾はも悲しせむすべしらず

加納祐五

まがごとくにうせましゝ御魂とこしへにこれの御国を守らせたまへ

青 砥 宏 一

いかならむまがごとなるか思はざることのおこりてみまかりましとは
庭に鳴く虫の音聞きつ悲しもよ亡き大人のこと偲びてあれば

この夏にことも言はずて別れたることのくやしもかくあらむとは
日本の道の正道あまがけりまもらせたまへとたゞに祈るも

島 田 好 衛

亡き友の御魂祭りのけふの日に君が葬りに会ふが悲しき

三 浦 貞 蔵

はからずも君逝きましゝとふみしらせに驚きしばしいはむすべなし
若かりしむかしのおもかげ偲びつゝ涙あふれきたへがたきかも^{てぬ}

もろともに道をもとめてくらしけるころなつかしも君しのびつゝ
別れてゆ相見むときなくすぐせども君を憶ひだすこともありけり
いつの日か相見まつらむとねがひしをいまはすべなし君逝きまして

令夫人に

背の君のみあととぶらひ悲しみにたへつゝ生きませとひた祈るなり

先つ月同じき部屋に寝起きせし君はにはかにたふれ給ひしといふ

おだやかに語りましけるみ姿の今もうつゝに浮び来るかも

そのかみに信濃に集ひ雄叫びし君が面わの忘れせぬかも

おろかなる我を導き給ひける君がみ心とはに忘れじ

火の国のますらたけをと皇国につくしましけるみいのちたふとし
一すぢのまこと貫きたふれましゝみたまはるかにをろがみまつる

小田村 四郎

熊本に瀬上在りと待みてし益良夫君は逝き給ひしか

思ひきや四十年近き交はりの斯く忽ちに断ち切れむとは

会ひまつる術絶えつれど斯の道を守りますらむ天翔りつつ

まことなる心の友のみまかりしこの哀しみのつきることなし

思はずも師はゆき給ひしか日の本の行く末思ひて生き給ひしに

霧島に別るゝ時にしっかりと握られし手のぬくもり忘れじ

秋の夜に虫の音かなし師の君のつひに神上がりまししと思へば

師の君のたゞひたむきに生き給ひし遺志受け継ぎて生きざらめやは

旅にある吾に家より電話ありと恐ろしき余感に胸とどろきぬ

関 正 臣

戸 田 義 雄

沢 部 寿 孫

長 内 俊 平

妻告ぐることは真事かといさきごろ別れこし大人みまかりまししと

下北のはたての町に來たりつゝ悲しき大人の知らせをぞ聞く

夜回りの鐘窓の外を過ぎゆけば大人を弔ふ鐘かと思ふ

菅平で班長さんたりしそれ以後は俊平さんと呼びてくれたり

その御声耳に残れどうつゝにはまた聞きまつるをえざる悲しさ

この道をたどりてゆかむと思ふにもしるべは大人としたひきしものを

したひまつる肥後の若きら天をうらみをらび泣くらむ声聞えくる

松吉基順

みまかりしと聞きて声なくこの夏の笑みし面輪の思ひうかびく

すべなくて君と過せしありし日々想ひうかべつゝをろがみまつる

末次祐司

肥後の国此の人ありと仰がるゝ雄々し益良夫神去りましき

朝永清之

思はざることの起りてみまかると聞くとかなしき夜半のたよりは
一筋を踏みてゆく他に道なしと詠みまし、御歌けさ拝したるに
うつつとは思へぬまゝに窓の外をみやれば夜空に星のかがやく
星空ゆうつそみのさまみそなはずと思へど悲し大人の旅立ち

三宅将之

慕ひこし人つぎつぎに神去りて今年の秋の虫の音淋しも

満崎安

ひたすらに心をこめて道説きし師の御姿のいまもうつつに
かぎりなきみくにのいのち心こめ説き語りたる師の君尊し
師の君の文や言葉をたよりして助け合ひつゝたゝかひゆかむ
みまかりし師の君偲べばあふれ出る涙すべなし人中にして

内田英賢

御教へを説かるる時の師の君の鋭きまなこ浮びくるかも

たたかひのはげしき日々も

たたかひの終りし後も

ひたすらにつとめたまひし

君にてありし

○

思はざる便り来りぬ秋に入りし長月二十日たそがれ近く

みずからの運転されし車にてまがごと起りしとふ悲しきしらせ

そのかみのものふのごとさはやかにをしくありし君がみ姿

ひとすちのみ志を貫きて君生きませり六十年あまり

つくしの友らのつどひの大き柱とゆるがぬみ姿しぬびまつるも

星野 貢

会ひ奉り幾日もたゝぬに御逝去の知らせ受けつつうつともなし
三十数年ぶり面会の喜びもつかの間現世去りましぬ
天に向け瀬上さんとおらびたしあまり急なるこのみしらせに

小林 国 男

あまりにも悲しきしらせに言もなし卒然として君逝き給ふ
敷島の道につらなる一筋の道ひたすらにすすみ給ひし
若き日の「新指導者」誌上の君が文に受けし感激今も忘れず
好まれし酒も絶ち切り年々の合宿に力をつくし給へり

岩 越 豊 雄

み国の行末をただに思ひてねむごろに教への道にいそしみ給ひし
会ふたびに笑みてみことばかけくれし師は逝きましぬこのうつし世を

日の本の教の正道とき給ふ師の御姿の今も現に

山内健生

とつぜんに師は逝きまして驚きの心たかぶり言の葉出で来ず

今林賢郁

深々と秘めたる思ひを静かなる口調しづかとともに説ひきし師はも

ありし日のことの種々思はれて秋空あふぎぬ痛む心に

大岡弘

もろともにむらがりいでと詠み給ひし師はなくなりぬと友は伝へ来ぬ

青山直幸

有りし日のおもかけしるく浮びきて逝き給ふとは信じられずも

友池仁暢

会ふたびに口ぶりを真似片岡の大人は師の君をあかず語りたり

折あらば片岡と共に訪ひて国の行方を尋ねむと思ひしも

人の世はかくなるものか師の君はいなづまのごとかむさりましぬ

吉田 哲太郎

師の君のみまかりますと友どちの告げしことばにたゞおどろきぬ

堀田 真澄

熊本の講演会にてお会ひせしころのみ姿思ひ出でらる

あたらしき友に向かひてひたぶるに語りたまへるみ姿尊し

坂口 秀俊

若きらをやさしくもきびしくみちびかれし師の君いまやみまかり給ひぬ

占部 賢志

思はずもいのちささげといふ言葉湧きあがりきぬかなしきしらせに

竹下 鉄郎

師の君のみまかり給ひて二日して師の御文の悲しく届きぬ

電話にてお願ひしたるふとどきに御文給ひしみ姿畏し

申し込み送りますてふみ言葉のおはりとなりしは夢だに思へず

師の君の御文を読めば在りし日の清きお声を聴くこちする

ひたすらに学びの道を示されし尊きお姿永久に忘れじ

黒岩真一

熊本に大人のいますと思ひをりしをかく突然になくならるゝとは

熊本で友らをみちびきくだされし大人の訃報をいたみまつりぬ

九大大学院 山根 清

合宿の基きづかれし師の君の訃報を聞きぬ友の口より

健やかに霧島山に集はれしことは一月ばかり前なる

師の君の後に続きて一すぢの道を進まむ生くるかぎりは

九大四年 奈良崎 修二

師の君の思ひもかけぬ訃にあへどなほうつつとは思ひ得ずあり

霧島にて友らと共に師の君に導びかれつゝ学びしものを

松陰の死にゆく様を涙ながらに語られし御姿忘れ得ざるも

合宿の最後の宴にて同班の友等のことを語り合ひしに

師の君の「よき友なりし」と語られし御声ぞさやによみがへりくる

去年の夏友を失ひ今はまた友の慕ひし師をなくすとは

九大四年 加藤 多夏詩

若きらに御国のいのちさづけむとつとめ来られし大人逝き給ふ

師の君の護り来られし日の本の国のいのちは我が胸に生く

福大四年 杉山 直樹

ひとりまた尊かりし師の君のみまかり給ふは口惜しともふ

九大四年 久米 秀俊

亡くなりぬと知らせ伝ふる友の声はかすかにふるへてとだへがちなり

おだやかな笑みをたゝへし大人の面ただ浮かび来てことば出でずも

去年の夏亡せにし友を慰むる追悼文集出来て間もなきに

九大三年 笠 晋一郎

三十年前学びの集ひ九州に起こされし君逝き給ひぬか

忙しき仕事のいとまに御友らと起こされにけりこれの集ひを

去年の夏逝きし御友らもろともに見守り給へ我らが集ひを

九大三年 長 沢 一 成

そのかみにたふときつどひ始めたまひし大人みまかりしとのしらせとどきぬ

かむあがりまししとふしらせうけ現実のことは信じられず

去年の夏わが手をとりにて笑み給ひすがし御顔の目に浮びくる

若きらを前に御国のあやふきを我ことのごと語り給ひし

鹿大三年 姫 野 政 直

師の君の亡くなられしてふ連絡にたゞ驚きて言葉いで来ず

去年の夏直かに学びし合宿の元気な御姿思ひ起さる

なかなか逝きたまひしとは信じられず今日の葬儀をむかへけるなり

熊大二年 古井博明

御柩のわきには明治天皇御集供へてありて涙わき来る

すめろぎのまけのまにまに生きましし清き御命思ふも悲し

明治天皇御集胸にいだきて旅立たるゝ師の御心をうけつがざらめや

九大三年 弓立忠弘

師の君の自動車の事故で亡くなれりとふ突然の報せとどきたりけり

霧島の夏合宿に若々しき健き御姿あらはし給ひしに

「第二十五回（雲仙）合宿教室」において
故人を偲びて詠まれた歌より

山田輝彦

いづくにか今もいまさむ心地して瀬上大人を偲びやまずも
去年の夏霧島の地にあひまつり別れし君よいまはいづくに
さかしだちもの言ふわれをうなづきて見守りましゝ面輪忘れじ
四百を越えしつどひよ君いまも見守りますか在りし日のごと

加藤敏治

去年までの集ひにつねにありませし君がみ姿見えず悲しも
世を嘆き正しき道をときませし力こもれる君が目見はも
現し世に君が留めし雄心を受け継ぎゆかむ残りし我は

長内俊平

一年に一度の会あひを待ちまあさず瀬上さんは逝きたまひけり

壇上に立ちたる若き熊本の友はうたひぬ大人のみ歌を

ありましし日のくさぐさのよみがへり自づと涙のあふれくるかな

小柳陽太郎

若き友の語りゆくまゝになつかしき君がみ姿しるくうかびく

にこやかかゝるまひなつかし今もなほ生きてゐますがにありありと見ゆ

年毎に合宿の地にあひまつりし君がみ姿見むすべもなき

君がみたまあまかけりこよ全国のみ友らあまたここにつどへり

村山寿彦

去年の夏の合宿をへて師の君と帰りしことの思ひ出さるる

去年の夏列車の中で語らひし師の面影の眼に浮び来ぬ

中園俊郎

高千穂の河原で我に近づきて合宿のよろこび語りし師はも

折田豊生

この集ひを生み出したまひし師の君の御姿見えぬが悲しかりけり
ことしまたあまた集ひし若きらを見まさばいかにか喜びまさむ

高岡正人

寄り集ふ友らの数の少きをみ心痛めたまひし師はも

ありましし日の師の君の祈られしあまた集へる合宿となりぬ

熊本の友らもあまた集ひ来れば師のみたまはよろこびますらむ

竹下鉄郎

ひとすちに学びの道を示されし御姿しぬべば畏かりけり

師の君のみのちつぎて我もまた学びの道に連りて生きむ

あとがき (一)

— 瀬上さんの四十年の御交友を偲びつつ、主としてはじめの二十年を —

熊本県八代市助役
国民文化研究会・常務理事 加藤 敏治

瀬上安正さんと私との交友は、四十年ほど前の昭和十四年に始まり、戦争による一時中断を経て、お亡くなりになるまで続きました。長い間のご厚誼を得ましたことを、いま感慨深く回想させていただいております。

昭和十四年といえば、瀬上さんが旧制第五高等学校の三年生の時であり、私は旧制山口高商の一年生でした。その年の七月に、「東大文化科学研究会」が、神奈川県高座郡原当麻村はらだいまの「無量光寺」というお寺で開かれた全国的な学生合宿「全国学生夏季合同合宿」に、ともに参加したのが、瀬上さんのご昵懇になる契機でありました。この主催者「東大文化科学研究会」は、後の「日本学生協会」に発展した団体であり、戦後は「国民文化研究会」（瀬上さんと共に私も常務理事として参加）に継承されて今日に至っているものです。原当麻の合宿では瀬上さんと私とは

所属した班が別でしたので、直接お話を聞く機会はありませんでした。私達の精神的交流が本当に始まったのは、その年の十二月末日に、佐賀市内の「竜泰寺」というお寺で開かれた旧制佐賀高等学校同信会の合宿に、ご一緒に参加させていたゞいた時からといえるかと思えます。昭和十四年の後半わずか半年の間に、さきの「全国学生夏季合同合宿」が導火線になって旧制高等学校や高専校の学内に、次々に「一高昭信会」を源流とした同じような学内団体が結成されました。山口高商では「ス道会」が、五高では、従前からの伝統を持つ「東光会」が同じ志の団体ということで、連絡し合う団体となりました。そして冬休みになってから福岡市百道にもぢあった「青年道場」(戦後は「社会教育会館」と改名され、奇しくもこの同じ場所で「国民文化研究会」主催の第二回合宿教室が昭和三十二年の夏に開かれることにもなりました)での他の団体が主催した合宿に、五高東光会や佐高同信会などの何人かの仲間が参加し、地域的な交流が開始されました。最初は佐賀まで行く予定はありませんでしたが、福岡での合宿が終った後、そのまま別れてしまうのが名残惜しくなって、佐高の友の勧めに従って、さきの「竜泰寺」での、合宿にも、参加することになったのであります。このように、他校の学生たちとも「同信の友」ということだけで、初めてあった友とも、ごく自然に合流する道が拓かれていきました。お互いに何の気兼ねもなく集っ

て合宿を営む学生たちの間には、学校差などの隔りは全く消え去って、祖国日本の現状と将来への深い憂念と学生としての強い責務が語り合われる場となりました。集った学生たちの中には佐高の大津留 温さん（元建設省事務次官）古賀秀男さん（元佐賀県立博物館長）江頭俊一さん（のち東大在学中、病死）百武禮之さん（のち、東大、戦死）らの佐高勢多数のほか、五高からは瀬上安正さん、国学院の手塚顕一さん（のち、戦死）山口高商からは一條浩通さん（のち、戦死）らがおられました。また、佐高教授高橋鴻助先生のご指導も戴き、東京から駆けつけてくださった一高、東大出身の夜久正雄先輩（現、亜細亜大学教授）のご助言をいただいで、楽しく意気あがる研鑽ができました。私は、この合宿で初めて瀬上さんと起居をともにしましたが、瀬上さんの言々句々からほとぼしり出る強烈な憂国の情熱には圧倒されましたし、また瀬上さんが祖国日本へ寄せられる篤信については、心から畏敬の念を抱かずにはおられませんでした。

戦前瀬上さんとは度々起居をともにしたように思っておりますが、実はこの時だけに過ぎなかったのであります。然し、その後、各種会合の折など、例えば私達の学生時代にはよく東京で全国の大学、高等学校、高専校の学生たちの代表者会議が開かれましたので、そのような時には学生リーダーであられた瀬上さんから、いつも厳しい叱咤激励をいたゞいた思い出が残っており

ます。瀬上さんの精悍な風采、颯爽とした動作、熱情溢れる弁論には、いつも注目し傾聴させられたものでした。

私が九大に進学した昭和十七年には、瀬上さんは東大農学部を卒業されて、ご就職のあとセレベス島に赴任されました。以後終戦後までの五・六年間はお目にかかることなく過しました。瀬上さんとは、時間的には、終戦後遙かに長い「おつきあい」をいたゞきました。しかしそれでも、瀬上さんのご印象は、むしろ学生時代の方が、強く鮮明に脳裡に刻まれているように思えるのです。それは、戦後の日本が精神的思想的に荒廢の道を進む中であつても最後まで、瀬上さんが、かつての学生時代そのまゝに、その純粹さと情熱を一貫して持ち続けられたからであることを、いま改めて追憶しております。

終戦後、外地から戻られた瀬上さんと再会しましたのは、昭和二十三年頃であつたかと思ひます。当時瀬上さんは確か三菱財閥系の木材会社に籍を置いておられました。占領軍命令により会社は解散させられ、分散したいくつかの小規模な別会社ができ、その一つが瀬上さんの勤務先になっておりました。ある日、熊本駅近くの事務所にお訪ねして、学生時代そのままの瀬上さんと、何年ぶりかの再会となつたのでした。その後、大分県の日田市に移住されるなどのことがあ

って、県庁の林野関係のポストに奉職されるまでは、大変な苦難の時代が続いておられたようでした。しかし、そうした間でも瀬上さんは、戦死、戦病死された学生時代からの同志諸君の「慰霊祭」には欠かさず参列しておられました。

終戦後の私達の会合は慰霊祭から始まりました。「慰霊祭」といえば、私たちには忘れられない先き逝いた方々が多くありますが、中でも特に終戦直後の八月二十日払暁、福岡市郊外の油山で、壮烈な自刃を遂げられた海軍少尉・寺尾博之さん（高知高校・東大）のことは、常に念頭を離れず、今日に至っております。寺尾さんは「魂魄トコシヘニ祖国ニ留メテ玉体ヲ守護シ奉ラム」と祈願されて、上司と共に自らの生命を絶たれたのであります。私たちは、そのご命日には、油山の山上にある「正覚寺」の観音堂（寺尾さんが最後の夜を過した所でありました）に一泊して、懇ろにその霊を弔うことを毎年の大切な行事としていたのです。当時はバス停から石高道を三十分近くも汗を拭きながら登るほかに、行くことができませんでした。その道の周囲には松・杉等の樹木が茂り、蟬時雨が降るように聞えておりました。観音堂に着くと、夜を徹して語りあい、早朝そろって自刃の地に参拝したのであります。この慰霊祭が執行された時は、一同の年長でもあり、自然に瀬上さんがリーダーでありました。このような「慰霊祭」をいとなむあい

だも、出る話題は個人生活や家庭での経済的な苦しさなどのことは、殆んど語られることはありませんでした。語られるのは亡き友らの在りし日々のすばらしい挙措と確信あふれる言動であり、不拔の志操への追慕でありました。同時に祖国日本のこれからの進路についての憂慮でありました。この頃は慰霊祭が心の支えであり、生きる力源でありました。

こうして二・三年が経過した昭和二十五年に川井修治さん（現鹿兒島大学教授）が鹿兒島に講師として赴任され、私達の会合では「慰霊祭」の執行にとどまらず、若い学生たちへの素志伝達の間をつくろうではないか、という機運が芽生えてきたのであります。

そのための準備とでも申しましょうか、とにかく終戦後職業も別れ、さまざまな経験を重ねた私達の心を整理するとともに、合宿開催の計画を練ることになりました。昭和二十八年八月二泊三日間、十名の小合宿を山口県の大道という海岸で持つことができました。大道は、現在は防府市に合併されていますが、当時は瀬戸内海に臨んだ一漁村でありました。ここは、九州・中国・四国の亡き友らをはじめ同信の友が学生時代良く利用した旅館も残っており、思い出の地でありました。次いで昭和二十九年八月に八代市の「春光寺」というお寺での合宿には十六名が集まりました。翌昭和三十年にも八代市の「法燈寺」で十数名の合宿があったりして、これらの集積の上

に生れたのが、今の社団法人「国民文化研究会」の前身の同名の会でありました。創立は昭和三十一年一月であり、瀬上さんのご自宅が事務所となり、瀬上安正さんと川井修治さんが実質的な創立リーダーであり、推進リーダーでもありました。お二人が居られなかったならば、同年八月に鹿児島県霧島で開催された「全九州学生青年合同合宿」（「国民文化研究会」第一回合宿教室）は実現しなかったとは、衆目の一致するところでもあります。私が身辺のことで逡巡し勝ちでありました当時を思い返しますと、私は瀬上さんの執念ともいうべき情熱に圧倒されて、ともに立ち上ったのが偽らぬ心境でありました。私に取りましても、瀬上さんは、かけがえのない先輩であられたのです。

この「合宿教室」は今年で二十五年間続きました。四分の一世紀の足跡でもあります。殊にその運営内容が「先に生ぜんしぜんものは、のちを導き」の言葉通り、いささか年上の青年が、少し年下の青年を指導する、という当初からの基本姿勢が出来ておりますことは、私達の志を継承する後輩達が相続体制を作ってくれているお蔭であります。これも全て亡き友らのみ霊の加護と感謝せざるを得ません。その中に新たに瀬上安正さんのみ霊も帰入されたのであります。友らのみ魂は不滅無窮の光明となって前途を照しつつづけていてくださるに違いない、そう思わずにはおられない

いのです。終りに、生前、瀬上さんと一緒に良く朗詠した寺尾博之さんの遺歌を、ご霊前に捧げてお別れいたします。

倒れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

「付記」

文中に戦死・病死として名前が出ておられる、亡き友らの遺歌・遺文は、『いのち・ささげて』『続いのち・ささげて』（国民文化研究会発行）に集録されておりますし、また「一高昭信会」にはじまって「東大文化科学研究会」「日本学生協会」、そして「国民文化研究会」に至る精神伝統の系譜につきましては、本会理事長の小田村寅二郎氏（亜細亜大学教授）の著書『昭和史に刻むわれらが道統』（日本教文社刊）に詳述されております。故人のありし日のご生涯を詳しくご理解下さるためにも、右三冊の御披見をいたゞければ幸いです。

あとがき (二)

— 瀬上さんとの三十年の御交友を偲びつつ、主としてあとの二十年を —

熊本市収入役
国民文化研究会・常務理事 徳 永 正 巳

昭和五十四年九月十九日、畏友瀬上安正さんは突如此の世を去られました。そのお顔は正に眠るように、まことに静かな安らかなご表情でした。何もかもを、やりかけたまゝでの突然の交通事故死であられただけに、そのお顔を拝したときには、『後は頼んだよ』と言われているような思いがして、私は呆然となっていました。亡くなられた翌々日の九月二十一日に、熊本市京町の光永寺でお葬式が営まれましたが、数多くの参列者の中には、遠く東京や北陸からの人たちを含めて数十人の同信の友らのお顔が見られましたので、そのあと故人を偲ぶ会を持ちました。その席上、「是非熊本の片岡健君と北島照明君に中心になっていたゞいて、故人の遺稿集を編集してくださらぬか」という提案があり満場の賛成が得られました。

その後、片岡・北島両君はよくその期待に応えてくださって、高岡・坂本・中園・白浜・田之

上・折田・窪・鏝の諸君等と共に毎月数回もの会合を重ねられ、散逸していた故人の書簡、小論文・和歌などを集め、整理に取り組まれました。その労は正に多とすべきものでありまして、故人の生前に直接の教導を受けられたこれらの諸君の献身的な努力には、傍から見えておりましても、心打たれるものがありました。これらの諸君はその間に、お互いの思想練磨を続けられると共に、多くの後輩の育成にも熱心な努力を続けておられました。それを知りまして、私は、故人亡き後の熊本地区での相続体制を心配していましたが、自ら氷解し、改めて瀬上さんの足跡の素晴らしさに今更のように感歎させられた次第でありました。生前の瀬上さんは、飄々として風采の上らない人でしたが、何時でも何処でも、接する相手に、つねに誠心を傾けて話をされる人であり、また真実を吐露して共に悲しみ、共に喜び、共に国を憂い、共にその弥栄を念じあう、というお人でありました。その遺された訓えは正にその生きざまに由来することでもあったと思います。決して「こうしろ」と言った四角ばった理窟や教訓が後輩の心をとらえたのではなく、ここに編まれた遺稿もこれといってまとまった論文などではなく、折にふれての胸の憶いをつづられたものであります。編集に従事された諸君は、遺稿を整理しながら、ふと明治天皇の御製の中から「樹間花」と題された御製にふれ、その御歌の中の一節にある「こがくれながら散りや果

「つらむ桜花」のお言葉に瀬上さんのお人柄を彷彿とお偲びし、以て本書の題名にと思うようになったことです。また、故人は「名も無き民の心」のままに生涯を生きた恋闕の士でもあられました。故三井甲之先生の遺歌にある「ますらをの悲しきいのち積み重ね積み重ねまる大和島根を」のお歌を改めて心に思い出しつゝ、残された我々も頑張つて生きつづけたいと思います。

顧ますと、昭和三十年頃、故人と二人で自転車のペダルを踏みながら、今は亡き当時の熊本商科大学理事長高橋守雄先生（元熊本市長・熊本市名誉市民）や、当時の熊本市長坂口主税先生をはじめ数多くの在熊の志ある方々を、奉賀帖を持つてお訪ねし、「青年学生合宿教室」の資金集めをして歩いて以来二十五年も経ちました。今年も数人の同志と乞食こじきの行をする時期になりましたが、毎年その行を共にした瀬上さんはもはや居られません。若い頃の瀬上さんは時と所とを問わず、誰彼の別なく、ひたすら慨世の言を吐いて、一步も譲らなかつた人でした。談論風発深更に及び、酒も痛飲して止みませんでした。胃の切除手術を受けてからは、大好な酒も絶ち、県庁を退職する頃からは煙草もおやめにされました。それと併行するかのようによ、お顔付きも、次第に往年の壮士型から超脱し、円満な好々爺的教育者風に成長して行かれたように思われました。然し炯々たる眼光とその憂国の至情は、一生を貫いて終始変ることにはなかつたのです。徒ら

に、他人の非難をするなどの事はありませんでしたが、世のまがごとくに対しては断乎として立ち向かわれ、熊本県教育界の刷新運動、熊本大学学園紛争対策等に果たされた陰の功績は、実に偉大なものがあつたと思います。

瀬上さんは、私にとりましては、旧制第五高等学校の先輩に当るのですが、私がお付き合いいただいたのは、私の学徒兵時代の戦友で国民文化研究会創立者の一人であられる鹿児島大学教授川井修治さんのご紹介によるものであります。瀬上さんのご長男一誠君の結婚式には、その川井さんが仲人の役をされ、私も参列させていただきました。また、昨年十一月に予定され、それを楽しみにしておられましたご次男三貫君のご結婚式が年を改めて今春挙行され、居鶴子未亡人のおはからいでそれにも私は参列させていただき御祝辞を申し上げる機会を与えられもいたしましたので、ご縁はご子息にまで続けさせていたゞいていくこととなります。

此の遺稿集の編集は、以上のように国民文化研究会で故人から教導をうけた若い方々によってなされましたので、或はご親族や竹馬の友や御同窓の方々、職域でのお付き合いの方々からごらんになられますと、御意に副わないものとなったかも知れません。どうかご寛恕いただきたいと存じます。しかし故人の遺影は今もなお、熊本大学信和会の寮「時習義塾」に掲げられ、後輩諸

君の勉学の姿を見守ってください。安らかなご冥福を祈りながらこの「あとがき」の筆を擱かせていただきます。

編集後記

本書刊行の企画を立てましてから一年有余を経まして、いまようやく上梓の運びとなり編集委員一同はっとしているところです。去る九月（昭和五十五年）の一周忌には、ぜひとも先生のご霊前に捧げたいと念願しておりましたが、こうした編集には全く始めての者ばかりの集まりでしたので、要領を得ず、ついに今日に至ってしまいました。その間、皆様方からは種々の御励ましをはじめ、有益な御助言のほか、貴重な御賛助を賜わりまして、まことにありがとうございます。ここに改めて厚く御礼申し上げます。

表題を『樹間の花』とさせていただきますました経緯につきましては、「あとがき^(二)」で徳永正巳先生（熊本市・収入役）がご紹介下さっていますので、ここでは省略させていただきます。編集作業を進めていくうちに、何か瀬上先生のお人柄、ご生涯をお偲びできるような題名を、と考えまして、このような題名にさせていただきました。

編集に携わりました私どもは、二十歳台から三十歳台の者たちで、出身大学、職業さまざまでありましたが、或る者は学生時代から或る者は社会人となりましたから、瀬上先生の心からの御

指導にあずかった者たちです。昨年（昭和五十四年）の九月十九日に、先生が突如交通事故で急逝なされた、とお聞きしました時にはみな、ただ茫然自失し、本当にかけがえのない方が去られてしまったのだ、と繰り返し思ったことでした。

先生のご遺稿は、私どもにとりましては、『国民同胞（国民文化研究会・機関誌）』に掲載されたもの以外は、ほとんど存じ上げずにおりましたが、編集作業を進めるにつれ、ご自宅には三十数年に及ぶノート・メモ類が保管されており、その時々々の所感・短歌・投稿下書・書簡下書き・祝辞・弔辞下書き等々、ことこまかに記されており、改めて先生の精神生活の一端を如実に偲ばせていただきました。また、御専門の林業関係についても、多数の原稿下書きが残されており、その殆んどが県庁発行の『熊本の林業』に掲載されていることも分つてまいりました。先生の御生前には、私どもは折につけ教育、思想、政治に亘つての幅広い御教示をいただきましたが、林業についてはその専門性の故かあまり承ることはありませんでした。本書の冒頭に「論稿一」としてまとめさせていただきました諸論稿は、林業を通じての警世の論であることに改めて驚かされると共に、まことに新鮮な思いが致した次第です。もとより私どもは林業に関する専門的なことは分かりませんので、ここにまとめさせていただいたもの以外にも、或いは御専門の方から見

られれば、捨てがたい論稿が脱落してしまっているかも知れず、その点だけは今もなお気のかかるところであります。

最後になりましたが、ご葬儀のあとまもなく、私どもがご遺稿の編集を勝手ながら申し出ましたところ、奥様をはじめご家族の方々から早速にご快諾をいただき大変感謝致しております。果してご家族の方々、またご親族の方々のご期待に添えましたかどうか自信はありませんが、戦前・戦後を通じての先生の一貫した精神生活をお偲びするよすがとしてご披見下されば幸いです。

昭和五十五年十二月二十六日

瀬上安正氏遺稿編集委員会

代表 片岡 健

昭和五十六年一月二十三日 五〇〇部 非売品

樹間の花

——瀬上安正 遺稿集——

編者 片岡健

発行所 瀬上安正氏遺稿集刊行会

熊本市城山大塘町一六一二

電話〇九六三―二九―三〇五四

印刷所 熊本林弘印刷株式会社

熊本市京町本丁六一二九



